

令和2年度

# 大学と附属学校園の共同研究報告書

令和3年2月

山 形 大 学

# 目 次

はじめに	1
I. 令和2年度 附属学校園における大学・学部との共同研究	
附属幼稚園	3
附属小学校	4
附属中学校	5
附属特別支援学校	6
II. 令和2年度 共同研究部会報告	
国語教育共同研究部会	8
算数・数学教育共同研究部会	13
理科教育共同研究部会	17
社会科教育共同研究部会	18
音楽教育共同研究部会	21
造形美術教育共同研究部会	27
保健体育教育共同研究部会	33
家政教育共同研究部会	38
外国語教育共同研究部会	47
幼児教育共同研究部会	68
学校外教育共同研究部会	69
道徳教育共同研究部会	73
生活科教育共同研究部会	77
特別支援教育共同研究部会	81
三浦グループ	81
大村グループ	85
養護共同研究部会	103
III. 大学・附属学校園共同研究部会申し合わせ	113
IV. 山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程	116
V. 附属学校運営組織図	120

## はじめに

山形大学附属学校では、「附属学校研究・連携推進委員会」の下に、「共同研究推進部会」「幼・小・中連携部会」「特別支援連携部会」の3つの部会を設置している。そのうち「共同研究推進部会」では、年度当初に共同研究のテーマを定め、研究活動を進めている。本年度は、各教科・領域ごとに15の「共同研究部会」を組織し、部会に参加している大学教員は山形大学地域教育文化学部を中心に延べ63名、附属学校園教員は延べ78名となる。本研究報告書は、2020年度に山形大学と附属学校との間で行われた共同研究活動の成果をまとめたものである（「幼・小・中連携部会」「特別支援連携部会」の活動については、『連携活動記録報告書』を参照されたい）。

2020年度は、新型コロナウイルス感染症対策に始まり、そして、最後まで余談を許さない状況の中で年度を終了しようとしている。「Withコロナ」の中で新しい生活様式を基本にした学校教育は、今後もしばらく続くものと思われる。予定した「遊びと学びのフォーラム」（幼稚園）や授業作り研修会（小学校、中学校、特別支援学校）が実施できない中で、部会ごとに共同研究テーマを設定し、研究を継続的に進めてきたことに敬意を表したい。

山形大学附属学校には、教員を養成するとともに地域の教員の研修の場となること、地域の教育に貢献できる研究を進め、普及することが使命としてあり、大学との共同研究を進めるにあたっては、国や県の動向に注視し、特に山形県教育委員会と連携、協力し、先進的かつ地域の公立学校のモデルとなるべく研究とその成果の発信に取り組んでいる。

令和2年度の文部科学省のGIGAスクール構想を受け、今後、将来構想の一環としてICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）環境整備を進め、園児・児童・生徒の日々の学習へのICT活用、ICTを導入した家庭・地域との情報ネットワークの構築、教員の働き方改革などを推進していかなければならない。また、広い視野と高い志を持ち、「共生社会」を創造的に生き抜くなど次代を担うことのできる人間を育成するため、郷土を基盤とした「グローバルシティズンシップ（地球市民）教育」を進めていく必要がある。今後は、大学・附属学校共同研究推進部会を中核にしつつも、教科横断的な教育テーマの推進にあたっては、小白川キャンパス3学部等との連携と協力を強化していきたいと考えている。

本報告書をご高覧いただき、忌憚のないご意見やご要望をいただければ幸いです。

令和3（2021）年2月

山形大学附属学校運営部部長 中井 義時

# I. 令和2年度 附属学校園における 大学・学部との共同研究



## 令和2年度 附属幼稚園における大学・学部との共同研究

山形大学附属幼稚園

本園における大学・学部との共同研究は、「本園の保育及び研究の推進」と「幼児教育に関する共同研究活動」に大別される。主な活動内容は以下の通りである。

### 1 本園の保育及び研究の推進

本園の研究テーマは、「遊びこむ子どもを育む」である。このテーマを具現化した保育の実践について、研究協議会や日常の保育等を通して、地域教育文化学部や大学院教育実践研究科の教員と研究協議を重ねてきた。 ※「遊びと学びフォーラム」及び研究協議会Ⅰはコロナ禍により中止

<共同研究者> (敬称略)

藤岡久美子・本島優子(地域教育文化学部)・三浦登志一(大学院教育実践研究科)

<領域別研究にかかわる連携> (敬称略)

三浦光哉(特別支援教育)・大森桂(食育)・佐藤博晴(英語活動)

本年度は、具体的に次のような保育実践研究の成果をあげた。

#### (1) 研究協議会における連携

研究協議会Ⅱを10月27日に実施し、子どもの育ち及び保育内容や方法、また研究主題「遊びこむ子どもを育む」(4年次)の取組みについて専門的な立場から指導・助言を受けた。また、研究協議会Ⅲを2月下旬に行い、今年度の研究の成果と課題を振り返るとともに、今後の研究の方向性について見通しをもつことができた。

#### (2) 特別支援教育における連携

特別支援教育について、専門的な立場から保育中の遊びの様子を見ていただき、幼児一人一人の特性や発達について共通理解することができた。また、個別の支援が必要な幼児についての研修会を行い、具体的な場面での適切な支援等について理解を深めるとともに、保護者との連携のあり方について助言を受けた。

### 2 幼児教育に関する共同研究活動

(1) 大森研究室の学生には、保育参観及び昼食指導等の参観後、実際に食育指導を行う機会を年間通して提供している。また、園児が食べる料理やおやつの調理、食育に関わる幼児の活動の支援・協力を依頼した。今年度は、山形の郷土食の一つである「菊」を園児に提供するなど、新たな取組みにも挑戦した。

(2) 佐藤研究室の学生には、年長児を対象としたワールドくらぶ(英語活動)への協力を依頼し、英語の歌やダンス、ゲーム中心とした活動を展開した。

(3) 芸術文化コースの学生にピクニックコンサート、音楽教室の開催を依頼した。コロナ禍により学生の発表機会がなくなっていたため、園児を対象とした演奏会が学生の活動意欲へとつながった。

(4) 学部生の卒業研究のための調査協力の受け入れを行っている。

以上のように、本学学生に日常の保育や行事等を参観したり、実際に参加したりする機会を積極的に提供し、幼児教育への理解を深めることに貢献している。

## 令和2年度 附属小学校における大学・学部との共同研究

山形大学附属小学校

令和2年度は、次の視点から大学・学部との共同研究が行われた。第1に本校の教育理論・実践に係る研究推進、第2に大学教員の教育理論に係る実験・検証、第3に学生・院生の研究課題の実証指導である。

### 1 本校の教育理論・実践に係る研究推進

本校の今年度の研究テーマは、「よりよい自分に向かって歩み続ける生き方が育つ学び」である。学習指導研究協議会および教科領域等研究協議会を中心に、以下の地域教育文化学部・教職大学院・教職研究総合センターの先生方と共同で研究に取り組んだ。

(敬称略)

国語	三上 英司、三浦 登志一 小川 雅子	図工	降旗 孝、小林 俊介
社会	江間 史明	家庭	石垣 和恵
算数	平林 真伊	体育	小松 恒誠
理科	今村 哲史、鈴木 宏昭、山科 勝	道徳	吉田 誠
生活	坂本 明美、野口 徹	タイム(総合)	中井 義時、高野 浩男
音楽	名倉 明子	外国語活動	佐藤 博晴、三枝 和彦、佐々木正彦
		研究全体	江間 史明、森田 智幸

### 2 大学教員の教育理論に係る実験・実証

- (1) 「主体的・対話的で深い学び」を実現する国語科授業の構想  
教職大学院 三浦 登志一先生と国語科教員
- (2) 社会的な見方・考え方と社会科のカリキュラム開発  
教職大学院 江間 史明先生と社会科教員
- (3) 理科における粒子概念の育成及び評価についての実践的研究  
地域教育文化学部 今村 哲史先生、鈴木 宏昭先生、山科 勝先生と理科科教員
- (4) 図画工作・美術教育における主体的・対話的で深い学びの実践研究  
地域教育文化学部 降旗 孝先生と図工科教員
- (5) 探究型学習で主体的・対話的で深い学びを作る  
地域教育文化学部 石垣 和恵先生と家庭科教員
- (6) コロナ禍における体育学習指導に関する研究  
地域教育文化学部 小松恒誠先生と体育科教員
- (7) 音楽的な見方・考え方を働かせるための教材開発と指導の工夫  
地域教育文化学部 佐川 馨先生と音楽科教員
- (8) 子どもの主体的な探究を促すための批判的探究的な教材分析方法  
地域教育文化学部 吉田 誠先生と道徳科教員

### 3 学生・院生の授業実践の指導と教育課題の実証指導

卒論・修論に係る教材開発、アンケート協力等 (複数 教科・領域等)

## 令和二年度 附属中学校における大学・学部との共同研究

山形大学附属中学校

令和二年度の大学との共同研究は、本校の任務でもある教育の理論・実践に関する研究と、その実験・検証に関するものである。具体的には、学校研究のテーマを柱とした、授業づくり研修会（11月）・校内授業研究会での実践研究と、大学教員の教育理論に関わる実験・検証である。

以下に概略を述べる。

### 1 学校研究のテーマを柱とした、授業づくり研修会（11月）・校内授業研究会での実践研究

「探究的な学びを通じた資質・能力の育成（1年次）」を柱とした授業づくり研修会をはじめ、地域教育文化学部・大学院教育実践研究科の先生方に、全体・各教科の共同研究を依頼し、授業づくり等に取り組んだ。なお、授業づくり研修会は5月・11月に開催する予定であったが、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で5月の研修会は中止とした。

全体	三浦登志一 野口 徹		
国語	三浦登志一	社会	江間史明 高 吉嬉
数学	大澤弘典 平林真伊	理科	今村哲史 津留俊英
音楽	佐川 馨	美術	降籬 孝
保健体育	渡邊信晃	技術	河合康則 ※元山形大学教授
英語	佐藤博晴	道徳	吉田 誠

### 2 その他

- (1) 大学教員との教育理論に係る研究協力（社会、美術）  
・教材開発や授業理論に関して、授業実践・授業協力等
- (2) 地域教育文化学部、医学部看護学科等での講義協力（美術、養護）
- (3) 卒業論文評価会において三浦登志一教授、栗山恭直教授による論文の講評（3学年）
- (4) 総合学習L I V E「山形が直面している課題に解決策を提案しよう」において  
山科 勝准教授、下平裕之教授によるプレゼンテーションの講評（2学年）
- (5) 「Be★らぼ～山大サイエンスカー～」において栗山恭直教授による実践（1学年）

# 令和2年度 附属特別支援学校における大学・学部との共同研究

山形大学附属特別支援学校

令和2年度の本校における共同研究は以下の通りである。

- (1) 全教員による実践研究である学校研究の推進。
- (2) 大学教員の研究理論に基づくグループ研究の実践・検証。

## 1 学校研究

「一人一人が生き生きと自己の学びを実感し生活していく姿を求めて～学習評価に基づいた主体的・対話的で深い学びの実現」の研究主題の下、大学院教育実践研究科及び地域教育文化学部の共同研究者に以下のように協力をいただき、今年度も子どもの内面に焦点をあて、授業改善につながる学習評価の視点から研究を進めた。

- (1) 全体計画、目標及び内容設定、授業場面、学習評価等の観点から改善視点の明示。
- (2) 各共同研究者の専門研究分野の視点から、論理的背景を明確化。

	共同研究者
全学部	教授 三浦 光哉      教授 大村 一史      准教授 本島 優子 講師 池田 綾乃

新研究1年次にあたり、研究主題をふまえた研究の推進及び授業づくりに関してご意見をいただきながら、授業づくり研修会（公開）を実施できた。

2年次に向けて、1年次の成果と課題を共有し、課題解決に向けたご意見をいただき、検討を進めている。

## 2 グループ研究

今年度は下記表の3グループである。各グループオンライン会議（Zoom）やメールによるやり取りを行いながら、対象児童生徒に関する指導・支援の実践や教材・教具の検討、実地見学等を重ね、研究を進めた。

グループ	本校教員数	研究テーマ
三浦グループ	4名	主体的・対話的で深い学びを意識した授業改善 ～教材・教具の検討～
大村グループ	6名	知的障害児に対する実行機能の制御を介した指導
安藤グループ	1名	学校外での学びを知る ～子ども・若者の多様な学びの支援の現状～

## Ⅱ. 令和2年度

### 共同研究部会報告

# 国語教育共同研究部会

研究テーマ：「主体的・対話的で深い学び」を実現する国語科授業の構想

## 1 部会員

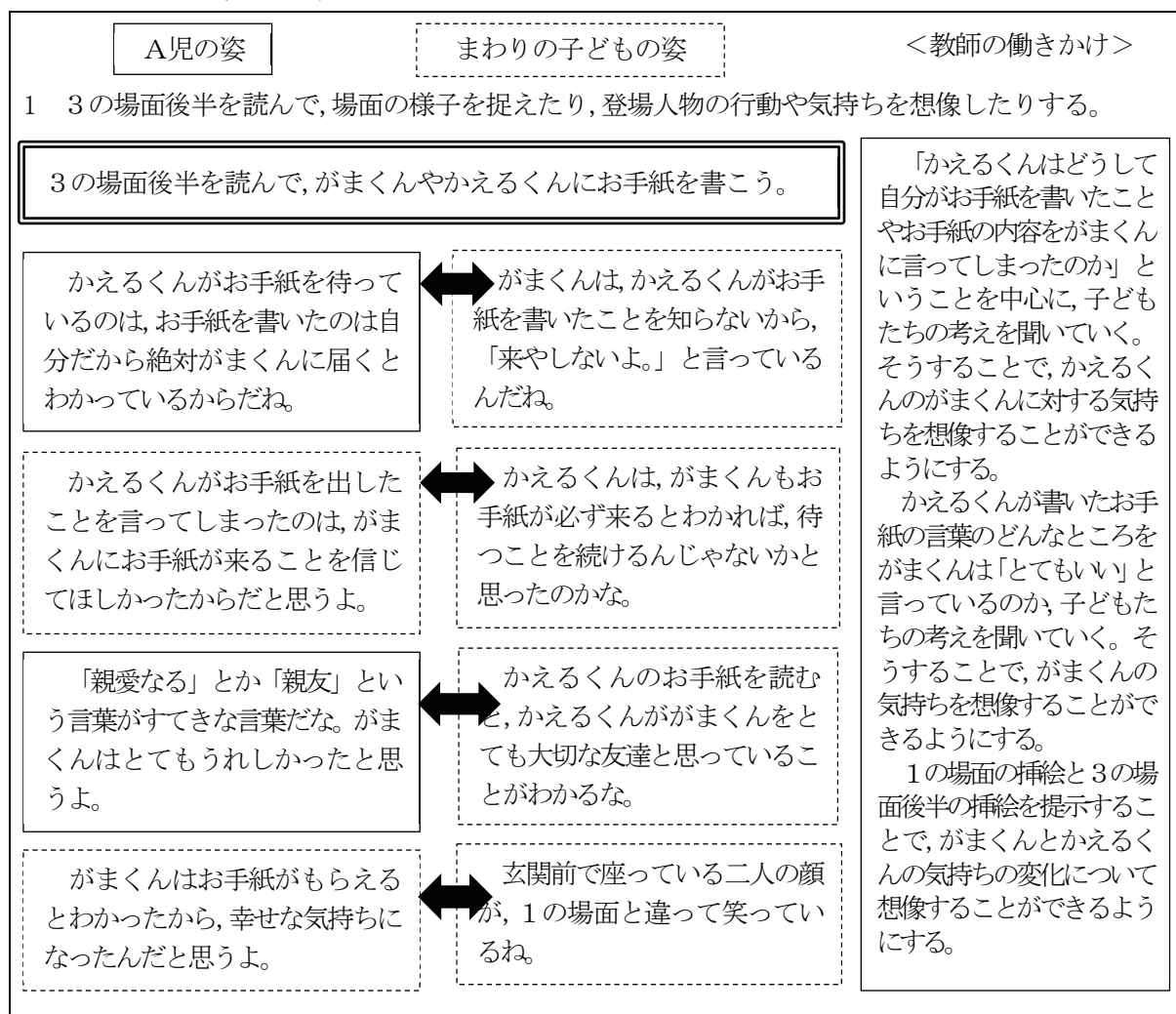
附属小学校 : 相澤 明菜 安孫子 力也 井上 麻美子 高橋 夏奈  
 附属中学校 : 今野 優実 櫻井 真理 須賀 学  
 地域教育文化学部 : 小川 雅子 坂喜 美佳 藤田 洋治 三上 英司  
 人文社会科学部 : 加藤 健司 教育実践研究科 : 三浦 登志一

## 2 提案授業に基づく研修会

(1) 提案授業 I (山形大学附属小学校)

①授業の概要 実施日：令和2年12月7日(月) 対象：山形大学附属小学校2年生  
 単元名：がまくんやかえるくんにお手紙を書こう ～自分と結び付けて読む～  
 授業者：井上麻美子

○予想される学びの展開



2 がまくんやかえるくんに手紙を書く。

ぼくは、がまくんやかえるくんとどんなところがつながるか。

かえるくんへ

かえるくんは、がまくんにお手紙がくることをしんじてほしくて、お手紙のことを話したんだよね。ぼくだったら、がまくんをよろこばせてくれないよにきてきたんだから、言わないかもしれないな。だけど、友だちをずっとかなしい気持ちのままにさせておくのもかわいそうだな。かえるくんもぼくみたいにまよったのかな。

がまくんやかえるくんに手紙を書く前に、「みんなは、がまくんやかえるくんとどんなところがつながるか。」と問いかけることで、自分の体験を思い起こしたり、「わたしだったら」と考えたりすることができるようにする。

3 友達が書いた手紙の内容を聞く。

Bさんは、お手紙をもらったときのうれしい気持ち、がまくんとつながるんだね。次の時間は、ぼくも今までの自分のこととつながるところを探しながら読んでみようかな。

がまくんへ

かえるくんがお手紙を書いてくれて、よかったね。わたしだったら、「やったあ。」と言ってとびはねるかもしれないよ。なかよしの友だちからお手紙をもらったとき、わたしはとてもうれしかったから。がまくんもきっと同じだよ。 (B児)

友達が書いた手紙の内容を聞く際に、「がまくんになって聞こう。」「かえるくんになって聞こう。」と声をかけることで、自分ががまくんやかえるくんを重ねて友達の発表を聞くことができるようにする。

○ 本単元で育む資質・能力を身に付けた子どもの姿

- ◇ 登場人物の行動や気持ちを表す言葉に着目して読んだり、自分の体験や気持ちを表す言葉や文章の中で使ったりすることができる子ども [知識及び技能]
- ◇ 文章を読んで理解したり、想像したりしたことに基づいて、自分の体験や気持ちと結び付けて感想をもつことができる子ども [思考力、判断力、表現力等]
- ◇ 登場人物と対話し、物語を自分と結び付けながら読もうとする子ども [学びに向かう力、人間性等]

②授業についての省察

〈成果〉

- ・単元全体を通して子どもたちが取り組む言語活動として設定した「手紙を書く」活動が、子どもたちの学習に有効に働いていた。メールや SNS などの簡易な発信は増えている中、実際の生活の場面で手紙を書くことは少なくなっている。そのような状況の中で生活していく子どもたちにとって、国語科の学習活動として「手紙を書く」活動に取り組みさせることの意義を再確認することができた。
- ・「手紙を書く」活動が子どもたちの学習意欲を喚起した要因として、二つのことが考えられる。第一には、学習にもちいた教材の題名が「お手紙」であり、言語活動として手紙を取り上げることに無理がなかったことが挙げられる。単元全体の課題である「お手紙で伝える」は教師が提示したものはあったのだが、「がまくん」と「かえるくん」が手紙のことで話を進めていく物語の展開と子ども

たちの活動に共通点があり、「自分たちも書きたい」という思いを生み出していた。第二には、手紙がやりとりされる実際的な場が教室内に用意されていたことである。授業者によって教室内に郵便ポストが用意されていた。子どもたちは自分が書いた手紙をポストに入れて授業が終わることになる。また、授業者は、子どもたちが登校する前に「がまくん」と「かえるくん」からの返事を入れておくという手立ても講じて、「返事が来たよ!」という子どもたちの喜びを引き出している。このような実際の動きを伴わせて学習したことが、意欲的な学習につながったと考えられる。

- ・手紙を出す相手を子どもたちの選択に委ねたことが、物語の展開に応じて手紙を書くことを可能にした。こうした言語活動を設定する場合、手紙を書く相手を限定することが考えられる。この授業について構想する過程でも、どちらかに固定した方が子どもたちは書きやすいのではないかということが検討された。いろいろ考えて行動する「かえるくん」に出す方が、子どもたちは共感しやすいのではないかという意見もあった。子どもたちの実際の授業の様子を見ると、手紙を出す相手を固定する子どもがいる一方で、場面によって変更する子どもも見られた。自己選択できる余地を残したことが、自分が感じたり考えたりしたことを書き表せる状況を作り出したと考えられる。
- ・手紙を書く際に用いることのできる言葉を提示したことが、学習が停滞しがちな子どもたちへの支援として機能している。子どもたちに提示されたのは、「わたしは」「わたしも」「わたしだったら」の三つの言葉である。授業では、書くことがスムーズに行かない子どもたちの何名かが、この言葉を使って書き出していた。自分と登場人物を比べたり、実際とは異なることを仮定したりする表現は、これ以降の学習にもつながることが期待できる。

#### 〈課題〉

- ・目標の到達点をどのように捉えるのかについて検討する必要がある。育成する資質・能力のうち、思考力・判断力・表現力等に関する目標を「文章を読んで理解したり、想像したりしたことに基づいて、自分の体験や気持ちと結び付けて感想をもつことができる子ども」としている。物語を読む学習に取り組ませる際に、「理解」をどこまで求めるのかを整理しておくことが必要である。ともすると、小学2年生に求めるレベルを超えて学習が展開されることになる。物語の内容を詳細に読解する学習そのものは否定されるものではない。しかし、設定した目標や言語活動に関わらず、子どもたちの理解や関心の状況との関係が曖昧なまま、内容の理解が授業で求められる点は改善していくことが大切である。

## (2) 提案授業Ⅱ (山形大学附属中学校)

- ①授業の概要 実施日：令和2年11月12日(木) 対象：山形大学附属中学校1年生  
単元名：『『不便』の価値を見つめ直す』を読んで自分の考えを確かなものにする  
～「不便」の価値を自分なりに見つめ直して投書する～  
授業者：櫻井真理

### ○単元の目標

- (1) 原因と結果、意見と根拠など情報と情報の関係について理解を深めることができる。  
[知識及び技能] (2) ア
- (2) 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものに行うことができる。



〔思考力,判断力,表現力等〕C(1)オ

(3) 言葉がもつ価値を認識するとともに,読書を生活に役立て,我が国の言語文化を大切に,思いや考えを伝えようとする。 「学びに向かう力,人間性等」

○単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①原因と結果,意見と根拠など情報と情報の関係について理解を深めている。(2)ア	①「読むこと」において,文章を読んで理解したことに基づいて,自分の考えを確かなものにすることができる。C(1)オ	①自分の考えを確かなものにするために,粘り強く文章を読み返し,必要な情報に着目して,内容を解釈している。

○指導と評価の計画

	主たる学習活動	指導上の留意点	評価方法 (評価方法)
1	<p>学習のねらいや進め方をつかみ,学習の見通しをもつ。</p> <p>『「不便」の価値を見つめ直す』を読み,筆者の考えについて,賛成か反対か自分の考えをもつ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日常生活の中で「不便」と感じられることを出し合い,生活の中で根付いた言葉のイメージを明らかにさせる。</li> <li>発展途上国の資料を提示し,写真資料を提示し,工業製品の恩恵を受けられる生活環境にあることを意識させる。</li> <li>『「便利すぎる?社会」(朝日新聞デジタル)』を読み,投書を寄せた人々が「便利」をどのように捉えているかを知らせる。</li> <li>中学生が書いた投書をいくつか示し,学習の見通しを持たせる。</li> <li>自分の考えをもつ根拠となった部分に線を引く。</li> </ul>	<p>本時は,C(2)アに基づいて学習状況を捉え指導を行うが,単元の目標としていないことから,本単元の評価には含めない</p>
2	<p>『「不便」の価値を見つめ直す』をもう一度読み,筆者の考えに賛成か反対かを考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『「不便益のススメ」』を読み,「不便益」の考えを踏まえて実際に開発されたものについての補助資料を読ませる。</li> <li>本文をもう一度もう一度読み返して,筆者の考えに賛成か反対かを考えさせる。</li> </ul>	<p>〔知識・技能〕① (本文,付箋への書き込み) ここでは,自分の考えを確かなものにするために,必要な情報に着目して,内容を解釈し,付箋に考えたことを書いているかを確認する。</p>

3 (本時)	<p>『『不便』の価値を見つめ直す』をもう一度読み、筆者の考えへの賛成か反対かを明らかにして語り合う。</p> <p>投書に書きたい自分の考えと根拠とした部分、具体的な出来事や事例をワークシートに書き、整理する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>語り合う際には、付箋に書いた自分の考えの根拠となった部分にはりながら伝えるようにし、語り合うメンバーの考えや根拠とした部分を俯瞰して見られるようにする。</li> <li>「筆者は『～…』とは述べていたが」、「筆者が『～…』と言う通り」などの形で、賛成か反対かの根拠となる部分を記述させる。</li> </ul>	<p>[主体的に学習に取り組む態度] ① (観察)</p> <p>ここでは、『『不便』の価値を見つめ直す』を読み、賛成か反対かの根拠を明らかにしながら考えたことを語り合っているかを確認する。</p>
4	<p>ワークシートに整理した内容を基に、400字以上600字以内で投書を書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『『不便』の価値を見つめ直す』を読み、賛成か反対か、立場を明確にして投書を書かせる。</li> </ul>	<p>[思考・判断・表現] ① (ワークシート)</p> <p>ここでは、賛成か反対かの根拠を明らかにしながら自分の考えを書いているかを確認する。</p>

## ②授業についての省察

### 〈成果〉

- 『『不便』の価値を見つめ直す』という学習課題の設定が、子どもたちの学習への意欲を高めていた。通常は価値のないものと考えている「不便」という感じ方を、「価値あるもの」として捉える学習は、自分たちの価値観を問い直すきっかけとなっていた。授業者が取り上げた説明的な文章は、令和3年度からの中学校教科書に掲載されるものである。その文章の教材性を的確に捉えての授業実践は、今後の中学校での実践への貴重な情報提供となる。モデルとして、学習課題や単元構成を示すことができ、附属学校が果たすべき役割を果たしたものとして評価することができる。
- 言葉による見方・考え方を活かして、未知の概念を獲得していく授業が実現できるようになっている。「不便益」という言葉は子どもたちが初めて聞く言葉である。そのような言葉に出合った時に、どのようにしてその意味を獲得していくのが課題になる。話題になっていることに合わせて、同じ著者が書いた他の文章や新聞などの資料を用意し、何を手がかりにして考えればよいのかのモデルを提示している。実際の学習の中に、子どもたちが用意した資料を用いて検討する過程し、それぞれの判断で取捨選択する場を設定することが大切であると考えられる。
- 実際の社会生活と結び付けて授業を構想したことが効果的であった。学習のゴールとして「新聞の投書欄に投書する」ことを掲げた。投書では、自分の意見が読み手に理解してもらえるように、文章の書き方を工夫する必要がある。実際に、子どもたちの投書は数日間にわたって山形新聞の投書欄に掲載された。社会生活との結び付きを実感したことは、子どもたちのこれからの学習にも生きるものと考えられる。

### 〈課題〉

- 子どもたちの実態を踏まえて学習を構想することが重要である。附属中学校の子どもたちは、生活場面で不便と感じていることが少ないということが、授業を通して分かってきた。このような子どもたちの場合、自分が不便と感じていることを授業の出発点に置いても、実感を持ちにくい状況が生まれることになる。「自分の」という制限を取り払って学習課題を設定するなど、子どもたちの実態に応じて工夫していく必要があることが、改めて明らかになった。

## 算数・数学教育共同研究部会

### 1. 研究テーマ

数学的に考える資質・能力を育む算数・数学の学習指導

### 2. 部会員

地域教育文化学部：皆川宏之，中西正樹，坂口隆之，平林真伊（部会長）

教育実践研究科：大澤弘典

附属小学校：川田大，成澤結香里，大澤仁，奥山恭平

附属中学校：齋藤太一，鈴木克希，我孫子正志

### 3. 提案授業に基づく研究協議会

#### 提案授業 I

実施日：令和2年8月27日（木）

会場：山形大学附属中学校

題材：円

対象：山形大学附属中学校3年生

授業者：齋藤太一

本時の指導

(1) 目標 3つの平行線上に頂点を持つ正三角形を、既習事項を利用してかくことができる。

(2) 過程

学習活動【学習形態】	・指導上の留意点 ☆探究的な学びの姿
<b>課題</b> 3つの平行線上に頂点を持つ正三角形は作図できるだろうか	
1. 課題を把握し、作図する方法を考える。 <b>【個】</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題を把握しやすくするために、間隔が等しい3つの平行線を例にして説明する。その後、間隔を変えることで一般化を図る。</li> <li>・これまで学習した図形の性質に着目させるために、既習事項を確認する時間を取る。</li> </ul>
2. 自分の考えを発表し、必要であれば修正しながら作図する。 <b>【グループ→斉】</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・充実した話し合い活動をさせるために、話す側と聞く側の意識について確認をしてから話し合い活動に移る。話す側は考えている途中であっても、どこまでわかっているか、何が課題なのかを明確に話すこと、聞く側は、批判的な目をもって話を聞くことを確認する。</li> <li>・根拠を明らかにして発言することができるようにするために、お互いが発表する時に、曖昧なところはなぜそうなるのかを一つひとつ確認しながら発表を進めるよう促す。</li> </ul>

<p>☆探究的な学びの姿</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3つの平行線上に頂点を持つ正三角形を作図する活動を通して、既習事項の活かしどころを見だし、仲間と考えを交流しながら自分なりに解決しようとしている。</li> <li>・ 等間隔の平行線に単純化して考えたものと間隔の違う平行線の場合とを比較して考えると、合同な三角形が見えてくる。</li> <li>・ <math>60^\circ</math> の角をいくつかかいていくと、正三角形らしい三角形を作図することができる。円周角の定理や、円周角の定理の逆を利用して、正三角形であることを証明することができる。</li> </ul>	
<p>3. 本時のまとめと振り返りをする。</p> <p style="text-align: center;">【一斉】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 既習事項とのつながりを意識づけるために、考えた作図の過程を振り返る。</li> </ul>

(3) 評価とその方法

- ・ 3つの平行線上に頂点を持つ正三角形を、既習事項を利用して作図することができるかを、ワークシートへの記入の状況や、グループ・一斉での活動や話し合いの発言の内容から評価する。

提案授業Ⅱ

実施日：令和2年8月27日（木）

会場：山形大学附属中学校

題材：比例, 反比例

対象：山形大学附属中学校1年生

授業者：我孫子正志

本時の指導

- (1) 目標 折り重ねる回数と分けられる枚数の二つの数量の関係を、表や式に表すことで、その変化や対応の特徴を捉え、分けられる枚数を求めることができる。
- (2) 過程

学習活動【学習形態】	指導上の留意点 ☆探究的な学びの姿
<p>1. 紙を折り重ねて切ったとき、何枚の紙になるかを考える。【一斉】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒自身の課題となり、探究的で深い学びにつなげるために、簡単な問題で紙の枚数を予想させたり、実際に紙を切らせたり、5回重ねて切ること、数えることの困難さを考えさせる。</li> </ul>
<p>課題 ①紙を5回折り重ねて切ったとき、分けられる紙は何枚になりますか。</p> <p>②紙を <math>x</math> 回折り重ねて切ったとき、分けられる紙の枚数を <math>y</math> 枚としたとき、<math>y</math> を <math>x</math> の式で表すことはできますか。</p>	

<p>2. 折る重ねる回数にもなって変化する他の数量を考え、そこから紙の枚数を考える。</p>	<p>・これから関数分野を学んでいく上で重要な「表・式・グラフ」の3つの要素をより明確にするために、指導者が与えるのではなく、生徒との対話を通して引き出したい。</p> <table border="1" data-bbox="528 365 1177 461"> <tr> <td>折り重ねる回数 <math>x</math> 回</td> <td>1</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>4</td> <td>5</td> <td><math>x</math></td> </tr> <tr> <td>分けられる枚数 <math>y</math> 回</td> <td>3</td> <td>5</td> <td>9</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table> <p>・分けられる紙の枚数 <math>y</math> を折り重ねる回数%の式で表すために、折り重ねる回数にもなって変化する他の数量やそれらの関係を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・折り目の数</li> <li>・切る箇所の数 など</li> </ul>	折り重ねる回数 $x$ 回	1	2	3	4	5	$x$	分けられる枚数 $y$ 回	3	5	9																	
折り重ねる回数 $x$ 回	1	2	3	4	5	$x$																							
分けられる枚数 $y$ 回	3	5	9																										
<p>☆探究的な学びの姿</p> <p>折り重ねる回数を <math>x</math>、分けられる紙の枚数を <math>y</math> 枚として、<math>x</math> と <math>y</math> の関係を表や式を用いて表すとき、折り重ねる回数にもなって変化する他の数量を考え、その数量との関係を見ながら、<math>y</math> を <math>x</math> の式で表そうとしているか。</p> <table border="1" data-bbox="225 936 970 1032"> <tr> <td>折り重ねる回数 <math>x</math> 回</td> <td>1</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>4</td> <td>5</td> <td><math>x</math></td> </tr> <tr> <td>折り目の数</td> <td>1</td> <td>3</td> <td>7</td> <td>15</td> <td>31</td> <td></td> </tr> </table> <p>・折り目の数は2, 4, 8, 16 (<math>\times 2</math>) と増えていく。</p> <table border="1" data-bbox="225 1122 1038 1218"> <tr> <td>折り重ねる回数 <math>x</math> 回</td> <td>1</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>4</td> <td>5</td> <td><math>x</math></td> </tr> <tr> <td>切る箇所の数</td> <td>2</td> <td>4</td> <td>8</td> <td>16</td> <td>32</td> <td><math>y = 2^x</math></td> </tr> </table> <p>・切る箇所数は (<math>\times 2</math>) ずつ大きくなる</p>		折り重ねる回数 $x$ 回	1	2	3	4	5	$x$	折り目の数	1	3	7	15	31		折り重ねる回数 $x$ 回	1	2	3	4	5	$x$	切る箇所の数	2	4	8	16	32	$y = 2^x$
折り重ねる回数 $x$ 回	1	2	3	4	5	$x$																							
折り目の数	1	3	7	15	31																								
折り重ねる回数 $x$ 回	1	2	3	4	5	$x$																							
切る箇所の数	2	4	8	16	32	$y = 2^x$																							
<p>3. <math>y</math> を <math>x</math> の式で表す。 【一斉】</p> <p>4. 本時を振り返る。 【一斉】</p>	<p>・机間指導から様々な生徒の思考を見とり、生徒に考えを発表させる。</p> <table border="1" data-bbox="528 1375 1347 1518"> <tr> <td>折り重ねる回数 <math>x</math> 回</td> <td>1</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>4</td> <td>5</td> <td><math>x</math></td> </tr> <tr> <td>切る箇所の数</td> <td>2</td> <td>4</td> <td>8</td> <td>16</td> <td>32</td> <td><math>y = 2^x</math></td> </tr> <tr> <td>分けられる枚数 <math>y</math> 回</td> <td>3</td> <td>5</td> <td>9</td> <td>17</td> <td>33</td> <td><math>y = 2^x + 1</math></td> </tr> </table> <p>・日常生活に潜む関数の関係に目を向けることができるようにするために、このような例、または、これから考えてみたい関数の関係が他に何か考え合う。</p>	折り重ねる回数 $x$ 回	1	2	3	4	5	$x$	切る箇所の数	2	4	8	16	32	$y = 2^x$	分けられる枚数 $y$ 回	3	5	9	17	33	$y = 2^x + 1$							
折り重ねる回数 $x$ 回	1	2	3	4	5	$x$																							
切る箇所の数	2	4	8	16	32	$y = 2^x$																							
分けられる枚数 $y$ 回	3	5	9	17	33	$y = 2^x + 1$																							

(3) 評価とその方法

- ・折り重ねる回数  $x$  回にもなって変化する数量に着目しながら、分けられる紙の枚数  $y$  枚を、 $x$  を使って式で表そうとしているかを、活動2の様子を見て評価する。また、ノートに記入されている生徒の思考を見とり評価する。

提案授業Ⅲ

実施日：令和元年11月13日（水）

会場：山形大学附属中学校

題材：データの分布 四分位数と箱ひげ図

対象：山形大学附属中学校3年生

授業者：鈴木克希

本時の指導

(1) 目標 テーマを検証するために実測したデータを整理・分析し、その結果を批判的に考察することができる。

(2) 過程

学習活動【学習形態】	・指導上の留意点 ☆評価規準（評価方法）、目標を達成した生徒の姿
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">                     課題 実測したデータを整理・分析し、そこからわかることを説明しよう。                 </div>	
<p>1. 各班のテーマと実測したデータを確認する。 【個】</p> <p>2. 実測した数値を整理・分析して考察する。 【グループ】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の班の実測したデータと、他の班の実測したデータを比べて考察することにも目をむけさせるために、整理・分析に入る前に、どんなデータを持っているかを確認させる。</li> <li>・アプリ「GeoGebra」を用いて、箱ひげ図やヒストグラムを作り、そこからわかることについて整理・分析を行わせる。</li> <li>・他の班のデータと比較しさらに批判的に考察するために、googleのスプレッドシートの共有の機能を用いる。</li> <li>・箱ひげ図を用いずに、ヒストグラムや折れ線グラフのみを用いている班には、複数のデータを比較させ、箱ひげ図を作ると比べやすいことに気付かせる。</li> <li>・データを処理して考察する際に、「どのような情報を用いたのか」「どのような点に着目し、どのような傾向を捉えたか」「どのように判断したのか」という観点を示す。</li> </ul>
<p>☆思考・判断・表現（グループ活動の様子を観察、プリントの記述）</p> <p>次のような説明をしたり、様々なデータを比較し、批判的に考察している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・テーマについて箱ひげ図を用いて4つのデータを比べると、四分位範囲の数値が高いので、通信速度はこの時間帯が一番速いと判断できる。</li> <li>・テーマについて自分の班のデータと他の班のデータを比べると同じような結果となった。これは、通信の容量がまだ余っていて回線に余裕があるからではないか。</li> <li>・テーマについてインターネット上に掲載されているデータと比較すると確かに仮定が成り立つが、測定した場所が違うので、必ずそうなるかはわからないのではないか。</li> </ul>	
<p>3. 本時を振り返る。 【個】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際の社会では、過去のデータを分析し、未知の事柄を予測して判断する場面が多くあることを伝え、その必要性に気付かせる。</li> </ul>

## 科学的探究能力の育成を目指した理科授業の構築と教材開発

### I. 2020 年度 理科部会における共同研究について

理科代表 今村 哲史（大学院教育実践研究科主担当）

#### 1. はじめに

平成 29 年度（2017 年度）に各学校の学習指導要領が改訂され、小学校は今年度、中学校は来年度から完全実施となっている。今回の改訂において、理科では「科学的探究能力」（小学校は「問題解決の力」）の育成が重要なポイントの一つとなっている。科学的探究は、半世紀以上も前から理科の授業展開の柱となる重要な観点であるとともに、単なる観察・実験の操作技能ではなく、科学的な思考を基盤として問題解決をする重要な能力でもある。そこで今年度の理科部会では、昨年度のテーマを発展させて、大学と附属学校園との共同研究テーマを「科学的探究能力の育成を目指した理科授業の構築と教材開発」とした。

#### 2. 今年度の共同研究の取り組み

##### (1) 理科部会の構成員

今年度（2020 年度）は、次の表 1 に示す通り、附属中学校で 1 名の新しい部会員を迎え、計 14 名の体制となった。

表 1. 令和元年度研究部会(理科)の部会員

大 学（地域教育文化学部）	附属小学校	附属中学校
今村哲史・加藤良一・大友幸子・津留俊英・山科 勝・鈴木宏昭・後藤みな	渡邊弘晶・高橋 茜・神保諒一・(後藤啓太)	矢作創己*・大沼康平・笹原佳苗

\*印は今年度からの新しいメンバー

##### (2) 共同研究の取り組み

今年度の共同研究では、以下の表 2 に示す通り、大学教員が附属学校主催の「授業づくり研修会」の共同研究者としての協力、大学の学部学生の研究への協力、大学教員と附属学校教員との共同研究の成果発表であった。なお、附属小学校での研修会では、新型コロナウイルスの影響により、オンラインにて理科の授業研究会を実施し、他校の教員等とともに議論しながら考察した。

表 2. 令和2年度研究部会(理科)における共同研究・研究協力の概要

共同研究・研究協力	附属小学校	附属中学校
1) 大学教員との共同研究	・授業づくり研修会 ・共同研究成果の学会発表	・授業づくり研修会
2) 学部学生の研究への協力	・授業参観及び分析 ・児童の実態調査	・授業参観及び分析 ・生徒の実態調査

# 社会科教育共同研究会

## —社会科における「探究的な学び」—

山形大学大学院教育実践研究科

江間 史明

### 1. 2020年度社会科共同研究会

- 研究テーマ 社会科における「探究的な学び」
- 部会員の確認
  - ・ 大学学部：八木浩司，高吉嬉，松本大理，大喜直彦
  - ・ 大学院教育実践研究科：江間史明，村山良之
  - ・ 附属小学校：青柳孝一、鈴木譲二
  - ・ 附属中学校：関東朋之，大隅一浩，多田渉

### 2. 附属学校の授業づくり研修会等での共同研究授業

#### (1) 附属小学校

- ① 2020年6月19日(金)：授業づくり研修会 新型コロナウイルス感染拡大により中止
- ② 2020年6月25日(金)：  
青柳孝一 4年 「安全がわたしたちの安心につながるのか考えよう  
—水害からくらしを守る—」  
2020年7月3日(金) 教職大学院「授業実践の記録・分析と校内研修」  
オンライン(Zoom)でストップモーション検討を実施  
2020年7月13日(月) 附属小第1回校内授業研でストップモーションによる意見交換  
6月25日の授業を各自が youtube で視聴。授業研に参加。
- ③ 2020年10月28日(水)：  
鈴木譲二 5年 「水産業を経済的に考える —まぐろの水揚げが盛んな塩竈—」  
2020年11月6日(金) 授業づくり研修会 (授業は youtube 配信、Zoom を利用した事後研)

#### (2) 附属中学校

- ①2020年5月29日(金)：授業づくり研修会 新型コロナウイルス感染拡大により中止
- ②2020年11月13日(金)：授業づくり研修会  
多田渉 3年公民「地方自治 —山形市の人口減少対策を市長に提案しよう—」

### 3. コメント

2020年度は、新型コロナウイルス(COVID-19)の感染拡大により、2月28日の政府の一斉休校の要請から、緊急事態宣言の発出(4月7日～5月25日)があった。結果として、学校と大学は、3月から6月初旬まで、休校を余儀なくされた。この間におきたことは3つある。一つ目は、子どもや学生が学校や



大学に登校せず、自宅で学習を自主的に進めなければならない状況になったことである。二つ目は、小中学校の教師が家庭への電話連絡や学習課題の提示を行ったことである。大学では、オンライン授業が行われた。三つ目は、文科省のGIGAスクール構想に見られるように、一人一台のオンライン教育の実施が急激に進行したことである。この点について、中央教育審議会は、2021年1月26日に『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)を出している。そのなかには、次の指摘がある。

- ・教師が対面指導と遠隔・オンライン教育 とを使いこなす(ハイブリッド化)ことで、様々な課題を解決し、教育の質を向上させる。
- ・教師による対面指導や子供同士による学び合い、多様な体験活動の重要性が一層高まる中で、ICTを活用しながら協働的な学びを実現し、多様な他者とともに問題発見・解決に挑む資質・能力を育成する。

対面授業とオンライン教育のハイブリッドは、今後の課題のひとつとして位置づけることができる。

こうした中で、2020年度社会科教育共同研究部会では、大学側の江間史明教授と高吉嬉教授が中心となって、附属小・中学校の社会科教員と一緒に共同研究を進め、今年の研究テーマである「社会科における『探究的な学び』」を追究してきた。

今年度の共同部会の活動としては、次の2点を指摘できる。

第一に、新型コロナウイルス禍の状況で、対面とオンラインのハイブリッドの実践研究を模索したことである。附属小学校では、研究授業を大学の研究者を含めて教科部会の教員を中心に参観し、その授業映像をyoutube配信することで、研究授業の学級が参観する教員で密になることを避けた。その授業映像をもとに、大学院の授業で授業研究を試行し、附属小の校内授業研究会をしたり、学外の参加者を含めたZoomでの事後研究会を実施したりした。制約された条件の一方、従来、研究授業をじっくり見たり見返したりする機会がなかった教員は、自分の選んだ時間に授業を視聴できるというメリットもあった。今後、中教審答申にあるように、オンライン教育が当たり前になり、オンラインと対面授業とのハイブリッドが問われる状況で、授業研究の新たな可能性を検討する機会となった。

第二に、昨年度に引き続き、小学校と中学校の教材開発にあたって、大学の研究者と附属学校の教員が、事前に連携して教材研究をすすめたことである。

小学校の2つの実践は、いずれも中核概念を位置づけた単元開発に取り組んだものである。小学校4年の防災の単元は「安心」「安全」の概念を位置づけて、山形市の新しいハザードマップの意味を考えることを試みた。ハザードマップに描かれた「安全」な地域は予想であることや、この「安全」が「安心」にすぐ結びつかないことに子どもは目を向けていた。

小学校5年の水産業の単元は、宮城県塩竈のまぐろ市場を取り上げ、「分業・消費者のニーズ・生産者のもうけ」について考えることを試みた。この5年生は、「工業」単元を先に学んでいる。その学習で学んだ概念を活用して、子どもは、魚市場を次のように捉えていた。

「プロがそれぞれの仕事をする。工業の分業に似ている。」「マグロがいつもおいしいのは、たくさんの人が力を合わせてスピードをはやくしているからだと思った。自動車の関連工場みたい。小さ

な会社がたくさん集まっているから。」  
そして、魚市場の機能を次のように捉えていた。

「魚市場は水産業の土台をつくっている。水揚げされてから一番最初に運ばれて、一番最初に値段を決めるところだから。」「魚市場はなくならないでほしい。ほかのところのお金は増えるけど、マグロの正確な値段やおいしいものがわかる人がいなくなる。」

水産業を通して、小学生が、市場の価格形成について学ぶことができる可能性が示唆された。

中学校では、中学3年公民で、山形市の人口減少を主題に、政策の提案と評価をグループで行う実践を展開した。参観した学級では、結果的に、「今、山形市のベトナム人の人口増加が著しい」などの現状分析が明確なグループの提案が、最多得票を得ていた。現状を変更する政策は、次の3つの視点から考えることができる。内因性（今、なんらかの問題があること）・重要性（その問題が深刻であること）・解決性（問題が、その行動によって解決すること）の3つである。根拠や理由も、このフレームにそって考えることで、吟味することができる。

生徒が取り組む活動において、どのような社会的な見方（中核概念）と考え方（認識・表現の方法）を生徒に身に付けさせようとするのか。単元を見通した学習の場の設計を、引き続き考えていく課題を指摘できる。

# 2020年度 音楽教育共同研究部会報告

## 1. 研究テーマ

音楽的な見方・考え方を働かせるための教材開発と指導の工夫

## 2. 部会員

地域教育文化学部：佐川馨、渡辺修身、三輪郁、名倉明子

附属小学校：長岡初美、嵐田史子

附属中学校：渋谷知宏

## 3. 研究報告

### [研究テーマについて]

「見方・考え方」は、今次の学習指導要領の改訂に先立って、中教審答申（平成28年12月）において「特別の教科である道徳」を除いて全ての教科に掲げられたキーワード文言である。これは「各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方」のことであり、「各教科等の学習の中で働くだけでなく、大人になって生活していくに当たっても重要な働きをするもの」と示されている。音楽科で考えれば、音楽の授業で身に付けた音楽的感性や技能等の資質・能力を授業の中で活用し磨き上げていくだけでなく、それを生涯にわたって音楽を楽しんでいくための諸能力へと繋げていくことが期待されるものといえる。

この「見方・考え方」は学習指導要領の各教科の目標の重要なキーワードとして盛り込まれた。たとえば中学校の目標では「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」と示されている。ここでの「音楽的な見方・考え方」は校種により若干の違いはあるが、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること」であり、これまでも大切にされてきた音楽を捉える視点や思考の在り方、関わり方を整理したものといえる。

これを大学の専門教育にそのまま当てはめる訳にはいかないが、前述の中教審答申において「知性だけでは捉えられないことを、身体を通して、知性と感性を融合させながら捉えていくことが、他教科以上に芸術系教科・科目が担っている学びである」と強調されていることを踏まえ、さらには同答申の「見方・考え方」を支える三つの資質・能力（「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」）に着目することは、附属各校及び大学の授業改善及び教育の成果向上にも繋がるものと考え、本研究テーマを設定した。

### (1) 「初等教科教育法（音楽）」における「音楽的な見方・考え方」を働かせるための指導の工夫

音楽教育：佐川 馨

「初等教科教育法（音楽）」は小学校免許取得のための必修科目である。授業の目的は小学校音楽科の指導をするための基礎的な知識・技能等を身に付けることであるが、筆者が最も大切にしていること

は学生個々の「これまでの音楽経験の中での苦しいことやつらいことを忘れ、音楽は生活を明るく豊かにするものだということを実感した上で、将来の教職生活において生きて働く力を身に付けてもらうこと」である。この授業を通して芽生え始めた学校音楽に対する期待や友人たちとの学び合いを通して働き始めた音や音楽に対する感性の働きは、子供たちに対しての豊かな音楽教育力へと繋がっていくことが期待できる。次例は授業内での取り組みの一例である。毎回の授業冒頭に『きらきら星』と『メリーさんのひつじ』の変奏曲に合わせて体ほぐしに取り組みながら、音楽の諸要素や仕組みを耳と身体と心で理解することを目指した。

《きらきら星》の体ほぐしーラジオ体操風ー

フランス民謡

前奏 1小節 → 【2拍で脚を振って脚を曲げ伸ばす】 × 8回

**Moderato**

1拍を回す運動ー2拍で両腕1ー2拍で外回し1 × 4回

【1拍で脚を振る】 × 4回 → 【1拍で両手を背いて1拍で閉じる】 × 2回、 × 2回

**Allegro**

【4拍で体を左(右)に曲げる】 → 【2拍で戻し体の振りをたたく】 × 2回

【4拍で体を前後に曲げる】 → 【4拍で体を動かす】 × 2回

**Andante**

Fine

Source 流行歌

《メリーさんのひつじ》の体ほぐし

★元氣よく腕を振りながら足踏みを楽しもう。

**Allegro** *gato* ----- 足も手の前口は腕、1オクターブ上

★足踏みながら腕を振りながら足踏みを楽しもう。

**Andante**

★足踏みながら腕を振りながら足踏みを楽しもう。

## (2) 音楽的な見方・考え方を働かせるための教材開発と指導の工夫～「合奏基礎演習」を通して～

指揮：渡辺修身

「合奏基礎演習」は「管弦打楽器奏法基礎」「管弦打楽器奏法応用演習」で学んだオーケストラ楽器奏法を基に、合奏を通してアンサンブル能力を高めるための授業であり、文化創生コースの音楽教員免許(中・高)取得のための必修科目として2年後期に開講している。

コロナ禍のため、前期は全てオンライン授業であったが、後期は対面授業が可能となったため、考えられる限りの万全な対策を行いながらの実践となった。まず、弦楽器、打楽器はマスクを着用し、管楽器は吹奏時以外においてマスクを着用して演奏した。分奏を基本にした練習計画を作成して運営したが、トゥッティ(総奏)練習の時には、ソーシャルディスタントを取りつつ、管楽器は可能な限りパーテーションで間仕切りをして演奏を行った。大学院の履修者とTAを副指揮者として、弦分奏と管分奏のために、二つの会場に分かれて行う練習にそれぞれ立ち会ってもらい、筆者は二つの会場をローテーションで指導を行い、3回から4回につき1回程度をトゥッティ演奏でまとめていく手順で行った。例年この授業は、上級生たちが賛助で参加し、履修者の足りないパートを補いつつ、管弦楽作品を演奏してきた。しかし、今回はこの状況下における、授業を行う学内の文化ホールの会場の広さに対する使用人数の制

限があったため、履修者のみと指導者合わせて約20名で活動を行った。音楽的な見方・考え方を働かせるための教材開発の観点から、ビゼー作曲『カルメン組曲 第1番』を課題に取り上げた。履修者が少ないため、スコア通りに楽器が揃わないパートについては、履修者が3人いたフルートパートに、オーボエやイングリッシュホルンのパートを担当してもらい、ハープはピアノで代用するなどの工夫をして演奏した。

特に弦楽器において、オーケストラ楽器演奏の経験が浅い履修者もいる中で、例年に比べて、授業に対するモチベーションが高く感じられ、非常に有意義な授業となった。今後も、可能な限りの対策をしながら、授業を行っていきたい。

### (3) ピアノ教育における教材開発と指導法について～「アンサンブル基礎」を通して

ピアノ：三輪 郁

『自らの奏でる音を聴きながら紡いで音楽にする』…これこそが演奏上一番大切である中、今年度は残念ながら発せられた音を同じ空間で聴き、指導することの出来ない時間が長く続いた。オンラインによりデジタルという媒体を通すことによって強音がカットされたり、逆に弱音が必要以上に拾われてしまって、熱演の様子は見て取れるものの実際の強弱の差が如何許りなのか分からないことに加え、ペダルや指を使って保続されるべき音が途中で聞こえなくなってしまうなどの弊害があったことは否めない。初めて耳ではなく、画面上の学生の姿に目を凝らして、こうなっているであろうと想像力を膨らませながらの指導となった。再び対面での指導を行ってみると、やはりコロナ禍に於いて気持ち良く楽器を鳴らす事を忘れてしまっている学生が多く見受けられた。まずは音を空間に解き放つ感覚を取り戻すことも、今年度の指導上特記すべきこととなった。

また、音から得る情報に対し、耳からだけではなく実際なぜそうなるのかを目でも確認しながら指導する大切さに気付かされた。例えば指遣い（運指）である。流れが悪い、音が切れる、思うように旋律を歌う事が出来ない、音が覚えられない、間違える。これらは、的確ではない指遣いに起因する事が多い。十人十色の体格で、各々使い勝手の悪い指（弱い、動きにくいなど）はあるものの、次のフレーズや音域の移動などによって使うべき指遣いがあり、それを必要であれば個々に合ったものを一緒に考えて変え、納得して決定した指遣いで練習、演奏すると、かなりの部分の問題点が解消される事が明らかになった。言葉では説明していても、見る事がメインになったオンライン授業だったからこそ、その点を掘り下げる事が出来たのは収穫だった。

もう一点は呼吸と演奏との関連である。現在の息を殺しているような生活も一因なのか、ピアノは息を止めていても音が鳴るので、弾いている時にちゃんと呼吸をしなくなってしまう、身体も強張って益々自由が利かなくなる。そこで、例えばバッハのインヴェンションの2声部のうち1声を歌いもう1声を弾く、メロディと伴奏に分かれているような曲の時はメロディとバスパートを同様になど、弾き歌いを多く実践した。1つのフレーズを長い息で歌い切る事で音楽の流れを把握し、自然な間も生まれる。正しい音で歌った時のピアノとハモる体感することにより、自然と多声部に耳を傾けながら呼吸も音楽に合っていく様が見受けられた。

楽器と一体となって伸び伸びと音楽を奏でる喜びを目の当たりにした時、生演奏を聴く大切さと有り難みを実感せずにはいられない。

#### (4) 「ソルフェージュ基礎」における音楽的な見方・考え方を働かせるための教材開発と指導の工夫

作曲：名倉明子

「ソルフェージュ基礎」においては、音楽的な見方・考え方を働かせるための試みとして、「音楽的表現」を意識した読譜とその実現に重点をおいて「視唱」の指導をしている。

市販されている「視唱」のテキストを見ると、音符以外の要素、テンポ、ダイナミクス、アーティキュレーションの指示がまったくないものが見受けられる。「視唱」とは正確な音程、リズム、フレーズで歌うための訓練である、ということであろうが、音楽がそれだけで成り立たないことは明白であり、訓練においては「音楽的表現」を切り離して考えるというのはどうも馴染まない。もちろん実際に歌ってみれば、自ずとそれなりな表現をすることになるのは間違いないが、それを意識して行うのと無意識下で行うのとでは意味合いがまったく違う。

そこで、このことを逆手に取り、敢えてダイナミクス等の指示を細かく書かない楽譜を用いて「視唱」に取り組むことにしている。まず、楽譜を予見し全員で歌う。この段階では、正確な音程、リズム、フレーズで歌えることに重きをおく（学生の能力が一樣に高ければ、この、全員で音程やリズムの確認をする部分は割愛したいところである）。音楽の全貌が掴めたところで、改めて、メロディの方向性などからどのような「音楽的表現」を伴うことが望ましいのかを、学生自身に読み取ってもらおう。その後、何人かの学生にひとりずつ歌わせて、それぞれの「音楽的表現」の工夫について、なぜそのようにしたのかを説明させその意図を共有する。最後に全員でその意図を汲み取ったかたちで歌ってみる。

このような取り組みをすることで、実技レッスンなどにおいても、音楽的な見方・考え方を働かせることを意識的に行うようになることが期待できる。音楽の本質的な部分に目を向ける機会として、今後もこの取り組みを継続していきたいと考えている。

#### (5) 題材名「お気に入りの曲を紹介しよう」

附属中学校：渋谷知宏

今回は生活の中で親しんでいる音楽を生徒自身が選択した楽曲を教材として用いた。最近のお気に入りの曲、心に残っている曲などから、邦楽、洋楽、映画音楽、ドラマの挿入歌など1曲を選択させ、なぜその楽曲を気に入っているのか、心に残っているのかなど、音楽を形づくっている要素を根拠にしながら考えさせた。このことは、これまで授業で身に付けてきた、知覚したことと感受したことを関わらせながら考える力を、普段、自身が生活の中で親しんでいる曲に生かせるかということにつながるであろうと考えた。紹介する際のモデルとして「宿命/Official 髭男dism」を用いた。この曲は、2019年の熱闘甲子園のテーマソングになった曲である。甲子園球場に立った緊張感、夢の舞台に立つために懸命に努力してきたことをこの場で輝かせたいという想い、応援しているスタンドの様子など、歌詞の内容と曲想から、情景を容易に想像できる楽曲であること。今年の授業開きの時に、コロナ禍の生徒達を元気づけようと一度流しているため、この楽曲を知らない生徒がいないこと。編成も、ヴォ

1. あなたが紹介したい「お気に入りの曲」は？	
曲名	アーティスト
どんな曲？ 何かで使われている？ 知るきっかけになったことは？	
2. その曲を気に入っている理由を、手記しよう。	
なぜこの曲が「お気に入り」なの？	
特に「この部分がいい」ってところは？ それとも全体的にいい？	
どんな印象をイメージさせる？	
その「気に入っている部分」と「音や音楽」はどのように結びついている？	
楽曲分析してあると？	
<参考>	
構成は？ 使用されている楽器は？ 楽曲構成は？ 歌詞と旋律の関係は？	
楽譜の音色の特徴やリズムは？ 音程の変化と強弱は？	

図1 ワークブック

ーカル、ギター、キーボード、ベース、ドラムと基本的であり、ポピュラー音楽の楽器の音色を説明する際に説明しやすい。これらの理由から、この曲をモデルとして選んだ。合わせて、今回ポピュラー音楽を扱うことから、著作権の学習とも関連させ、音楽を生活の中で利用する際の約束事を学ぶなど、発展させられる教材であると考えた。

○【成果】

GIGAスクール構想で導入されたクロムブックを使用し、生徒一人一人が自分のお気に入りの曲を何度もくり返し鑑賞しながら、図1のワークブックに気に入っている理由をまとめる活動を行った。普段の生活の中で、気に入っている理由を考えるとすることはほとんどないため、理由をまとめるのに苦労していた生徒もいたが、教師がモデルを示したところ、自分を感じ取った曲想と音楽を形づくっている要素を関連させることに難しさを感じていた生徒も、見方・考え方を働かせながらまとめることができる生徒が多くなったと感じた。

◆【課題】

このようなポピュラー音楽を扱い、知覚・感受を働かせながら楽曲をより深く鑑賞する際に難しさを感じたのは、「どんな雰囲気?」「どんなイメージ?」という感受に関わる設問である。Youtubeなどで、動画を見ながら親しんでいるため、そのイメージしかない。歌詞で説明されている。などという生徒の声があった。そのような生徒には、楽曲全体ではなく、一つの曲の中にもこの部分の音や歌詞がいいという部分について深く掘り下げて鑑賞するのだということを、最初に示してもよかったのではないかと考えている。

【今後に向けて】

音楽を形づくっている要素の絞り方を生徒の実態に合わせて柔軟に提案できるようにしたい。あまり絞りすぎると深く捉えることができなくなり、難しさを感じている生徒にとっては、見方・考え方を働かせながら音楽を捉えるための手がかりになると考えている。

(6) 第4学年 「伝えられてきた音楽に親しもう」～伝承音楽体験ツアー～ の実践

附属小学校：嵐田史子、長岡初美

本題材では、子どもたちに身近な「花笠音頭」をきっかけに、日本や諸外国に伝えられてきた音楽として「ソーラン節」(北海道)、「葛西ばやし」(東京)、「サムルノリ」(韓国)、「朝の歌(チェロキー・モーニング・ソング)」(アメリカ)、「ブラジル」,「おどれサンバ」(ブラジル)を聴いたり演奏したりしながら、魅力を探っていった。その際、追究したい問いが生まれるように、題材のつくりを工夫した。また、見方・考え方を働かせながら追究していくことができるように、聴き取りと感じ取りを往還させる問い返しや表現活動の時間を大切にした。ここでは、題材の導入と「ソーラン節」を扱った表現の学習について取り上げる。

**題材の導入**では「花笠音頭」を鑑賞した。ほとんどの子どもが、すぐに、「知っている!」と反応した。聴きながら立ち上がって踊り出す子どももいた。「どんな感じがしたか」と問いかけると、「感じ取り」に関わる気付きがいくつか出された。「どうしてそんな感じがするのだろう。」と問い返し、もう一度音楽を聴いた。すると、「聴き取り」に関わる発言が次々に出された。次のように整理して板書した。(図2)

音楽のこと (聴き取り)	～な感じ (感じ取り)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 歌声にビブラート、震えている・太鼓の音</li> <li>・ 言葉がわからない・ズーズー弁・リズム</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 祭り・古い・民謡・山形</li> </ul>

図2

さらに、もっと古くから、日本や世界の各地域に伝えられてきた音楽があることを紹介し、鑑賞した。子ども達は、そのような音楽の存在に驚き、1回聴くと、「声がおもしろい。」「のりのりで踊っちゃった。」「あの音、何?」と話した。資料として提示していた写真を見ながら、音楽に合わせて身体を動かして聴いている様子からも、それぞれの音楽の雰囲気を感じて聴いていると捉えた。そこで、子ども達と一緒に「わくわくのもと」を見つけながら学習を進めていくことにした。(伝承音楽体験ツアーにかけよう!)

### いざ! ツアーに出発! (表現)

表現する際は、鑑賞で聴き取った楽器(太鼓、鉦、民族楽器)の音色・リズム・日本音階・掛け声・反復など音楽の要素や仕組みを生かしていくようにした。「ソーラン節」では、①今日の活動の見通しを持ち、②③④今日の学びに関わる聴き取りや知識と感じ取りをつなぐ時間をつくった。

③これから見つけていく「わくわくのもと」になりそうな「わくわくポイント」だよ。ソーラン節の旋律は、日本音階が使われているよ。→(リコーダーで音階を吹く。)→班で分析したとき〇班が共通点で出していた「日本の音楽は、古い、民謡っぽい」という感じは、この日本音階の雰囲気も関係しているのかもしれないね。

①この音楽でどんなことをしてみたい?

④どんなふうに歌うと、この音楽に合うだろう。

⑤自分が体験したいパートを選んで、全員で4回演奏した。(太鼓の代わりに椅子をたたくのもあり)後半2回は、伴奏なしで完全生演奏。

②太鼓は、どんなリズムだったかな。→(聴いて確かめようということになり、聴く。)

④は、太鼓と歌とリコーダーのコラボをするときに、一度歌った後の問いかけである。「力強く」という意見が出された。子ども達は、「それはわかるけど、どうすればいいかわからない」という様子だった。実際に歌っても、まだ旋律がよくわからないこともあるのか、遠慮がちに歌っている子どもがほとんどだった。そこで、授業者が歌い、力を込めて歌う歌い方を範唱した。繰り返すうちに、まねをしたり、こぶしを握りしめて歌ったりする子ども達が増え、元気な歌声とかけ声が響き出した。ふり返りで、2人の子どものように話した。

「おじさん達の漁をしている写真を見たり、歌詞の意味がわかったりしたら、歌を歌うときにもっと様子をわかって歌えた。」→イメージをもって演奏するわくわく。

「太鼓に、歌、リコーダー、とどんどん音が増えていったら、どんどん違う感じの音楽みたいになった。どんどんわくわくした。」→重なりで生まれるわくわく。

このようにして、それぞれの国や地域に旅に出かける設定で、表現の学習を重ねていった。子ども達は、鑑賞で見いだした「面白そう」「自分も演奏してみたい」という思いをエネルギーにして表現の学習を重ね、聴き取りと感じ取りを往還させる問い返しをもとに、繰り返し音楽に向き合っていた。この題材の学習を通して、伝えられてきた音楽の面白さと共通する魅力を実感することができたと考える。



## 図画工作・美術科における主体的・対話的で深い学びの実践研究

— 第2年次 — 」

部会員 山形大学 降旗 孝 小林俊介 土井敬真  
附属小学校 芦野繁樹  
附属中学校 高嶋裕也

### 1. 「主体的学び」と「対話的で深い学び」のために

平成28年12月の中央教育審議会の答申において示された学習指導要領の改善及び必要な方策等の内容から、これからの教育の重要課題として「主体的・対話的で深い学び」が強調されている。

本造形美術教育部会においてもそれに呼応して、平成31年度・令和元年度から部会における研究テーマとして「図画工作・美術科における主体的・対話的で深い学びの実践研究」として取り組んできた。

昨年度は、その第1年次の研究として、「主体的学び」と「対話的学び」「深い学び」のそれぞれについての基本概念に触れると共に、附属小学校と附属中学校の取り組みの実践を報告させていただいた。

今回、第2年次では第1年次の研究成果を受けて、その具体的な実践化が研究課題となっている。

小学校の「図画工作」教育においては、学習指導要領から「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のためには、表現及び鑑賞の活動を通して、児童一人一人が「造形的な見方・考え方」を働かせ、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習が充実するようにすることが大切である。としている。そのため、まず、第1課題として、児童一人一人が造形的な見方・考え方を働かせることができるような題材設定及び授業展開の工夫が求められてくる。第2の課題として、学習指導要領で示された3本柱の3つの目標から、表現活動と鑑賞活動をそれぞれ別々のものではなく、相互に関連させた学習として充実させる必要がある。

中学校の「美術」教育においては、小学校の「図画工作」と同様に学習指導要領から「深い学び」の視点から学習活動の質を向上させるためには、生徒一人一人の造形的な見方・考え方を働かせると共に、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習を充実させることが重要になってくる。

以上のように**造形的な見方・考え方を働かせること**と、表現及び鑑賞の学習活動を通じて、育成すべき資質・能力を**相互に関連させながら充実させること**が、図画工作科・美術科の教育において共通に実践化するための教育課題であり、同時に教育目標となる重要事項といえる。

さらに、中学校の「美術」では、創造活動を通して、自己の創出した主題や、自分の見方や感じ方を大切に、創造的に考えて表現したり鑑賞したりする学習を重視するために、生徒一人一人の見方や感じ方を大切に**するばかりではなく、生徒一人一人の主題を創出させること**が、教育的な課題となる。

この生徒自身に主題を創出させ、それに試行錯誤しながら取り組むことこそが、生徒の「**主体的な学び**」になると考える。その生徒一人一人の取り組みと成果について、教師を含めた生徒同士において鑑賞し、対話を通して共有し学び合うことで、正に「**深い学び**」の実現になっていくと考える。

## 2. 図画工作・美術科における「主体的・対話的で深い学び」の実践化

前述のように、図画工作・美術科における「主体的・対話的で深い学び」の実現のためには、表現及び鑑賞の活動を通して、児童・生徒一人一人が「造形的な見方・考え方」を働かせ、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習が充実するようにすることが大切である。

表現及び鑑賞に関する資質・能力として、学習指導要領にて告示されている「共通事項」については「主体的・対話的で深い学び」において無視できないところか密接に関連している。共通事項を踏まえることが、本研究テーマにおける教育実践化の重要ポイントとなっている。

【共通事項 ア】 については、

小学校 低学年の「自分の感覚や行為を通して、形や色に気付くこと」

中学年の「自分の感覚や行為を通して、形や色などの感じが分かること」

高学年の「自分の感覚や行為を通して、形や色などの造形的な特徴を理解すること」

中学校

「形や色彩、材料、光などの性質やそれらが感情にもたらす効果などを理解すること」

【共通事項 イ】 については、

小学校 低学年の「形や色などを基に、自分のイメージをもつこと」

中学年の「形や色などの感じを基に、自分のイメージをもつこと」

高学年の「形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつこと」

中学校

「造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解すること」

学習指導要領にて、改訂の要点として各教科とも3つ柱の目標が立てられた。(1) 知識及び技能 (2) 思考力、判断力、表現力等 (3) 学びに向かう力、人間性等 である。

共通事項のアについては、(1)の知識に関わる事項であり、この教科で育成すべき資質・能力として、表現活動と鑑賞活動のそれぞれの場面で相互に関連させて充実させることが求められる。

本研究テーマである「主体的・対話的で深い学び」の実践化を目指す観点からは、特に共通事項のイこそが、児童・生徒一人一人が「主体的に学ぶ」ために最も必要な事項であるとさえ考えている。

とかく、図画工作・美術は、児童も生徒もうまく上手な絵を描きものを作る教科という認識とイメージが強いが、この教科は作品作りが最終目標ではない。あくまでも表現と鑑賞活動を通して、児童・生徒の資質・能力を育成することが目的である。造形美術表現活動においては、児童・生徒の自分自身のイメージや思いが原動力となり、主体的に取り組むための重要な柱となる。故に、小学校の図画工作では自分のイメージをもつことが大切であり、中学校の美術では、自分自身の主題を創出することが重要となる。そのイメージや主題について、対話を通してお互いに理解し共有することで、学びがより深くってくる。これが、「主体的・対話的で深い学び」の実践化と考える。

(文責：山形大学 降籬 孝)

## 小学校図画工作科における主体的・対話的で深い学びの実践研究

実践事例 第1学年

題材名 「形や動きから表したいことを見つけてつくろう ～パタパタでゴー！○○さん誕生～」から

### 1. 本題材で育む資質・能力を身に付けた子どもの姿

- (1) 材料の形や動きの特徴を生かした飾りをつけたり、絵を描いたりすることを通して、表したいことをもとに工夫して表現する子ども。 【知識及び技能】
- (2) 材料の形や動きの特徴をもとにつくりたいものを想像することを通して、どのように表すかを考える子ども。 【思考力、判断力、表現力等】
- (3) 風で動くおもちゃをつくる活動に関心を持ち、造形的な活動に楽しさを見出す子ども。 【学びに向かう力、人間性等】

### 2. 題材の構成（180分扱い 60分×3次）

1	<p>スチレン皿をうちわであおいで、いろいろな動き方を試して見つける。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・スチレン皿を切ったものをテーブルに置き、うちわであおぐところを見せる。</li> <li>・「パタ、パタ」や「パタッ」など、あおぎ方によって動きが変わることに気づく。</li> <li>・プレールームなど広い場所を確保し、活動する。</li> </ul>
2	<p>形や動きをもとに見立てたことを伝え合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・材料をはさみで切り、うちわであおぎながら動き方を確かめる。</li> <li>・発泡トレイなどの材料の形から、見立てを</li> <li>・多様な動きや材料の形から動物や乗り物をイメージする。</li> </ul>
3	<p>飾りをつけたり、動きを確かめたりしながらつくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が表したいもの（動物や乗り物）をイメージし、画用紙を切ってつけたり、絵を描いたりして飾りをつくる。</li> <li>・飾りをつけたときの動き方の効果を試しながらつくる。</li> </ul>
4	<p>友だちと一緒に動かしたり、交換して動かしたりしてよさを味わう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・プレールームで作品を動かして遊びながら、友だちの作品のよさやおもしろさを見つける。</li> <li>・発表会やカードで振り返りを行う。</li> </ul>

・ 試す  
・ つくりかえる  
・ 決める  
・ 見合う  
・ 取り入れる

### 3. 学習材について

- (1) 発泡トレイを使ってつくる。

発泡トレイは、生活の中で身近に目にするものである。スーパーで売っている魚や肉などが入っている皿のような形やご飯や麺類などが入っているどんぶり型の容器などがあり、四角や丸い形、白色などのシンプルさは、形や色を付け足していくことにおもしろさを感じやすい材料である。軽くて柔らかさもあり、切ったり接着したり、着色したりすることができるため、自分が思い付いたことを形に表しやすい。

製作においては、形や色から自分がイメージしたことを表現してだけでなく、発泡トレーをうちわであおいで動かすことで、その動き方から表したいことをさらに見つけられるようにする。そして、つくったものに合った動き方を見つけるおもしろさを感じられるようにする。つくりながら試し確かめ、つくり変えていくことで生まれる表現の効果に気づき、もっとこうしたいという願いをもつことを大切にしていく。また、自分が表したい形を実現するために材料の加工や道具の使い方についても工夫しなければならない。さらに、製作の途中や終わりにお互いの作品を見合ったり遊んだりすることによって、その違いやおもしろさを味わうことができると考える。

## (2) 形や動き方から試行錯誤する。

材料となる発泡トレーは、単純な形や色をしているものが多い。そのため、自分がイメージしたものを表現するためには、他の材料を使って飾りを付けたり、色を付けたりといった装飾の工夫が生まれてくると考える。それらの工夫は材料特有の形や色の特徴をとらえ、組み合わせの効果について感覚を働かせながら、表現方法を見つけた姿と考える。また、発泡トレーは重ねたりつなげたり、並べたりしやすいため、それらを試しながら作品を大きくしていくことが考えられる。材料を組み立てて大きくしていく造形的なおもしろさと組み合わせによって生じた重さによる動き方の影響、形のバランスの大切さに気づきながら、つくって試すことを繰り返し、自分のイメージに迫っていくと考える。

子ども達は自分が表したいものや動き方のイメージを膨らませながら思考・判断し、表現の幅を広げていくと考える。そして、自分や友達の表現のよさを見つけられたとき、作品への愛着や活動の満足感を得られると考える。

## 4. 授業の実際 (A児の姿より)

### 【1時間目】

A児は、前単元「はさみ名人になろう！紙ツリー」で、自分の姉弟やペットの絵を描いたり、人型に紙を切ったりして模様づくりを行った。そのことから、A児は、自分が好きなものを表現することや細かな作業が得意であることが感じ取れた。

本題材の1時間目では、持ってきた材料の中から四角のトレーを選び、それに水色の四角をいくつも描き始めた。何をつくろうとしているのかを聞くと「船をつくっている。」と答えた。その後、赤い旗を立てたり綿を付けたりして、船の完成度を高めようとしていた。



本時の最後には、水色の画用紙に恐竜を描いて上部に貼り付けていった。

A児が持ってきた材料は、四角のトレーが2つとカップラーメンの容器3つである。A児は、自分が好きなものをテーマにして作り出すのではなく、材料の形や動き方から発想を得てつくるものを決めたと考える。その中に自分が好きなもの(恐竜、ステゴサウルス)を付け足すこともしている。また、他児童がスズランテープを使って船に旗をつけることや綿を飾りに付け足していく様子が増えてきた中で、





A児もそれらの材料を使い始めている。A児が、友だちと会話しながら製作する様子はあまり見られなかったが、周囲を観察し、よいと思ったことは取り入れ、自分の好きなものを大切にしながら取り組んでいると感じた。

予想では、自分の好きな恐竜をもっと前面に出して表現すると思っていたため、活動にやや消極的な印象が残った。



## 【2時間目】



前時に船をつくったA児は、カップラーメンの容器を2つ取り出し、ふちの部分が重なるように組み合わせた。容器が同じ大きさだったため、それらは簡単に重なり合うはずだったが、そうではなく、すき間が空くようにふちの一部分だけを接着してすき間を調整していた。何をつくっているのかを聞くと、「ギガノトサウルス」と答え、恐竜の口がパクパクと上下に動く仕組みであることがわかった。その後、容器の上部にペンで目を描き加えたり、画用紙をギザギザに切ってきばを付け足したりして恐竜の頭部を完成させることができた。

授業終末のふり返りの時間では、「ギガノトサウルスをつくりました。きばをギザギザにてつくったところがお気に入りです。」と答えた。恐竜の強い感じを表現しようときばの数を容器一杯に並べたり、襲いかかるような感じにするためきばの大きさを工夫したりしていることが作品からも見て取ることができた。

## 【3時間目】

恐竜の頭部が出来上がり、胴体部分をつくり始めた。頭部と頭部より小さめのカップ麺の容器を組み合わせ、その下にスチレン皿をつなぎ合わせた。胴体部分は、容器を逆さまにすることで接地面が大きくなり、頭部が大きくても安定して立たせることができていた。また、緑のモールをつけて手をつくったり、ストローをしっぽに見立てたりするなど装飾の部分にもこだわりが感じられた。はじめにつくった船のことが気になったため、船はどうするのかと聞いたところ、「ギガノトサウルスは船の見張り役。」と答え、船と恐竜を最後につなぎ合わせた。

広いプレールームに作品を持っていき、うちわであおいで動かしてみることが最後に促した。船は少しずつ前に進んでいったが、大きな海をゆっくり進む様子や力強く恐竜が見守っている様子がいいねと伝えると、満足している様子だった。



◇児童のふり返りカードから◇

- ・ギガノトサウルスのきばがおきにいいです。もっとあります。ふねのえんとつこのスピノサウルスがおきにいいです。あとギガノトサウルスのぼうしがおきにいいです。あとふねのまどがおきにいいです。(A児)

- ・からだのふわふわとしっぽのみつあみのいろいろないろのところがおきにいりです。目と口がけっこうかわいくして、こねこがさんぽをできるところです。
- ・かめのこうらがもようをいろいろにしてみたのでたのしかったです。ユーフォーのファイヤーのところをおはながみのあかいろでくふうしたのがたのしかったです。



## 5. 授業を通しての考察

本題材を構成するにあたって、導入場面での展開や言葉かけをどうするべきか迷った。はじめに発泡トレーをうちわでパタパタと扇いでみせて、スーッと動く様子を見せることで、子ども達は「おもしろい」「やってみたい」と関心を高めることはできると思ったが、それでは動かすことへの興味が勝り、造形的なおもしろさや広がりが生まれてこないのではないかと考えた。そこで、子ども達がそれぞれ用意した材料の形や色についての見立てを導入場面でしっかり行い、「〇〇みたい!」という発想のもと、自分が表したいものをつくることへとつなげていくことができた。学習のねらいを明確にし、子どもの主体性を引き出す導入の大切さについて改めて考えさせられた。

A児は、活動中はあまり動かず、じっくりと自分の作品づくりに取り組んでいた。それでも、周りの子ども達がつくっているものに目を向けたり、会話に耳を傾けたりして、自分のつくりたいものに合っているなどと思う材料を自ら選びに行っていることがわかる。活動中の自然な鑑賞により、友だちのよさを取り入れたり認め合ったりすることが製作における思考に役立っていると感じた。それらは、他の児童においても、同じ材料を使ってみたり、形の組み合わせの工夫が似ていたりすることからも同様であったと考える。作品を通しての対話が成立していた場面である。

恐竜好きのA児の姿から考えると、はじめに船をつくり出したことは意外であった。それでも、最後は自分の好きなギガノトサウルスを作品の中心にしている。何を表現しようとしているのか、その様子をじっくり見守ったり、子どもの思考に適切な言葉で寄り添ったりすることで、子どもの理解につながっていくと感じた。教師の支援のあり方について考えさせられた題材となった。

(文責：附属小学校 芦野 繁樹)

## コロナ禍における体育学習指導に関する研究

### 【部会構成員】

地域教育文化学部：竹田隆一 笹瀬雅史 渡邊信晃 井上功一郎 池田英治 小松恒誠

附属小学校：水川祐一 吉田美有紀 水原豊

附属中学校：三澤珠栄 山路一哉

### 1. はじめに

今年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）を抜きに語るができない。2019年末ごろの中国河北省武漢市での集団感染を皮切りに、現在に至るまで新型コロナウイルスは世界的な感染拡大を続けている。それは日本国内にも徐々に広がりを見せ、2020年2月27日には政府が全国の小中学校、高等学校、特別支援学校に対して臨時休校を求める異例の事態となった。そして、休校が明けた後も新型コロナウイルス感染防止のための対応が求められ、依然として新型コロナウイルスに翻弄される日々が続いている。

とりわけ、学校教育下における体育・スポーツ活動は様々な影響を被ってきた。運動会や体育祭といったイベントの中止や延期、体育授業における身体接触を伴う活動の制限、運動部の活動停止、各種競技大会の中止や無観客試合の措置など、例をあげればきりが無い。本学及び附属学校園においても、こうした影響下のもとに日々の体育・スポーツ実践が行われている。このような未曾有の歴史的厄災下における体育・スポーツ実践を記録しておくことそれ自体が貴重な研究活動になると思われる。

そこで、保健体育部会では附属小学校、附属中学校、学部における今年度の体育・スポーツ実践を、カリキュラムの変更・工夫や、授業を実施する上で苦勞した点・工夫した点、体育的行事に関する取り組み、体育的活動における子どもの姿の変化などの観点から振り返り、実践記録として書き留めることを研究目的とした。

### 2. 附属小学校における実践記録

#### (1) 学習カリキュラムの柔軟な変更

- ・年度初めは三密を避けるために、子ども同士が接触せず、共有の道具も使わなくてすむ領域を扱った。例えば、体づくり運動や表現運動を前期に、陸上運動やボール運動は後期に位置付けた。そうすることによって、感染状況を踏まえながら、在宅時間が長かった子どもたちの運動する機会を、体育の授業によって確保した。
- ・2学年で、指導要領上の指導事項を行うことを鑑み、感染リスクを考え、水泳指導を中止した。奇数学年に関しては、次年度指導事項を指導していく。

## (2)授業後の手洗い・消毒の実施

- ・ボールや跳び箱など、共有して使った道具に関しては、授業後または放課後に消毒を行った。
- ・体育の内容にかかわらず、授業後は児童に手洗いを指導した。

## (3)みのりSFの計画変更

- ・児童の待機場所を変更した。グラウンド全面を使い、例年よりも子ども同士の感覚を開けて椅子に座らせた。また、保護者の入場も各家庭で人数制限し、立ち入り可能な場所も制限した
- ・競技種目の変更を行った。綱引きや騎馬戦など接触を伴う競技に代えて、障害物リレーや2学年合同リレーなどを取り入れた。
- ・タイムスケジュールの変更を行った。競技時間をできるだけ短くし、午前中ですべてが終わる行程を組んだ。
- ・新しい種目への取り組みを行った。感染症対策を行いながら、組系ごとの表現運動に、新たに組み組んだ。

## (4)体育授業の工夫

- ・体育館で運動を行う場合、1クラス程度の人数制限を行う。
- ・振り返り時や話し合いの時には、マスクを着用。運動時は、子どもの実態に合わせてマスクの着脱を指導した。
- ・授業の中で、集合させる時間をできるだけ少なくし、運動量を確保しながら密を避けた。

## 3. 附属中学校における実践記録

### (1)「My 運動プログラム」実践について（体づくり運動）

附属中学校では、保健体育の授業を通して、「自ら考え、判断できる生徒」「自分の生活・身体・精神をコントロールできる生徒」「生涯にわたって健康で、安全な生活を営もうとする生徒」を育むことを目標としてきた。そのため、仲間との交流の中で自己の技能面での課題を見つけたり、タブレットPCによる動画撮影を利用した客観的な視点から、自己の課題を解決しようとしたりする等、様々な方法で自己分析することを大切に活動してきた。しかし、この度のコロナ禍において、接触、活動人数、カリキュラムに制限がかかり、思うような活動ができないことから、保健体育科としては「学校でしかできない体育的活動」と「自分1人でもできる体育的活動」と大きく分類して進めていくこととした。

例えば、1人でできる活動として、今年度より体づくり運動の単元で「My 運動プログラム」というものを取り入れた。これは生涯にわたって自らの健康を保持・増進できるようにする態度を養わせるために、自分の体力課題を改善するための運動プログラムをいくつか作成し、それを毎日どの程度行えたか記録していくというものである。これを通年実施し、時折スポーツテストを実施することで、コロナ休業明けからの体の変化を感じてもらうことがねらいである。

学校で行う活動で話し合いを設ける際はマスクを着用させ、長時間の交流は極力控えるよう心掛けた。また、グラウンドでもポータブル拡声器を使用し、全体への指示を通りやすくすること



で集合回数を減らすよう心がけた。(※体育的行事に関する感染症対策については後述する)

## (2)生徒の様子

生徒の様子としては、これまで元気に保健体育の授業を行ってきた2、3年生に関しては、大きな声が出せないこと、仲間と自由に意見交流ができないことにとまどいがあった。学習カードにも変化が見られ、昨年度は友達の動きとの比較や友達の意見を記入している生徒が多く見られたが、今年度は教員が伝えた言葉や自分で考えたこと、感じたことを記入する生徒が多く見られる。これは、授業内で思考力を育む時間を大切にしているとはいえ、仲間と交流する時間は昨年度より極端に減っていることが関係している。そのことより、技能の向上に限界を感じている生徒も多くいるのではないかと考える。動きのポイントやコツを自由に伝え合ったり、自己の課題を仲間をチェックしてもらったりすることで、運動意欲や課題改善に向けた思考力がこれまでは養えていたが、今年のように極力自力で課題解決へと導くためには、知識と判断力が乏しい生徒にとっては苦しい時間もあったように感じる。

また、感染症対策の観点で言えば、自主的な判断、行動がまだまだ身についていないように思う。具体的には、話し合いをする際のパーソナルディスタンスやマスクの着用など、教員から促されて初めてそうしたことを意識する場面が多く見られる。来年度も今年度のように教育委員会からガイドライン出され、それに沿った年間計画を組むこととなるのか不透明ではあるが、感染症対策を常に意識したうえで、できる限りの充実した授業展開ができるよう工夫していきたい。

## (3)体育的行事に関する感染症対策

### 生徒のみなさんをお願いしたい感染症・熱中症対策

今年度、ここまで運動会準備を進め、何とか来週の運動会を実施する目途がつくところまでできました。皆さんの協力をうれしく思います。しかし、油断は禁物です。運動会終了後(当日以降も)まで何事もなく笑顔で経るためには、全校生徒一人ひとりがこれまで以上に真剣に感染症・熱中症対策に取り組むことが必要です。どうか、皆さんの力を貸してください。

#### 【感染症対策】

- ・ **朝の検温・体調確認の徹底**  
→ 少しでも体調の異変を感じた場合、無理せず、勇気をもって休んでください
- ・ **マスク着用**  
→ 話をするときは、必ずマスクを着用します
- ・ **大声の禁止**  
→ どんなときも(競技時も応援時も陣地内でも)大きな声を出しません
- ・ **競技時(選抜リレー以外)の軍手着用**  
→ さまざまな人が触れた器具に、直接、触れることを防ぎます
- ・ **陣地での位置の固定と距離の確保**  
→ 以下のようにお願いします  
①前日と当日、陣地へ教室のイスを設置して座る  
②教室のイスの脚を配付されたビニールで包む  
③イスを陣地に持っていき、印に合わせて前後2m間隔の市松模様を設置する  
④イスへの着席時はマスクを外してもかまわない  
⑤前日練習後、昇降口でビニール袋を外し、下足箱に保管する  
⑥当日、保管していたビニール袋で再度包み、前日と同じようにイスを設置する
- ・ **陣地での開閉会の実施**  
→ 開閉会式と、応援合戦の観戦は陣地で行います
- ・ **競技ごとの手洗い・消毒の徹底**  
→ 陣地に各学級1つ消毒液を設置して競技後は必ず消毒します
- ・ **タオル・水筒・軍手・ビブス・笛の個人限定使用**  
→ 直接触れるものは、自分のものを準備し、絶対に他人と共有しません  
そのために、全てに必ず油性ペンで記名をします
- ・ **競技ルールの厳守**  
→ ルールの面からも感染症対策をとっていますので、必ず守ります

#### 【熱中症対策】

- ・ **飲み物の準備**  
→ 瓶状のスポーツドリンクを最低でも1リットル(ペットボトルも可)
- ・ **保冷剤代わりの凍らせたペットボトルの準備**  
→ 500ミリリットルペットボトルをタオルで包んでくると良いです
- ・ **陣地内で日傘さし**  
→ 陣地内でイスへの着席時のみ、傘をさして日差しを遮ります  
できるだけ濃い色の傘を準備してください(雨用がかまいません)  
周りの人に対して危なくないよう、傘の先には注意します
- ・ **ミストシャワー**  
→ 陣地後ろ・救護テントの近くにミストシャワーを設置します  
占有したり、遊んだり絶対にしてません

### 山形大学附属中学校 運動会 感染症対策

- 全体での感染症対策
  - ・ 朝の検温・体調確認の徹底
  - ・ 競技時(選抜リレー以外)に軍手着用
  - ・ 陣地に個人のイスを2m離して配置(位置の固定と距離の確保)
  - ・ 陣地での開閉会の実施
  - ・ 開閉会の短縮(あいさつの省略)
  - ・ 一般生徒の声出しの制限
  - ・ 競技前の召集の徹底
  - ・ 保護者の参観の停止(動画配信予定)
  - ・ 競技ごとの手洗い・消毒の徹底
  - ・ 日程の短縮(1日→午前中)
  - ・ 競技用具の消毒の徹底(前日までに完了)
  - ・ タオル・水筒・ビブス・笛の個人限定使用
  - ・ PTA体育部員の協力停止
- 競技種目の内容変更
  - 綱引き(全学年): 30m弱の綱を3本準備、20m弱の綱を1本附小より借用  
1本あたり10人以下の人数に設定  
他者との距離は1mあけ、交互に配置
  - ハリケーンMAX(1学年): 人数を4人から3人へ(竹ざおの長さ5m)  
密集しての集団ジャンプなし
  - タイヤ(2・3学年): タイヤの取り合いは1対1  
とったタイヤに対する守備はなし  
人に対するディフェンスはなし
  - 選抜リレー(選抜生徒): 第1走者のレーンの固定  
走った直後の消毒の徹底
  - 騎馬戦(全学年): 感染予防に対応した新種目への変更  
■【新種目】まり入れ(全学年): 複数かごを設置し人数を制限  
投てき場所を固定しての接触なし
- 応援の内容変更
  - ・ 応援団大幹部・学級幹部のみの声出し許可
  - ・ 一般生徒の声出し制限
  - ・ 声出しに代わる鳴り物の使用許可
  - ・ 応援合戦時、生徒同士の距離の確保と採点基準への導入
  - ・ 陣地からの応援合戦観戦
- 事前練習の変更
  - ・ 総練習の停止
  - ・ 練習時間の短縮(4時間程度)
  - ・ 試技の停止・短縮

#### 4. 大学における実践記録

##### (1)感染症対策について

新型コロナウイルス感染症対策として下記対策を講じた。


- ・授業開始時・終了時の手指の消毒
- ・使用した用具の消毒
- ・直接的な身体接触を避けるためのルール変更（例：タッチラグビー→タグラグビーへの変更など）
- ・3密を避けるための受講人数制限
- ・オンライン講義と対面講義を組み合わせたハイブリッド型講義の実施
- ・感染リスクの高い更衣室利用に関わる対策のための要綱及びポスターの作成

### 更衣室でのコロナ感染対策

8つの注意事項

<p><b>1 入室は最大8人</b></p> <p>更衣室内での密を避けるために人数制限をします。譲り合って順に利用してください。</p>	<p><b>2 消毒の徹底</b></p> <p>利用の前後で手指の消毒、または洗浄をしてください。ロッカーの消毒も適宜行ってください。</p>
<p><b>3 マスクの着用</b></p> <p>飛沫を抑えるためにマスクを着用してください。更衣室内での不要な会話は慎みましょう。</p>	<p><b>4 短時間の滞在</b></p> <p>素早く着替え、密室にいる時間を短くしましょう。シャワーは使用禁止です。</p>
<p><b>5 ロッカーは空に</b></p> <p>持ち物はロッカーに置かず、活動場所に持っていきます。忘れ物が無いようにしましょう。</p>	<p><b>6 衛生的な行動</b></p> <p>汗を含んだ衣服は密閉した袋に収納するなど、衛生環境の維持に努めてください。</p>
<p><b>7 授業での利用</b></p> <p>授業の担当教員から個別に利用上のルールが示された場合は、それを遵守してください。</p>	<p><b>8 利用状況の記録</b></p> <p>利用した日時を記録し、万が一、感染した場合に、対応できるようにしておきましょう。</p>

みんなで協力し、  
清潔で安全な利用を心掛けましょう。

 山形大学  
Yamagata University

##### (2)オンライン講義におけるスポーツ実技指導について

前期は、全面的にオンライン講義となったため、一人のできる「健康のためのスポーツ」（ラジオ体操、筋力トレーニング、気功、ウォーキング、ジョギングなど）を取り上げた。各種運動の正しい行い方とその評価方法を指導し、最終的には自分の身体や生活の実態を勘案しながら自分に合った運動プログラムを作成・実践できるようになることを学習目標とした。

コロナ禍において運動する機会が減少しており、学生たちは少なからず運動不足であることを自覚し、健康に対する不安を抱いていた。そのため、これまで学校体育で中心的に教えられてき

たであろう「競技スポーツ」とは異なる「健康のためのスポーツ」にも興味を示し、必要感を持って取り組んでいる様子が伺えた。コロナ禍において、改めて学校教育における「健康のためのスポーツ」の教育的価値を考えることの必要性を痛感した。

## 5. おわりに ―今後の課題―

来年度においても引き続き新型コロナウイルス感染予防対策に追われることが予想される。上述のような今年度の体育・スポーツ実践の経験は、そうした状況下においてもより良い実践を模索していくための礎石となるだろう。とりわけ、附属中学校における「My 運動プログラム」実践のようなこの状況を「健康」や「運動」、「身体」に関する学習への動機づけを促す良い機会とポジティブに捉え直し、より豊かな体育学習へと結びつける試みは今後の継続発展が期待されるどころである。他方、生活の中で運動遊びやスポーツが他年代とは相対的に大きな割合を占めている発育発達期の子どもたちにもたらされる身体的・精神的影響についても、今後より一層注視していく必要があると思われる。この点について、科学的な手続きによって明らかにするとともに、豊かな体育・スポーツの学習に結びつけていくことが課題となるだろう。

(文責 小松恒誠)

## 家政教育共同研究部会報告

### I. 2020 年度家政教育共同研究部会

#### 1. 研究テーマ

「探求型学習で主体的・対話的で深い学びを作る」

#### 2. 部会員

地域教育文化学部	石垣和恵	大森 桂	矢口友理
附属小学校	青山詩織	江口知子	
附属中学校	鎌田弘子		

#### 3. 研究経緯

##### (1) 附属小学校授業づくり

- 1) 9月20日 秋の授業づくり研修会のためのリモート打ち合わせ
- 2) 11月9日 秋の授業づくり研修会

青山教諭公開授業「自分にぴったりのマイバッグを作ろう～ミシンを用いた布製品の製作～」

##### (2) 附属中学校授業づくり

- 1) 8月5日(水) 指導計画打合せ

##### (3) 部会研究会

- 1) 7月29日(水) 第1回研究会
  - ①今年度の附属学校の研究会の持ち方と研究の見通し
  - ②評価について(石垣)
  - ③探究学習とパフォーマンス評価例紹介(鎌田)
- 2) 12月23日(水) 第2回研究会 対面とリモートのハイブリット開催
  - ①研究テーマ再検討
  - ②研究報告書の内容検討と執筆分担
  - ③附属小学校ならびに附属中学校の授業について情報交換

## II. 研究報告

### はじめに

平成 29 年度(2017 年度)に各学校の学習指導要領が改訂され、小学校は今年度、中学校は来年度から完全実施となっている。そこで今年度の家政教育部会では、大学と附属学校園との共同研究テーマを「探求型学習で主体的・対話的で深い学びを作る」と設定した。

小学校学習指導要領実施状況調査(平成 24 年)で、衣生活領域の学習は「衣服の働きや洗濯などの手入れ、整理・整頓、掃除などに関する知識・理解については、相当数の児童ができていますが、縫い代やゆとりの必要性、ミシンなどの製作に必要な一部の用具の使い方に関する知識・理解については課題がある」と指摘されている。附属小学校青山詩織教諭は、昨年度からこの課題解決のための学習指導の研究を開始しており、今年度はB衣食住の生活(5)生活を豊かにするための布を用いた製作の学習として、6 年次題材名「自分にぴったりのマイバッグを作ろう」を取り上げ、探求型の学習を試みている。一方、附属中学校鎌田弘子教諭は、3 年次のA家族・家庭と子どもの成長(3)幼児の生活と家族、(2)家庭と家族関係の学習でこれまでも行

っていた幼稚園児との交流を「学校が避難所になる」と場面設定し、幼児の発達と生活を学習することの必然性を持たせた。それらの学習を生徒個人々の学習計画に基づく探究学習とする試みを報告している。

また、当研究会の実施に当たっては、新型コロナウイルス感染症対応によって附属学校の授業づくり研修会等がオンライン開催を取り入れている状況を鑑み、接触を極力削減する目的から一部リモート会議を取り入れ実施した。  
(石垣和恵)

## 1. 附属小学校の研究

(青山詩織)

(1) 題材名「自分にぴったりのマイバッグを作ろう ～ミシンを用いた布製品の製作～」

(2) 授業の概要

【 学習目標 】

- バッグの見本を見てつくりを探ったり製作手順を考えたりすることを通して、必要な布の大きさや製作手順について理解することができる。 【知識及び技能】
- 製作手順についての根拠を明らかにするとともに、自分の入れたい物や用途、好み等に合うように大きさや形、柄などを工夫して製作計画を立てることができる。 【思考力、判断力、表現力等】
- 作り手の工夫や心遣い、自分で製作したものを着る喜び等を感じる中で、自らの生活をより豊かなものにするためにできることを実践・工夫していこうとする思いを高めることができる。 【学びに向かう力、人間性等】

【 教材観 】

ミシンを用いた布製品を製作する際には、「縫いしろ」と「ゆとり」についての的確に理解し、製作計画を立てることが大切である。縫いしろ幅は、布端の処理の仕方やその用途に応じて考える必要がある。バッグを製作する際には、布を中表にして縫う方法と布端を三つ折り縫いにする方法の二つの方法を用いるため、縫いしろ幅は部分により適切な分量が異なる。両脇の部分は中表にして縫い合わせる。表に返せば縫いしろが見えなくなるため、折る必要はなく、縫いしろ幅は小さくてよい。一方で、出し入れ口は、しっかりとしたつくりにするために、縫いしろ幅を広く取って三つ折りする。また、使いやすいバッグにするためには、入れたい物に対してひと回り大きくゆとりをもたせる必要がある。一人一人が、入れたい物や用途を考え、それに応じて大きさを決めることとなる。

こういった、バッグのつくりや必要な布の大きさ、さらにそれらの根拠を明らかにすることで、製作手順についての的確に理解し、他の布製品の製作においても、製作手順を考える際の手がかりとすることができると思われる。

【 児童観 】

本学級の児童は、5年生の時に「自分にぴったりのエプロンを作ろう」という題材において、ミシンを用いたエプロンの製作に取り組んだ。見本を見ながらつくりや製作手順、その根拠を考え、製作計画を立てた。児童たちは、体の大きさに合うエプロンの大きさを考えて布を裁ち、出来上がったエプロンにはポケットを付けた刺繍で模様を付けたたりして、サイズやデザインが自分にぴったりのエプロンに仕上げていた。使いやすいものにしたい、自分好みのものにしたいという思いが強く、それを実現させようとする意欲も持っている。一方で、自分の納得のいくまでいくらでも時間を使ってしまう面もある。それは、家庭科の学習に限らず様々な学習や活動において見られる。先を見通し、限られた時間の中で最後まで終わらせる力を付けていきたい。

【 指導観 】

本題材では、「見通しをもつこと」と、その中で「製作手順について科学的に理解すること」を大切にしたい。見通しには、「学びの見通し」と「製作の見通し」がある。5年生の時に、エプロンの製作手順を探った経験を生かし、「自分にぴったりのマイバッグを作るために、何を学ぶ必要があるのか。」を児童自身が考えることで、学びの見通しをもつことができるようにする。そして、児童自身が考えた「学ぶべきこと」を学べるようにする

ため、バッグの見本をじっくり観察し、つくりやそのようにする根拠を明らかにしていく活動を取り入れる。そうすることで、製作手順について科学的に理解することができると思う。見本をじっくり観察したこと、製作手順について科学的に理解できたことで、出来上がりや製作の過程を具体的にイメージしながら製作計画を立てることができ、製作の見通しをもって取り組むことができると思う。

バッグは、大きさや形について工夫できる幅が広く、自分にぴったりの物にしたいという思いをそのまま形にすることができる物である。思いを形に表すことで、作った物への愛着を感じ、大切に使用したいという思いもつことができると思う。さらに、一つの布製品を作るのにこれだけの手間がかけられていること、ひもの長さや布端の処理など、使う人が快適に長く使えるように考えて作られていることが分かり、他の布製品を選ぶ際にも、よりよい物、自分に合う物を選ぶ姿勢が育まれていくだろう。自分にぴったりのバッグを作ることによって、自らの手で作り上げる喜びを味わい、よりよい物を求めていこうとする思いを高めていくことになる。それが、衣生活を豊かにすることへつながっていくと思う。

### (3)指導計画(12 時間計画)

時	主な発問(○)	指導上の留意点および評価(●)
1	○どんなマイバッグを作りたいですか。	自分にぴったりのバッグを作りたいという思いを高められるように、様々な工夫をして製作したバッグの見本を提示し、大きさやデザインを自由に決められることを伝える。
2	○自分のぴったりのマイバッグを作るために、考えるべきことはどんなことですか。	学びの見通しをもつことができるように、「自分にぴったりのマイバッグを作るために考えるべきこと」を一人一人が考えて班や全体で共有する。さらに、何を学ぶのかを具体的にイメージできるようにするために、それらを、「決まっていること」、「自分で考えること」、「調べたり学んだりすること」に分類する活動を設定する。
3	○バッグの見本を見て、分からないことや知りたいことを明らかにし、なぜそうしているのか考えよう。	バッグのつくりや製作手順を明らかにすることができるように、見本を班に一つずつ配付し、それを見ながら調べる活動を設定する。さらに、「なぜそのように作るのか。」にも気付くことができるように、根拠を問いかけ、考える場を設定する。
4	○調べたことを生かして、製作計画を立てましょう。	作りたいバッグの大きさに合う布の大きさの見当を付けることができるように、新聞紙を用意し、入れたい物を包んだり簡易バッグを作ってみたりすることができるようにする。 ポケットやマチの付け方等、発展的な内容についての細かな手順はこちらから示し、基本的な製作手順の中のどこに組み入れるかを児童が考えるようにする。 ●必要な布の大きさや製作手順について理解している。【知識及び技能】 ●製作手順についての根拠を明らかにするとともに、自分にぴったりのバッグにするために大きさや形、柄などを工夫して製作計画を立てている。【思考力、判断力、表現力等】
5 ～ 11 12	○製作計画に沿って、マイバッグを作りましょう。 ○友達の作品で、真似したいことや新しい発見はありましたか。	快適に長く使えるバッグに仕上げるために、持ち手は安全ピンなどで仮止めしながら、バッグの大きさ、形、持ち方に合わせて長さや位置を決められるようにする。 様々な工夫やその作り方などについての多くの知識を得たり、これからの製作への意欲を高めたりすることができるように、出来上がったバッグを互いに見合ったり作り方を紹介したりする活動を設定する。 ●自らの生活をより豊かなものにするためにできることを実践・工夫していこうとする思いを高めている。【学びに向かう力、人間性等】

### (4)授業実践と児童の姿

#### 1)学びの見通しをもつこと

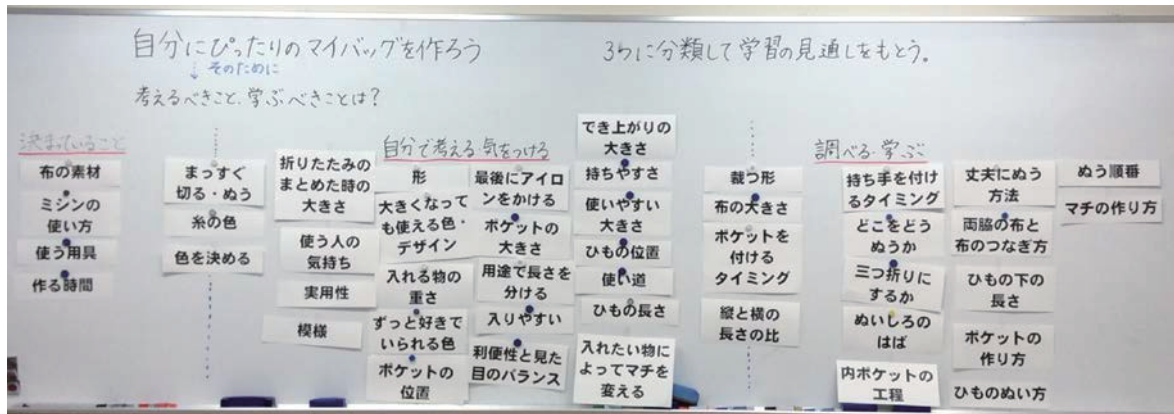


【 学習活動 】

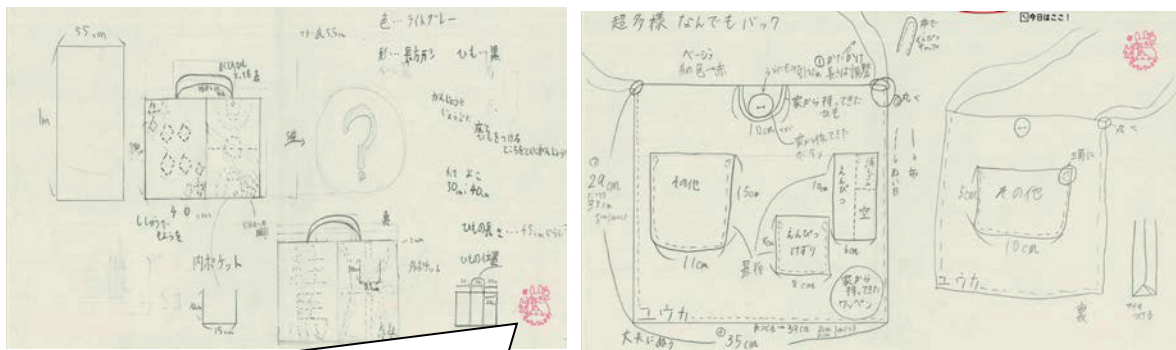
- ・5年生の時に、エプロンの製作で学んだことを振り返る。
- ・「自分にぴったりのマイバッグ」を作ることを知り、そのために学ぶべきことを考える。
- ・学ぶべきことを「もう決まっていること」「自分で考えること」「これから調べること」3つに分け、「自分で考えること」の視点に沿って、理想のバッグの構想図を描く。

【 児童の姿と考察 】

三つ折り縫いにするごととその方法や理由、縫いしろが必要であること、出来上がりより大きく裁つ必要があることなど、布製品の製作についての基本的な事項について、よく覚えていた。5年生の時の学習の定着が図られていると感じた。「学ぶべきこと」に関して、「縫いしろの幅」「出来上がりの大きさ」「布の大きさ」「作る順番」など、エプロン作りでの学びを生かして考えていた。ミシンを用いて布製品を作るためのたくさんの要素について理解しており、「バッグではどうなのか。」と考えることができていた。さらに、「両脇のつなげ方」「ひもを付けるタイミング」「マチの付け方」など、バッグならではの新たな視点や、「丈夫さ」「ずっと好きでいられる色」など、長く使いたいという思いが表れているものも多く見られた。「使う人の気持ち」という視点で考え、「使う人の年齢」「持ちやすさ」といった言葉を書いている児童もいた。(分類の結果は以下の写真の通り)



一方、構想図を描く段階では、「何に使うのか」「何を入れるのか」などは決めずに、ポケットや飾り、マチなど、理想のバッグになるようにたくさんの機能のあるバッグを描いた児童が多かった。バッグの製作手順がまだはっきりしていないため、いくらでも工夫できると考えている児童が多く、理想が大きく膨らんでしまい、実現不可能と思われるものが多かった。バッグの製作にどの程度時間がかかりそうなのかの見当がつかない状態で、しかも用途や目的をはっきりと決めないままに構想図を描いたため、このようになってしまったのだろう。基本のバッグを作るのに、どのような工程があるのか、自分が作るならどのくらい時間がかかりそうなのかをある程度学び、何に使うのかをしっかりと決めた状態で構想図を描けば、もう少し実現可能で実用的なものになったかもしれない。児童の願いや思いに寄り添いながらも、その願いや思いが最後まで貫かれるよう、児童の実態をとらえて単元の構想を練っていく必要がある。



児童の描いた構想図。刺繍の飾りやポケットがたくさん付いている。実際には、左の児童は刺繍の模様とポケットをそれぞれ一つだけ付けた。右の児童は授業時間外にも製作に取り組み、構想図通りに仕上げた。

## 2) 製作の見通しをもつこと ～製作手順について科学的に理解する～

### 【 学習活動 】

- ・バッグの見本を見ながら、つくりや製作手順を調べる。さらに、調べたことについて、「なぜそのようにするのか」を考え、話し合う。
- ・分かったことを生かして、製作計画を立てる。

### 【 児童の姿と考察 】

一人一人が作りたいバッグに合わせて調べるポイントを決め、それに沿って見本をじっくり見ながら調べていった。調べるポイントが明確になっていたため、見本のどこを見ればよいのか的確にとらえ、調べることができていたと感じる。特に多くの児童が調べていたことは、「両脇の縫い方」「ひもの付け方」「出し入れ口と両脇の縫う順序」「縫いしろの幅」であった。ひもを最後に付けるという手順に疑問をもち、なぜなのかを追究する児童や、両脇の上部の見えない部分を見るためにほどこいて見てみたいと話す児童もいた。縫いしろが表に見えないため両脇は三つ折りにしなくてもよいことや、ゆとりをもたせるために入れたいものよりも5cm程度大きく作るとよいことに気付いた児童もいた。

グループで一つの見本を配付したが、一人一人が自分の調べたいことを熱心に調べる様子が多かった。疑問や発見を共有しながら調べていく様子はあまりなく、個の活動となっていた。調べるポイントが多すぎて、活動が個人に閉じてしまい、グループで話し合いながら解決していくことができなかつたと感じる。重点として考えさせたいところを教師が明確にもち、調べるポイントを絞ることで、対話しながら学びを深めていくことができたのではないかと感じた。

見本を観察したことで、どのような順序で縫っていくのかが見え、基本のバッグについてはほとんどの児童が正しい製作手順で計画を立てることができた。ポケットやマチなどについても、見本を見た際に自分に必要な情報をしっかり調べていた児童が多かったことや外ポケットについては付ける順序を全体で確認したこともあり、多くの児童が正しく考えていた。しかし、バッグは5年生の時に製作したエプロンと異なり、立体で見えない部分も多いため、製作手順は分かっても、細かな部分の作り方の理解に個人差があり、失敗する場面が散見した。特に多かった間違いは以下の3点であった。

- ・両脇を中表で縫った後、アイロンで縫いしろを割って仕上げたため、初めからアイロンをかけて折って縫うと勘違いしていた。
- ・両脇の上部は、完成品だと三つ折り縫いで隠れて見えなくなってしまうっており、底から三つ折りの下まで縫えばよいと思っていた。
- ・三つ折りで折り返す際、両脇の縫いしろは左右に割って折り返すが、そこまで見通してよく見てはおらず、2枚の布の縫いしろ部分を重ねて片方に折って縫ってしまった。

これらの点は、手本を見ている段階で製作手順を具体的にイメージしておらず、作るようになってからも特に気にせずに製作を進めてしまったため起こったと思われる。完成品を観察するだけでなく、製作標本を提示したり、こちらから気付かせるような問いかけをしたりする必要があった。

### (5) 成果(○)と課題(△)

○5年生の時の同領域での学習が、学びの見通しをもつ際に大いに生かされていた。2学年にわたり、系統的に計画し、指導していくことが大切である。

○「調べるポイント＝何を学ぶのか」が明確になっていたため、児童たちは自分の作りたいバッグの構想図に合わせて具体的に調べることができた。

△「自分にぴったり」を実現させるためには、用途や目的(何を入れる、誰が使う)を明確にもって計画を立てる必要がある。構想段階で、児童の思いや願いを膨らませていく工夫を取り入れるとよかつた。(事前に製作について伝え目的や用途について考える期間を設ける、友達や家族に調査する等)

△児童の「学びたい」「調べたい」という思いは大切にしながらも、本題材で特に重点的に学ばせたいことを、教師が明確にもっていることが必要である。製作についての多岐にわたる要素の中で、児童が自分で調べたり考えたりして見いだしていくことと教師が伝えることを区別し、メリハリのある展開にしていこうとすることで、児童は対話しながら学びを深めることができたと感じる。



## 2. 附属中学校の研究

(鎌田弘子)

### (1) 題材名「幼児の遊びを考えよう」

#### (2) 概要

本題材は、学習指導要領の指導事項A「家族・家庭生活」(2)「幼児の生活と家族」(3)「家族・家庭や地域とのかかわり」である。幼児にかかわる学習は、中学生にとって単に将来、親になった時のための学習ではなく、自分自身を育てることも含めて「育てる」ことを学ぶ場である。この学習の特徴は、世代間にまたがる時系列の学習活動である。従って異なる世代、異なる環境での成長や発達、家族の役割を理解し、自らも積極的にかかわろうとすることで、その人たちの思いや考え、生き方に触れ、コミュニケーションの必要性に気づくことができる。そうした視野の中に自分を位置づけ、他者理解を通して自己を理解することで、自分づくりの貴重な学習の場になると考える。それを踏まえ、今の自分を見つめるだけでなく、生涯を見通した長期的な展望をさせ、命のつながりの中での自己を捉えさせる。また、自分も子どもの成長を支える一員であることを認識させることは、今後の家庭生活や社会生活を送っていく上でも意義が大きい。

保育の学習は、生徒の生活経験をもとにして考えることが難しく、新たに獲得する知識が多い。さらに、すぐに生活に生かしたり、実践したりすることも難しい内容である。そこで、中学生の自分が幼児に対して何ができるのか、何をすべきなのかを考えさせるようなパフォーマンス課題を提示した。さらに生徒にとって身近な課題になるように状況についても具体的に示し、令和2年7月豪雨を取り上げ、本校も避難所に指定されていること、もし避難所になったら自分たちが避難者の支援をすることについても伝えた。その上で避難者生活を送る幼児との関わりとして幼児の遊びを考案させた。

#### (3) 指導計画(12時間計画)

時数	学習活動	指導上の留意点 ●評価規準(評価方法)
1	災害時、避難所生活を送る幼児に対して自分たちができることを考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・令和2年7月豪雨災害や避難所の様子の資料を提示し、さらに本校も避難所に指定されていることを知らせ、災害は自分たちの身近にあることに気づかせる。</li> <li>・東日本大震災の際、避難所で当時の中学生が果たした役割についての資料を提示したり、子連れ避難した母親の大変さに着目したりして避難所生活を送る幼児のために自分たちができることを考えさせる。</li> </ul> ●知識・技能(ワークシートの記述)
2	学習課題を把握し、課題解決に向けて学習計画をたてる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習課題・題材の目標・学習の流れを提示し、ゴールのイメージを持たせる。</li> <li>・課題解決の方法を考える際、個々の考えをグループで共有し整理させ、さらに全体で共有する場面を設けることで、多角的な視点で解決方法を検討させる。</li> </ul> ●思考・判断・表現(学習カードの記述)
3	幼児と交流する。(附属幼稚園訪問)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交流前に学習計画を確認させ、幼児の生活や心身の発達の保育者の関わり方についての視点を持って幼児と交流させる。</li> <li>・交流クラスの幼稚園教諭の指示のもと、意欲的に交流できるように支援する。</li> </ul> ●知識・技能(交流の様子、ワークシートの記述)

4	幼児の遊びについて考える。	・幼児との交流写真を提示したり、幼少時に遊んだことのある遊びを発表させたりして幼児の遊びの多様性に気づかせる。 ●知識・技能(発表の様子、ワークシートの記述)
5 6	幼児の心身の発達について理解する。	・幼児の発育グラフや情緒・言葉・社会性の発達の表を提示し、幼児の心身の発達の特徴をまとめさせる。 ●知識・技能(ワークシートの記述)
7	幼児との関わり方について考える。	・幼児の生活習慣の形成に向けて、身に付けさせるための方法や接し方を考えさせ、家族や周囲の関わり必要性に気づかせる。 ●知識・技能(話し合いの様子、ワークシートの記述)
8 9	課題解決に向けて必要な情報を集める。	・学習カードをもとに、課題解決に向けてさらに学びたいこと、これまでの学習で疑問に思ったことを整理させ、各自で調べる時間を設ける。 ●主体的に学習に取り組む態度(学習カード及びワークシートの記述) ●思考・判断・表現(学習カードの記述)
10 11	企画書を作成する。	・書く内容を検討する際、自分なりに根拠を持った情報の選択や学習課題と条件との整合性についての視点で吟味させる。 ●思考・判断・表現(企画書の記述)
12	プレゼンテーションを行う。	・伝えたい内容を整理させ、相手を意識したプレゼンテーションの仕方について全体で確認する。 ・プレゼンテーション後、他者の企画書から気づいたことや聞き手からのアドバイスをもとに企画書を見直す場面を設け、必要に応じて加筆修正させる。 ●思考・判断・表現(発表の様子、企画書の記述)

#### (4) 授業実践と生徒の姿

##### 【 学習活動2について 】

###### 学習活動

・学習課題とその条件について確認した。

###### <課題>

附属中は避難所を開設し、多くの避難者を受け入れました。避難者の中には幼児もいます。  
あなたは幼児の世話を任せられました。幼児が楽しく夢中になれる遊びを考案してください。

###### <条件>

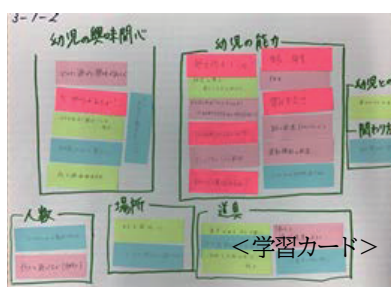
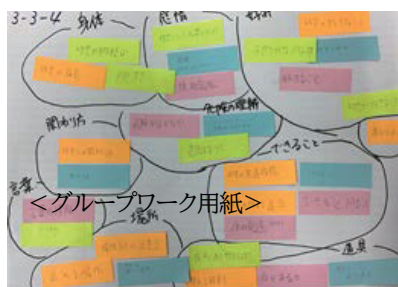
遊びの内容	幼児の発達段階や遊びの意義を踏まえ、新しい遊びを開発したり、これまで遊んだ遊びにアレンジを加えたりする。自分もその遊びに参加することを前提にして考える
遊びで育つ力	その遊びを通して育む(身につけさせたい)力を明確にする
幼児を楽しく夢中にさせる工夫	その遊びを通して幼児が楽しく夢中になれるポイントを明確にする
対象年齢と人数	一緒に遊ぶ幼児の年齢、人数
遊ぶ場所	附属中の校舎内(体育館は除く)及び敷地内(グラウンド、六稜苑等)

遊び道具	遊び道具や材料は附属中にあるもの
安全面	幼児が安全に遊ぶことができるような対策、環境作り
幼児との関わり方	自分が幼児と一緒に遊ぶときの関わり方。ポイントや注意点など

- ・避難所生活を送る幼児のために遊びを企画するという課題とその条件について確認した。
- ・課題解決に向けて、必要な知識や技能を各自で調べ、付箋紙に記入した。
- ・KJ法を用いて、個人が記入した付箋紙をグループごとのグループワーク用紙に張りつけながら、情報を整理した。
- ・他のグループのグループワーク用紙を見ながら、自分に必要な情報を取り入れた。
- ・取り入れた情報をもとに、各自9時間分(指導計画の時数3~11)の学習計画をたて、学習カードに記入した。

### 生徒の姿

- ・課題解決に向けて各自で必要な知識や技能を調べる場面では、遊びに着目して情報収集する生徒や活動の意味を考えるなどの様々な視点で情報収集する生徒に分かれた。
- ・グループで付箋紙を整理する場面では、「幼児の遊び」と書いてある付箋紙が多かったものの、それを調べるだけでは課題解決が不十分だと気づく生徒が多く見られた。また、話し合いながら進めたことにより新しい視点が生まれ、それを付箋紙に記入し、グループワーク用紙に加えているグループも見られた。
- ・他のグループのグループワーク用紙を見て、自分たちにはないタイトルに関心を示したり、タイトルが同じでも書かれている内容が異なっていることに気づいたりする場面も見られた。さらに、自分が取り入れた情報をワークシートに書き写している生徒も多く見られた。
- ・学習計画を立てる場面では、グループ活動で得た情報を整理しながら、より具体的に記入している生徒が見られた。さらに、提示した条件が満たされているか確認しながら記入している生徒も見られた。それによって一人一人が異なる学習計画が完成した。



3年組 番名			
家庭科 学習カード			
学習計画			
課題中は避難所を模擬し、多くの避難者を受け入れました。避難者の中には幼い子どももいます。あなたは他の避難者を任せられました。幼児が楽しく夢中になれる遊びを考案してください。			
学習計画と心の流れ			
時間	学習計画	学習日	疑問と解決の過程
1	課題を把握する 学習計画をたてる	10/21	紙類を把握し、課題を把握すること、2人1組に課題を渡すこと
2	幼児の遊びの調べ	11/18	幼児の遊びの調べ、幼児の遊びの調べ、幼児の遊びの調べ
3	幼児の能力の調べ	11/12	幼児の能力の調べ、幼児の能力の調べ、幼児の能力の調べ
4	幼児の遊びと能力の調べ	11/20	幼児の遊びと能力の調べ、幼児の遊びと能力の調べ、幼児の遊びと能力の調べ
5	幼児の遊びと能力の調べ	11/20	幼児の遊びと能力の調べ、幼児の遊びと能力の調べ、幼児の遊びと能力の調べ
6	幼児の遊びと能力の調べ	11/25	幼児の遊びと能力の調べ、幼児の遊びと能力の調べ、幼児の遊びと能力の調べ
7	発表準備	11/25	発表準備、発表準備、発表準備
8	発表準備		発表準備、発表準備、発表準備
9	発表準備		発表準備、発表準備、発表準備
10	発表準備		発表準備、発表準備、発表準備

### (5)まとめ(成果○と課題△)

- 生徒が主体的に課題解決に向けて取り組むことができるように、パフォーマンス課題を提示し、個々に課題解決に向けた学習をすすめるための計画を立てさせた。それにより、毎時間、課題と本時の計画を確認しながら課題解決に取り組む生徒の姿が多く見られた。
- パフォーマンス課題の提示によって、生徒が多様な課題解決に向けた方策を取っていても、常に単元のゴールに向かっていくことが把握できた。また、課題解決の場面では、自ら立案した学習計画を見直し、解決に向けて調整する生徒の姿が見られた。

○指導前に評価するためのルーブリックを作成し、生徒に提示することで、授業のねらいや目標を明確にし、指導法を吟味することができた。また、ルーブリック(評価規準)をもとに授業者のみならず生徒も自己評価が可能となった。

△パフォーマンス課題を解決する上で指導者から条件を提示する方法をとったが、生徒の意見や考えを取り入れる流れにしてもよかった。生徒の発想の広がりを狭めてしまった可能性がある。生活の中から問題を見いだして課題解決を図る問題解決的な学習に近づけられるようなパフォーマンス課題の設定について、さらに研究をすすめていく必要がある。

△もっと質の高い課題解決に向けて、学習計画、情報収集、情報まとめのそれぞれの段階でもっと吟味する場面が必要だった。今後、批判的リテラシーの育成を目指し、問題を様々な角度からみたり、情報を相対化したり、解決策の中からベストな案を見つけ出したりする粘り強い思考力を身に付けられるような学習活動を組み立てていく必要がある。

## おわりに

「主体的・対話的で深い学び」の実現は、各教科・領域に求められている。家庭科は製作や体験などの学習活動が多い教科であることからアクティブラーニングできている、と捉えるむきもあるが、それらの学習活動が児童・生徒が主体的であり、かつ深い学びにつながっていると一概には言えない。今年度の研究は、児童・生徒が主体的に課題を見出し学んでいく姿を実現することを目指したものである。

附属小学校 青山教諭は、児童自らが学習課題を見出し探究する学びの場を創造するために、「手提げかばんを作る」課題を提示し「作り方」を児童の探究活動に委ねている。児童の主体的な学びの一端が、学びの見通しを持つことをねらいとした授業過程の板書に記録されているので注目していただきたい。しかし、青山教諭は「基本のバッグを作るのに、どのような工程があるのか、自分が作るならどのくらい時間がかかりそうなのかをある程度学び、～(中略)～子どもの願いや思いに寄り添いながらも、その願いや思いが最後まで貫かれるよう、子どもの実態をとらえて単元の構想を練っていく必要がある。」と述べ、製作方法の情報提示が少なすぎたと考察している。

一方、附属中学校 鎌田教諭は、12時間の単元学習のうち9時間を生徒個々の探究学習にあて、自発的学びの時間を保証し、「パフォーマンス課題を解決する上で指導者から条件(前掲の表参照)を提示する方法をとっている。しかし、生徒の意見や考えを取り入れる流れにしてもよかった。生徒の発想の広がりを狭めてしまった可能性がある。」と考察している。この学習指導は、指導計画12時間のうち、1時間目に学習の動機づけを行い、2時間目は「学校がもし避難所になったときに自分たち中学生が幼児に対してできることは何か」という探究課題について、生徒は各自が学習計画を立案する。そこで、生徒から共通して「幼児について知る必要がある」と課題意識を引き出して、3時間目は幼稚園訪問を行っている。4～6時間目の学習は一斉指導であるが、生徒達の学習希望に応える形で学習が進められている。生徒が「各自の計画に基づいて学ぶ活動」と認識している点が探究型学習と言える。

限られた授業時間の中で、児童・生徒に委ねる場面と教師が系統的に情報を示す場面のバランスをいかにとるかの判断は難しい。来年度も「主体的・対話的で深い学び」の授業構想を継続的に研究課題としたい。

(石垣和恵)

# 外国語教育共同研究部会報告

## — 今年度の取り組みと今後の課題 —

山形大学地域教育文化学部 佐藤博晴・三枝和彦

### <部会構成員>

地域教育文化学部： 佐藤博晴、三枝和彦、金子 淳、ジェリー・ミラー、佐々木正彦

教育実践研究科： 石崎貴士

人文社会科学部： 鈴木 亨、富田かおる、小泉有紀子、宇津まり子

附属小学校： 佐藤大将、榎 正智

附属中学校： 武田美奈、鈴木孝司、水田怜樹

### 今年度の取り組みについて

研究テーマ：小中連携の在り方について

この研究テーマのもとに行われた、共同研究部会の主な活動は以下のとおりである。

- A. 令和2年10月29日：附属小学校 秋の授業づくり研修会（5年生対象外国語）  
(11月6日：授業後の話し合い \*Zoom 会議)
- B. 令和2年11月12日：附属中学校 授業づくり研修会（中学1年生対象）
- C. 令和2年10月27日：附属中学校 教科研究会 提案授業①（中学2年生対象）
- D. 令和2年10月27日：附属中学校 教科研究会 提案授業②（中学3年生対象）

今年度はコロナウイルス感染拡大への警戒を続ける中での活動となり、例年通りの研究授業を行うことは難しかったが、研究会の形態を変更したり、規模を縮小したりすること、そして会員の努力によって活動は継続された。近年の部会報告は、研究授業を参観した本学教員が報告書を執筆することが多かったが、今年度は諸般の事情により、執筆を担当する本学教員が参観する機会を得られなかった。そこで授業者である附属小中学校教諭である各会員から、授業実践報告という形で報告書を提出していただいたので、それをもって部会報告としたい。以下、簡単に紹介をしておく。

附属小学校の外国語、外国語活動においては、授業で実践するコミュニケーション活動に対して児童が必要を感じるということがいかに大切で、そのためにはどうしたらよいか、ということが主要な論点のひとつになっているが、榎会員の報告はそれに対して明快な答えを与えてくれている。報告では、教科横断的なカリキュラム造りと動機づけプロセスを意識して授業を組み立てることが、外国語によるコミュニケーション及びそれを実現するための学びに対する統合的動機づけを高めるために大変有効であることを実証している。同時に、そのような動機付けは容易には達成できず、教師が子どもたちに寄り添い、機微を鋭く看取り、手立てを講じることが欠かせないことも指摘されている。

附属中学校の報告のうち、水田会員と鈴木会員の授業では、同じ物語教材が取り上げられ、解釈した

内容が聞き手に伝わりやすい読み聞かせを工夫する、という取り組みが行われた。これを通して、物語内容や登場人物の心情に対する理解を深め、それを豊かに表現し、ひいては自分の言葉で語る際の能力を高めることが期待されている。1年生と2年生では、1年間という時間が生徒の成長と英語力にどのような影響を及ぼしているのか、また、2年生は昨年度も同じ教材で学習しているので、昨年度と比較するとどのような変化があったのか、大変興味深い。物語のような文学的教材を効果的に利用した例としても注目に値しよう。今回の単元では英訳されたテキストのみを相手にしていたようだが、原作の日本語テキストと対照させて読むことによって、使用されている言葉の意味や用法について、より深い理解を得られることもあるだろうし、国語等、他教科との連携にも成果が期待できそうである。

武田会員の授業実践は、附属中の英語科が目標に掲げてきた、「即興でディベートのできる英語力」の養成と、探究的な学びの在り方として目指されている、「社会的な話題について資料や友達等の考えや意見も踏まえながら、自分の考えを伝え合う姿」を実現しようとするものだが、今回は更に、取り組むことが世界的に喫緊の課題であるSDGsを意識した内容となっている。そして、これまでの反省点を踏まえ、生徒たちがテーマを現実の問題として捉え、具体的に考え、納得のいく議論を行うための工夫が施されている。

(三枝和彦)

## A. コミュニケーションを図る必要感が生じる単元づくり

### ～第5学年「Welcome to Japan and Yamagata」の実践から～

(慎 正智)

#### (1) はじめに

今年度、小学校外国語科として「子どもにとってコミュニケーションを図る必要感が生じる単元づくり」に迫ることとした。そのためには、子どもが目的をもって意味のあるコミュニケーションを行う場面や状況を設定することが求められる。そこで、下記の2点を意識した単元づくりを行うことで、子どもが目的に向かって主体的に学びを進め、その過程において外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせるのではないかと考えた。

- ① タイム（総合的な学習の時間）の学習を主軸にした教科横断的なカリキュラム・マネジメント
- ② 動機づけプロセスを重視した指導

特にドルニエイが提唱した第二言語学習の「動機づけプロセスモデル」理論に基づいて授業を組み立てることとした。なぜなら、動機づけは時間とともに変動するものとして捉えられており、学びに向かう子どもの学習動機の変化を洞察することで、コミュニケーションを図る必要感が単元を通して子どもの中にあっただのかどうかを捉えられるのではないかと考えたからである。

#### (2) 単元を貫く課題を設定する

タイムの学習において、子どもたちは山形市ホストタウン応援団となり、山形市と協力してホストタウン相手国を盛り上げようとして学習を進めていた。サモア人のアロイシアさんによる出前授業や各国の文化等を調べる中で、「山形市のことをホストタウン相手国に伝えたい。」「山形市民にホストタウン相手国のことを伝えたい。」という新しい課題が立ち上がった。そこで、この課題を解決する手段として本単元を構想した。



ここで、大事にしたのは、単元を貫く課題の設定である。動機づけのプロセスモデルでは、達成しようとする目標や課題の選択・設定に学習者が積極的に関わる「選択的動機づけ」が動機づけの形成段階において非常に大切であると考えられている。そのため、「誰に」「何を」「どのように」という視点をもとに課題設定の話し合いを行った。「ホストタウンの人たちに」「日本の文化と山形市の魅力を」までは、異論無く決まった。しかし、「どのように」の部分では、「わかりやすく伝えたい。」「楽しく伝えることが大事だと思う。」「自分たちが使える英語で伝える。」「これまでの学びをいかして伝えたい。」などと、それぞれが自分の想いを述べた。K 児は、「後期の外国語の目標で決めた GREAT がいいと思います。GREAT には、みんなの想いがすべて入っているから。」と語った。この発言を受け、「確かに。」「なるほど。」という声とともに拍手が起こり、単元を貫く課題が設定された。この姿から、課題設定で大切なのは、自分たちのゴールの姿が学級全体で共有されることであると考えられる。みんなで話し合ったからこそ、本単元で常に立ち戻るべきコミュニケーションの姿が子どもの中で明確になっていった場面であった。

また、この話し合いの中で、「リモートで伝えたい。」というコミュニケーションの手段についても話題になったため、単元のゴールも ICT を活用した動画撮影にすることとした。

後期の頑張りポイントは、「GREAT」

<b>G</b> : Gesture, Guess	ジェスチャー と 推測
<b>R</b> : Respect, Reaction	相手への尊敬 と リアクション
<b>E</b> : Eye contact	アイコンタクト
<b>A</b> : Action	まぎは行動!
<b>T</b> : Try and error	何度も挑戦!

(3) 必要な言語材料を獲得する

単元を貫く課題を達成するためには、必要な言語材料に慣れ親しむ必要がある。そこで、スモールトークを行う中で、適宜子どもたちにも話を振り「行事の名前」や「様子を表す表現」に出合わせた上で、キーワードゲームや例文を利用した繰り返し練習を行った。ここでは、少しずつ変化を加えることで、子どもが楽しみながら表現に慣れ親しめるようにした。また、「日本の文化と山形の魅力」を伝えるという課題達成にむけ、食べ物やおすすめの場所など毎時間扱うトピックを変えながら、自分にとって必要な言語材料に出合うように単元を組み立てた。ここでは、動機づけのプロセスモデルにおける動機づけを積極的に維持する「実行動機づけ」の観点から、単元が進んでも英語構文や表現は変えず、単語だけを入れ替えることによって自分の伝えたい内容が増える楽しさを味わえるように授業を組み立てた。

言語習得は、インプット→インテイク→アウトプットの順に進んでいくため、出合った言語材料を自分の中に取り入れるインテイクをいかに増やしていくかが大事である。そこで、話す人を次々に変えて伝え合うペアトークを行った。その中で、自分の言いたいことをアウトプットできずに戸惑う子どもの姿が見られた。ここで、子どもの困り感を全体で共有した上で再度リピート練習を行うようにした。すると、その後のペアトークでは「こういうといいんだよ。」と自然にインテイクを助ける相互交流が始まった。ペアを替えながら、このようなやりとりを繰り返すことで、相手を見ながら自信をもって話す子どもが徐々に増えていった。また、言語材料に言い慣れてきたところで、「GREAT」の目標に向かってがんばっていた友達がいるかを子どもに尋ね、出てきた意見を全体で共有した。新たな目的意識をもたせることによって、その後のやり取りでは、ジェスチャーやアイコンタクトへの意識が高まった。

K 児は「行事を話す英語に親しんで、もっと他の行事の英語の言い方を知りたいなあと思いました。私が知りたいのは、①夏祭り②お花見③雪まつりです。次に自分の力だけで考えていきたいです。」と振り返り、新たな課題解決にむけて動機が高まったと捉えた。

(4) 自己の学習をメタ認知する

動機づけのプロセスモデルでは、課題遂行状況を振り返り、自己評価を行う「動機の振り返り」が、その後の目標・課題の選択・設定、取り組み状況に影響を与えていると考えている。そこで、この単元では、右のような3観点の自己評価とその理由についての振り返りを行った。

3. ふりかえり (G・R・E・A・T を意識して取り組もう)

◎自己評価 (A・B・Cを○でかこみましょう。 A=とてもそう思う B=そう思う C=次回がんばる)

①今日や以前に習った言葉や表現を使ってコミュニケーションをとることができましたか。	A・B・C
②自分の気持ちや考えなどを、相手がわかるように伝え合うことができましたか。	A・B・C
③今日の授業に自分から進んで取り組みましたか。	A・B・C

◇自己評価をつけた理由について、今日の授業での学びも入れながら具体的に書きましょう。

---



---



---



---

A 児の振り返りから、課題への意識変化を見ていく。第2時の振り返りには、「新しく習った英語もしっかり言えし、How is it? や We have ( ) in ( ). もちゃんと言えて相手と正しく会話ができただからこの評価にしました。」と記載していた。A 児にとっての自己評価基準は、新しく出合った言語材料を獲得し、使用できたかどうかである。しかし、単元の学習が進んでいくと、「今日習ったことを生かして、いろいろな山形の魅力、季節、行事、食べ物などを紹介してみたいです。今日習ったもの以外にも3年生から使ってきた英語も使って紹介したいです。」と A 児の振り返りに変化が見られるようになった。これは、必要な言語材料を獲得することによって、言語材料を「話すことができる・できない」から「どう使ったらよいか。」という自分の伝えたい内容面に課題意識が変化していったものと考えられる。

また、単元のゴールを Chromebook を利用した動画作成にしたことは、自己の学習をメタ認知する上で有効だった。作成当初は子どもの意識は覚えた内容を発表することに向いていたために、I 児の動画を全員で見ることで、「GREAT」な伝え方を全体で再確認した。すると、A 児は、声の抑揚やスピード、そしてジェスチャーや顔の表情にも気をつけながら何度も撮影を行っていた。A 児に理由を聞いてみると、「蔵王のお釜って、きっと聞いたことが無いと思ったから、自己紹介で習った方法で一つずつをゆっくり言った方がわかってもらえると思った。ジェスチャーもした方が、見ている人が楽しい気持ちになると I 児の動画を見て思った。」と答えた。つまり、ICT 機器を使用することで、即時的に自己の学習を客観視することができ、自己評価を繰り返しながら「GREAT な伝え方」に迫っていくことができた。

(5) おわりに

年間を貫くタイム (総合的な学習の時間) の学習を中心に据えることで、外国語での子どもたちの学びがタイムの課題解決の手段の一つとして展開された。そのため、単元で獲得する言語材料も子どもにとって必要なものとなったと感じた。根底にタイムでの課題があり、外国語で単元を貫く課題を教師と子どもで設定し共有することで、目的、状況、設定が明確になり、子どもにとって意味のあるコミュニケーションを図る必要性が生まれたと考える。教科横断的なカリキュラム・マネジメントは、意味のあるコミュニケーションを生むために非常に有効である。

また、学びに向かう動機づけの変化という視点で見ると、言語材料を言えるようになりたい、自分の伝えたい内容を言えるようになりたい、GREAT に伝えられたいようになりたいというように、変化していった。子どもは単元を貫く課題を解決したいと思っている。だからこそ、教師が子どもの困り感に寄り添いながら、適切な手立てをとっていくことが大切である。

コミュニケーションを図る必要感が生じる単元づくりには、教師と子どもで設定し共有する単元を貫く課題と課題解決に向かうために必要な教師の細やかな手立てが欠かせないのである。



## B. 解釈した内容がより聞き手に伝わるような読み聞かせをしよう

～Program 11 Grandma Baba and Her Friends on a Sleigh (Sunshine English Course 1)より～

(水田怜樹)

### 1. 目 標

簡単な語句や文で書かれた短い物語について、登場人物の行動や心情の変化、全体のあらすじなど書き手が述べていることの大まかな内容を捉えるとともに、聞き手に応じて意味内容をふさわしく音声化することを通して、物語の概要を自分の言葉とともに表現することができる。(読むこと イ)

### 2. 指導にあたって

#### (1) 生徒観

生徒はこれまで、5ラウンドシステム(『英語運用力が伸びる5ラウンドシステムの英語授業』金谷他, 2017)の考え方を取り入れた授業形態に沿って、スパイラル的に学習を進めてきた。コロナ禍の中でも教科書の本文をベースにした質の高いインプットをすることができている。教科書の英文を繰り返し聞いたり読んだりしながら内容を理解し、ピクチャーカードで表される教科書の話の流れを、本文を引用しながら再生 (Reproduction) したり本文を自分の言葉で置き換えながら再話 (Retelling) したりするために、必要な情報を聞き取ったり読み取ったりする活動に積極的に取り組んでいる。また、再生や再話の授業では、教科書のピクチャーカードの流れに加え、I think...やbecauseを使いながら、既習の言語材料をもとに自分の考えやそう考えた理由を述べたり書いたりすることもできるようになり、多様なアウトプットが見られるようになってきた。

今後の目標は、インプットした内容を再生・再話するだけでなく、聞き手意識を持たせながら、登場人物の行動や心情の変化などを捉え、教科書の内容をより豊かに表現することができるようになることである。内容理解した情報をただ述べるだけでなく、会話や物語の登場人物が置かれている場面や状況を正しく理解した上で、英語特有の発音やイントネーションに気をつけながら、意味内容にふさわしく音声化することのできる力を身に付けさせたい。音声化を通して深めた内容理解をもとに、それについて自分の言葉で伝え合ったり表現したりすることは、読み取った情報を引用しながら伝え合うことに応用されるだけでなく、スピーチやプレゼンテーションなどに向けて自分で作成した原稿を表現することなどにおいても、発音などの言語的な要素を意識しながら最も伝えたいことや強調したいことについて表現方法を工夫しながら話すことができる力につながる。

#### (2) 教材観

本単元は『そりあそび』(さとうわきこ作, 福音館書店)の英語版とも言える物語である。ばばあちゃん (Grandma Baba) と動物たちとのコミカルなやりとりが、well や Did you say...?などの会話を継続させるための英語表現や、Whee-ee!や Heave ho.などの間投詞などユーモアあふれる表現および挿絵とともに描かれている。また、場面やばばあちゃんと動物たちが置かれている状況が台詞やピクチャーカードからしっかり表れており、難しい表現があっても内容が予測・理解されやすいものとなっている。さらに語と語の連結による音の変化や、基本的な英語のイントネーションに関する知識を活用しながら声に出して読むことができ、英語による表現力を高めるために必要な要素を学習することができる。そして、単元の最後には紙芝居形式で朗読する学習活動が取り上げられている。英語で物語を紙芝居形式で表現することは、深い内容理解を促すだけでなく、内容理解をもとに登場人物の心情を豊かに表現する

ことにもつながる。

### (3) 指導観

本単元では、本校研究において目指す「探究的な学び」の姿を実現するために以下のような手立てを講じていく。

簡単な語句や英文で書かれた短い物語の概要を捉えることができるようにするために、教科書で扱われている「紙芝居形式の表現活動」から一步踏み出し、「読み聞かせ」という学習活動を設定する。「読み聞かせをする」ということは、物語について情報をもたない聞き手に対し、読み手として物語の何をどのように表現すれば聞き手に物語の魅力が伝わるかを思考し、判断しながら表現していく必要があるということである。読み聞かせをすることは、(1) 生徒が自然と物語を何度も読み、英文の行間に隠されたことを読むことによって読みを深めることができ、(2) 読み聞かせ方を追求することで英語の表現力を高めることができるようになることが期待されている。読み聞かせには必ず聞き手が存在し、読み聞かせる意味内容を確実に理解した上で自分の解釈を音声化する表現内容や表現方法の工夫が必要になる。聞き手が意味理解に集中できるようにするための工夫を考えることも、英語による表現力の育成につながり、言葉を通した豊かなコミュニケーション力の育成にもつながる。

また、繰り返し触れてきた物語の概要を捉えているかどうかを生徒自身で評価することができるよう、物語の「はじめに」の部分を英語で表現させる学習活動を設定する。「はじめに」というものは「読者に向けて初めに伝えたいこと」である。「はじめに」に書くべき内容と読み手のことを考えながら、物語の全てを語ることなく、読み手を物語に引き込むための情報を整理したうえで表現させる。このことは物語の深い内容理解を促すとともに、読んだことをもとに自分の意見を伝える力を身に付けさせることにもつながる。

以上のことを実現するために、以下のような手立てを講じる。

①本単元でも5ラウンドシステムの考え方を応用しながら授業を展開する。物語の行間を読めるようになるためには、意味内容(物語の事実)の理解が欠かせない。

②語と語の連結による音の変化や基本的な英語のイントネーションを意識しながら表現することができるよう、ワークシートに朗読記号を記入させながら音読や穴あき音読に取り組みせる。

③場面や状況の移り変わり、および登場人物の心情やその変化を整理することができるよう、各時間で事実や心情をマッピングやQ&Aで整理させたり、グループで本文が書かれた拡大用紙に解釈したことをまとめさせたりする。

④意味内容を適切に表現するための工夫を対話的に考えることができるよう、生徒の思考を・判断プロセスを可視化する。生徒同士で記入内容を見合ったり、教師がそれをみとったりすることを通して、グループの実態に応じた支援やフィードバックができるようになる。

⑤発音やイントネーションなどの英語の音声の正確さや、自分たちで考えた表現方法の工夫が聞き手に適切に伝わるかどうかを確認させるために、クラスで小発表会を行い、解釈と表現が合っているかどうかを相互評価する機会を設ける。

⑥より聞き手に伝わる英語の音声や表現方法についてグループで追究することができるよう、グループに1台ずつボイスレコーダーを持たせ、録音しながら自分たちの読み聞かせをモニターできるようにする。

⑦聞き手に配慮した読み聞かせをすることができたり、読み手に配慮した「はじめに」を英語で書くことができたりするよう、聞き手および読み手を「小学校6年生」と設定する。小中連携の重要性に鑑み、小学校外国語活動や外国語科の学習の意欲の向上にもつなげたいと考えている。

⑧聞き手や読み手に応じて物語の概要を伝えることができるよう、読み聞かせの前に物語の概要を自分の言葉で表現する活動を設定する。これまでの授業で行ってきた「再生・再話」に具体的な聞き手や読み手を設定させることで「まとめた事実を伝える」だけでなくまとめたことを「聞き手や読み手に応じて伝える」という意識を持たせたい。

### 3. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む態度
<p>[知識] 不規則動詞の過去形を用いた文の構造を理解している。</p> <p>[技能] 不規則動詞の過去形を活用して、簡単な語句や文で書かれた物語の内容を読み取る技能を身に付けている。</p>	<p>小学校6年生に「そりあそび」という絵本を英語で読み聞かせたり「はじめに」を通して概要を伝えたりするために、まとまりのある英文を読んで、物語における登場人物の行動や心情の変化、物語全体のあらすじや場面の移り変わりなど、物語全体の概要を捉えている。</p>	<p>小学校6年生に「そりあそび」という絵本を英語で読み聞かせたり「はじめに」を通して概要を伝えたりするために、まとまりのある英文を読んで、物語における登場人物の行動や心情の変化、物語全体のあらすじや場面の移り変わりなど、物語全体の概要を捉えようとしている。</p>

### 4. 指導と評価の計画（13時間計画）

☆探究しようとしている姿が特に表れると考えられる機会

時数	ねらい (■)、言語活動等 (丸数字)、評価の方法 (◎)	知	思	主	備考
1 5 7	<p><b>Round 1</b> (1)</p> <p>■本単元の目標を確認し、ゴールの姿を共有する。</p> <p>①読み聞かせや「はじめに」を表現する目的や場面、聞き手や読み手等について理解する。</p> <p>■物語の音声を聞き、物語のおおまかな内容を理解する。</p> <p>②教科書の音声を最初から最後まで聞きながら、教科書のピクチャーカードを並べ替える。</p> <p>③聞き取った情報を、メモしたりマッピングしたりして、日本語や英語で書く。</p>	○	○	○	<p>・Roundのあとの( )はRoundにかける時数である。</p> <p>・すべての時間において、記録に残す評価を行うわけではない。ただし、その時間のねらいに即して、生徒の活動の状況を確認に見届けて指導に生かすことは毎時間必ず行う活動させているだけにならないよう十分留意する。</p>
	<p><b>Round 2</b> (1)</p> <p>■おおまかに理解した内容の音と文字を一致させる。</p> <p>①教科書の音声を最初から最後まで聞きながら、物語の流れに合うように教科書の全文を並べ替える。</p> <p>②Round 1で理解できなかった情報を日本語や英語でメモやマッピングに書く。</p> <p>☆Round 1で理解しきれなかったあらすじについて、より具体的に理解し、伝え合おうとしている。</p>				
	<p><b>Round 3</b> (2)</p> <p>■物語を黙読・音読し、内容や文構造の理解を深める。</p> <p>①4つの場面をマッピングで整理して読む。</p> <p>②ペアで読み取ったことを英語で伝え合う。</p> <p>③多様な音読練習で読む。</p>				

	<p><b>Round 4</b> (1)</p> <p>■穴あき音読をし、さらに内容や文構造の理解を深める。</p> <p>①新出文法や内容語を空欄にした穴あき音読をする。</p> <p>②内容理解を深めることができるよう、物語のおおまかな内容を説明文の形式で書く。</p>				
	<p><b>Round 5</b> (2)</p> <p>■物語を再話（再生）し、自分の言葉で物語の内容を伝えることで、物語の概要をより深く捉える。</p> <p>①本文を引用したり、<b>I think...</b>や<b>because</b>を用いて自分の考えや理由を述べたりしながら、理解したことや考えたことなどを伝え合う。</p> <p>☆②伝え合ったことを踏まえ、「はじめに」を書く。</p> <p>◎物語の概要を捉えることができているかどうかを、再話（再生）の内容から評価する（発表の様子・ワークシートへの記述）。</p>				
8	<p>■解釈をもとに「聞き手に魅力を伝えるための」表現方法について考える。</p> <p>①場面に合った表現方法かどうか吟味しながら、物語の音声を再度聞く。</p> <p>②物語における登場人物の行動や心情の変化、物語全体のあらすじや場面の移り変わりを自分なりに解釈し、表現の根拠をメモする。</p> <p>③まとめたことをもとに、実際に読む。</p>				
9 (本時)	<p>■小学生への読み聞かせにふさわしい音読の表現について解釈をもとに追求し、実際に練習する。</p> <p>①まとめたことをもとに、物語を声に出して読む。</p> <p>☆②ボイスレコーダーで録音した読み聞かせがどのように聞こえたかを自己評価する。「聞き手に魅力を伝えるために読む」ということを意識しながら、聞き手に合った表現方法について考える。考えたことをもとに、読む練習をする。</p> <p>☆③ミニ発表会を通して解釈と表現が合っているかを聞き手と読み手に分かれて相互評価する。拡大用紙に評価の内容を追記し、より聞き手に伝わる表現方法について追究する。追求したことをもとに、読む練習する</p> <p>◎読み聞かせにふさわしい音読の表現について、追求したことが実際の読み聞かせで表れているかどうかを、発表の様子や撮影した動画およびふり返りの記述をもとに評価する。（発表の様子・ワークシートの記述）</p>		○	○	
10	<p>■クラス発表会を行い、相互評価しながら、読み聞かせにふさわしい音読の表現について追求する。</p> <p>☆①自分たちの工夫点を模造紙に明示しながら模擬読み聞かせをする。</p> <p>☆②模造紙に明示された工夫点を見ながら模擬読み聞かせを聞く。</p>				

1 1	<p>■小学校6年生を目の前に、絵本の読み聞かせをする。</p> <p>①自分たちで作った「はじめに」を小学生の手元にある状態で話す。</p> <p>②小学生の率直な感想を聞く。</p> <p>③自分たちが工夫した表現方法がどのように聞き手に伝わったかを小学生からフィードバックをもらう。</p>		○	○	
1 2 1 3	<p>■聞き手および読み手からのフィードバックをもとに、より聞き手に伝わる表現方法について追究する。</p> <p>①小学生からの感想をもとにして表現方法を修正し、読み聞かせを録音する。</p> <p>■録音したものを自己評価しながら、本単元を振り返る。</p> <p>①表現方法について工夫したことをもとに読み聞かせをする。</p> <p>◎表現の根拠を自分の言葉で説明できているかどうかを、またその説明および表現が物語の概要を捉えているものかどうかを、録音の内容およびふり返り用紙の記述から評価する。(録音した音声・ワークシートへの記述)</p>	○	○	○	

## 5. 本時の学習活動 (9 / 13)

### (1) 目 標

登場人物の心情や場面の移り変わりおよび概要が小学生に伝わるような読み聞かせの表現方法を追求することを通して、物語の概要をより深く捉えることができる。

### (2) 展 開

学習活動【学習形態】	・指導上の留意点 ☆評価基準 (評価方法)、目標を達成した生徒の姿
<p>課題 物語の魅力が小学生に伝えられるように読み聞かせよう</p> <p>～読み聞かせにふさわしい音読の表現とはどのような読み方だろう～</p>	
<p>1. 前時でまとめた物語の解釈をもとに、読む練習をする。 【個 or グループ】</p> <p>2. 3つの場所でミニ発表会を行い、解釈と表現方法について相互評価する。【全体】</p> <p>3. 相互評価をもとに、表現方法や内容を修正し、読みの質を高める。【グループ】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分が考えた解釈や表現方法について意識しながら練習することができるよう、その根拠が記入された拡大用紙を見ながら音読をさせる。生徒が教科書音声を聞きたい場合は、個別に音声を聞かせる。</li> <li>音読を客観的に分析することができるよう、グループに一台ボイスレコーダーを配布し、必要に応じて発表を録音したりして、自己評価させる。評価の視点は①解釈と表現が合っているか、②英語特有の発音やイントネーションで読んでいるか、の2つにしぼる。</li> <li>表現方法や内容について聞き手が適切に評価することができるよう、読み手が作成した拡大用紙を事前に確認させ、視点をもったうえで発表を聞かせる。感じたことを違う色のペンで拡大用紙に記入させる。</li> <li>読みの質を高めることができるよう、自分たちが考えた表現方法や内容と客観的な視点での評価を比較・整理する。必要に応じて読みをボイスレコーダーで録音したり各自練習したりして、自分たちの表現を確認する。また、学習活動2とは違うグループとミニ発表会を行い、さまざまな視点で読みを捉えてもよいこととする。</li> </ul>

☆思考・判断・表現および主体的に学習に取り組む態度（拡大用紙への記述内容・練習の観察）

次のようなつぶやきをしたり、拡大用紙に記述したりしている。（下線は解釈の部分）

- ・ It's so cold outside.と It's really, really cold outside. は、so や really をゆっくりふるえるように読んでみよう。  
理由はここえるくらい寒い様子を伝えたいから。
- ・ It's so cold outside.と It's really, really cold outside. はもう嫌になるくらい寒い！と思っていると解釈したから、so や really を強めに、少し怒った感じで読んでみよう。
- ・ Did you say jump?や Is it OK?は、「本当にそんなことして大丈夫?」と不安に思う様子とも解釈できるし、「本当にやっているの?」とすこしワクワクしている様子とも解釈できる。どのように読もうかな。そのあとの Grandma Baba の Yes, I did.や Sure!の表現とどうつなげようか。
- ・ ピクチャーカードの Cat の表情はそりが早すぎてびっくりしているようだけれども、Whee-ee!は喜び・興奮などを表す単語だから、どのように読むと小学生に伝わるかな。
- ・ CD では Heave ho.はかなり高いトーンで読まれていたけど、本当にそうなのかな。動物たちは必死に引っ張っているわけだから、もう少しぜえぜえした感じで読めないかな。

4. クラス発表会への見通しを立てる。

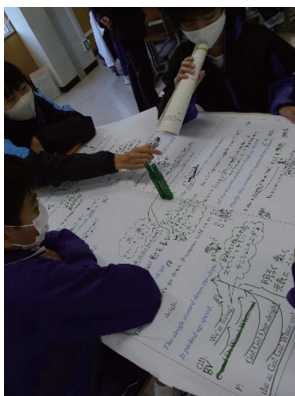
【グループ→全体】

・ クラス発表会でどのような読み聞かせを目指すか見通しをもてるように、本時で加筆・修正された拡大用紙の記述をグループで確認する。必要に応じて家で練習する項目をグループで話し合わせる。

### (3) 授業の実際

#### (a) 学習活動1について

各グループで前時までにまとめた「台詞の解釈」や「それを音読するときの工夫点」が書かれた拡大用紙を見ながら、読み聞かせの練習をさせた。グループに1台ずつボイスレコーダーを配布したことで、音声とメモを関連付けさせ、自分たちの解釈の妥当性を検証しながら音読練習に取り組むことができた。



#### (b) 学習活動2について

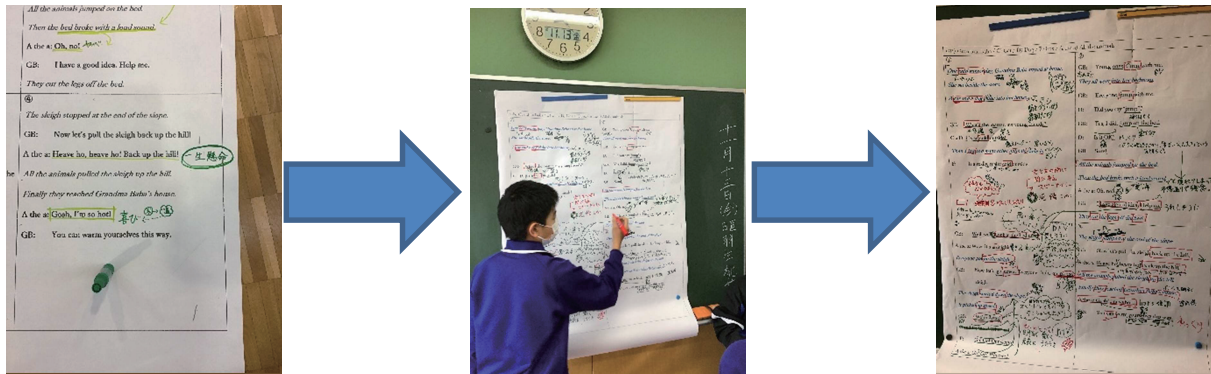
読み聞かせを他のグループに発表させ、自分たちの解釈が本当に伝わっているかどうかを聞き手のグループに評価させた。拡大用紙に書かれてある解釈をあらかじめ確認させておくことで、より聞き手意識をもって発表を聞かせることができた。また、違う色のペンで聞き手側の印象を話し手側の拡大用紙に記入することで、より質の高い読み聞かせをするために必要であろう要素を生徒の考えから引き出すこともできた。



視点1)「表現内容」と「表現の工夫」が合っているかどうか	
A B C D	☐
コメント	
☐	
☐	
視点2) 語と語のつながりやイントネーションが英語らしいもの(CDのよう)である。	
A B C D	☐
コメント	
☐	
☐	

(c) 学習活動3について

相互評価をもとに、さらに解釈や表現の工夫を拡大用紙に記入させ、読み聞かせの質を高めさせた。解釈や表現の工夫について再度話し合ったり、何度もボイスレコーダーで読み聞かせを録音したりしながら、登場人物の心情などの物語の概要をより深く読み取ることができた。



C. 自分たちの解釈がより聞き手に伝わるような読み聞かせをしよう

～PROGRAM 11 Grandma Baba and Her Friends on a Sleigh (Sunshine English Course 1)～  
(鈴木孝司)

1. 目標

日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の概要を捉えることができるようにする。  
(読むこと イ)

2. 指導にあたって

(1) 生徒観

生徒はこれまで、授業中の教科書の音読練習や家庭での音読カードを活用した自立的な音読練習に繰り返し取り組んできた。授業においては英語特有の音やイントネーション等に気をつけながら読んだり、家庭では自分で課題を設定して音読したりしてきた。ほとんどの生徒が積極的に音読練習に励み、教科書で学習した英文を活用しながら、課題について自分の考えや意見について話したり書いたりすることができている。

その一方で、これまで学習してきた学習内容を活用して簡単な英語で表現したり、伝えたい内容が相



手に伝わりやすいように表現したりする点が課題となっている。昨年度の本単元の学習の様子からは、英語らしい発音やイントネーションで、意欲的に読み聞かせをしている様子がうかがえた。その一方で、物語から読み取ったことをもとに声色を変えるなどの工夫をしながら読み聞かせをしてはいるものの、全体としては物語の読み取りが不十分で、表現の工夫も不十分な場面もある。ただ単に自分の言いたいことを一方的に伝えたり、英語らしい発音やイントネーション等で読んだりするだけではなく、相手を意識して、相手が理解しやすいように工夫して表現できる生徒になることを期待したい。

## (2) 教材観

本単元は、1年生の教科書に載っているもので、昨年も授業で学習した内容である。まとまりのある物語文を読んだ後に、5人程度で班を作り、紙芝居形式で読み聞かせをする構成になっている。本学級の生徒も、附属小学校の生徒に向けて、英語の読み聞かせを行う計画であった。最終的に直接読み聞かせをすることはできなかったが、その様子を録画して残している。

言語材料としては、様々な動詞の過去形、会話を継続させるための英語表現、英語の様々な間投詞を学習する。特に本単元では、**well** や **Did you say...?**などの会話を継続させるための英語表現や、**Whee-ee.** や **heave ho.**などの英語の様々な間投詞について注目して触れることで、より物語の場面や状況を捉えることができる。

また国語の学習では、昨年度より朗読を継続して学習している。その中の手立ての一つである、場面や状況に合わせてどのように表現するかをその理由や根拠を添えて書き出せることは、英語科の本単元でも有効であり、教科横断的に思考・判断・表現する力の育成につながるのではないかと考える。

## (3) 指導観

本単元では、小学生に英語の物語を読み聞かせる活動を行う。物語の内容を知らない小学生を相手に読み聞かせるためには、まず自分たちがどんな物語なのかを正しく読み取り、それをどう工夫して伝えるかを考え、表現する必要がある。そのために、次の①～④を手立てとして講じていく。

①より場面や状況を的確に把握させるために、物語の挿絵や台詞を順番に並べ替えさせる活動を設定する。そうすることで、絵に合わせて内容を想像し、まとまりのある英文をより創造的に読み取ることができると考える。そこで得た解釈をもとに読み聞かせをすることで、より表現豊かに伝えることができるようになるのではないかと考える。

②読み取ったことを適切に表現につなげるために、理由や根拠を添えて表現の工夫点をまとめさせる。適切に表現できるようになるためには、なぜそう表現するのかが大切になる。生徒の思考・判断を可視化することで、生徒自身が適切に表現することについてより具体的に考えることができるようになると考える。また思考・判断に沿って表現できているか、教師が明確に見とれ、適切な指導が可能になると思われる。

③自分たちの工夫点が相手に伝わっているかを確認させるために、自分たちの読み聞かせをiPadで撮影して自己評価するとともに、他の班から実際の工夫点に沿って評価してもらう機会を設けながら発表練習に取り組みさせる。自分たちの評価と他の班からの評価を比較することで、自分たちの表現の工夫が相手に伝わるのだと自信を深めさらなる意欲につなげたり、思い通りに伝わらないギャップに気づき、さらなる相手意識につなげたりすることができる。工夫→撮影→評価→…を繰り返しながら行うことにより、自分たちの力でより相手意識を持ちながら発表練習に取り組みさせたい。

④物語の内容や楽しさが小学生に伝わったことを実感させるために、発表後に小学生に感想を話して



もらったり、評価のポイントに沿って評価してもらったりする機会を設ける。実際に評価のポイントに沿って評価してもらうことで、相手に理解してもらえたことを実感し、今後のより相手を意識した表現活動の工夫につなげていきたい。また小学校との連携という点で、小学生の外国語活動や外国語科の学習の意欲の向上につなげていきたい。

特に②は、2学年国語科の古典の群読の授業でも行われている手立てであり、本単元で行う英語での読み聞かせを行う際にも有効な手立てであると考えられる。また以上のような手立てをとることにより、探究的な学びの姿である「物語の内容を、自分たちの解釈をもとに聞き手にわかりやすいような表現方法で伝えている。」に近づけると思われる。

### 3. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>[知識] 英語の発音、音変化、強勢やイントネーション等の特徴やきまりに関する事柄を理解している。</p> <p>[技能] まとまりのある英文を最初から最後までひと続きで聞いたり読んだりし、場面や状況、登場人物の心情、物語のあらすじ等の概要を捉えて聞き取ったり読み取ったりする技能を身につけている。</p>	<p>読み取った内容をもとにしながら、場面や状況、登場人物の心情、物語のあらすじ等を、相手が理解しやすいような表現方法で伝えることができる。</p>	<p>読み取った内容をもとにしながら、場面や状況、登場人物の心情、物語のあらすじ等を、相手が理解しやすいような表現方法で伝えようとしている。</p>

### 4. 学習計画（8時間計画）

☆探究しようとしている姿が特に表れると考えられる機会

時間	ねらい (■) 主な言語活動等 (丸数字) 評価の方法 (◎)	知	思	態	備考
1	<p>■本単元の目標を確認し、ゴールの姿を共有する。</p> <p>・本単元で取り組む読み聞かせのゴールと、これまでの授業での学習や音読への取り組みの関わりについて理解している。</p>				<p>※本単元の1時間目及び、4～7時間目までは、記録に残す評価は行わない。ただし、その時間のねらいに即して生徒の活動状況を確認に見届けて指導に活かすことは、毎時間必ず行うこととする。活動させているだけにならないよう十分留意する。</p>
2	<p>■教科書本文を最初から最後までひと続きで読み、物語のあらすじを捉え直す。</p>	○			
3	<p>☆①教科書の挿絵（ピクチャーカード）を物語に合うように並べ替え、物語全体のあらすじを思い出す。</p> <p>・教科書本文を聞いたり音読したりする前に、物語のあらすじに沿って挿絵を並べ替えることで、教科書の内容をより創造的に思い出したり、予想したりしている。</p> <p>・挿絵を並べ替えさせる同時に、その絵の場面のあら</p>				

	<p>すじを簡単にまとめている。</p> <p>☆②教科書を見ずに物語の台詞を並べ替え、物語のあらすじをさらに具体的に捉える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・挿絵の並べ替えや確認したあらすじをもとに、物語の台詞を並べ替え、より具体的に物語の全体を捉えている。</li> </ul> <p>◎まとまりのある英文を最初から最後までひと続きで読み、場面や状況、登場人物の心情、物語のあらすじ等の概要を捉えることができているかどうか、ワークシートへの書き込みの様子から評価する。</p>				
4 5	<p>■読み取った内容をもとにして、表現方法を工夫する。</p> <p>①第2～3時で読み取ったことをもとに、どう表現するか考え、根拠や理由とともに書いてまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・使われている英単語や表現、場面や状況から、具体的にどのように読み聞かせをするか、教科書に書き込んでいる。</li> <li>・表現の工夫を書き込む際は、それがなぜそのような表現になるのか、根拠や理由を明記している。</li> <li>・表現の幅が広がるよう、個人で考えたこともとに、班で意見を出し合いながら表現方法について考えを出し合っている。</li> <li>・ただ意見を出し合うだけでなく、出し合った工夫点をもとにiPadで自分たちの読み聞かせを自己評価しながら表現方法を工夫している。</li> </ul>				
6 7	<p>■互いに評価し合いながら、より小学生に伝わりやすい表現方法を目指す。</p> <p>☆①自分たちの工夫点を明示しながら、模擬発表を行い評価し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・工夫点をまとめた模造紙を提示し、評価のポイントを明確にしながら発表したり、評価したりしている。</li> <li>・他の班からの評価だけでなく、自分たちの発表を自己評価できるよう、iPadで自分たちの模擬発表を撮影し合っている。</li> <li>・iPadの映像からを見た自己評価や他の班からの評価をもとに、そのギャップに気付いたり、自信を持ったりしている。また評価をもとに自分たちの工夫点についてさらに工夫を凝らしている。</li> </ul>				

8	<p>■Zoom で小学生を目の前にしながら、読み聞かせをする。</p> <p>☆①小学生に伝わりやすい表現で、物語の読み聞かせを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Zoom を用いて小学校とつなぎ、小学生に伝えることを意識しながら読み聞かせを行っている。</li> <li>・実際に小学生に内容が伝わったかどうかやわかりやすかったかどうかを評価してもらい、それをもとにしながら相手に伝わりやすい表現方法の工夫について考えている。</li> </ul> <p>◎読み取った内容をもとにしながら、その内容を相手が理解しやすいような表現方法で伝えることができているかどうかを、ワークシートへの工夫点の記述内容と読み聞かせの様子から評価する。</p> <p>◎読み取った内容をもとにしながら、その内容を相手が理解しやすいような表現方法で伝えようとしているかどうかを、ワークシートへの工夫点の記述内容と読み聞かせの様子から評価する。</p>		○	○	
---	--	--	---	---	--

## 5. 本時の学習活動（6／8）

### （1）目 標

小学生に物語の内容が伝わるように、英単語や表現、場面、状況に応じて、読み取ったことをもとにしながら表現方法を工夫し音読することができる。

### （2）展 開

学習活動【学習形態】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導上の留意点</li> <li>☆学習改善につなげる評価基準（評価方法）、目標を達成した生徒の姿</li> </ul>
<p>課題 小学生に物語の内容が伝わるように、英単語や表現、場面、状況に応じて表現方法を工夫しながら読んでみよう。</p>	
<p>1. グループ毎にこれまでの工夫した内容を確認しながら読み聞かせを行い、評価し合っている。 【グループ】</p> <p>2. 1での評価をもとにしたリ、自分たちの発表の様子を見て気づいたことをもとにしたリして、さらに工夫を重ねて練習している。 【グループ】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちの発表を客観的な視点から評価できるように、他のグループを相手に、紙芝居形式の読み聞かせを行う。</li> <li>・自分たちの発表を客観的な視点から評価できるように、他のグループを相手に紙芝居形式の読み聞かせを行う。</li> <li>・自分たちの工夫点について相手に伝わる表現になっているかどうかを評価してもらうために、前時までの工夫点を掲示したり、聞き手にプリントで配布したりしてから読み聞かせを行う。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他のグループからのアドバイスをもらうだけでなく、自分のグループについて自己評価させるために、学習活動1で撮影した動画を視聴させる。</li> <li>・より聞き手を意識した読み聞かせになるように、学習活動1で得たアドバイスや自己評価をもとに、さらに自分たちのグループが工夫できるところを出し合い、工夫点とその理由を模造紙に記入させる。</li> <li>・前時までの工夫点と本時の工夫点が区別しやすいように、色の違うマーカーで工夫点を記入させる。</li> </ul>
--	--

☆ [思考・判断・表現] (模造紙への記述内容、練習の観察)

より聞き手に伝わりやすい読み聞かせになるように、前時までの表現方法の工夫とともに、本時の自己評価や他者評価をもとにしてさらに工夫しながら表現している。

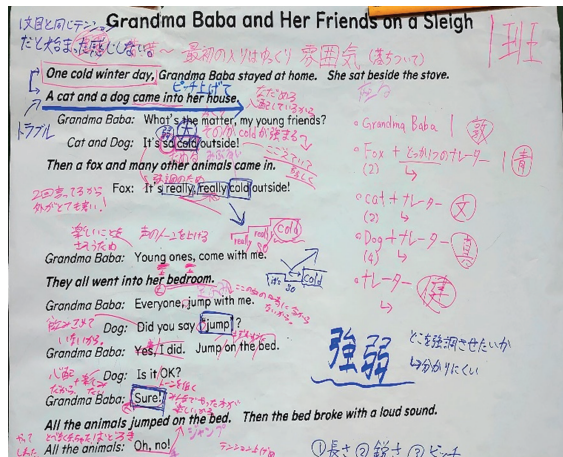
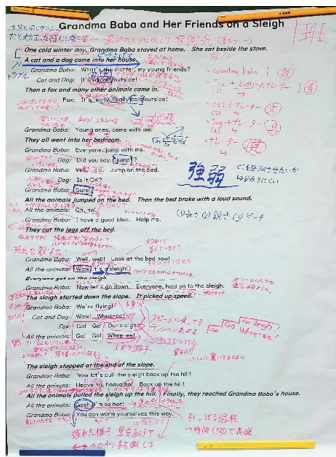
- ・“so cold”という記述や台詞や前後の文脈から、凍えそうなくらい寒くて早く暖まりたいという気持ちが伝わるように、長めに強調して読む。  
→ 読んだつもりだったが、伝わらなかったの、もっと長めにピッチを変えて読む。
- ・“Did you say ‘jump’?”では、jump? という戸惑いの気持ちがよくつたわるように、jumpの前に間を置いて読む。  
→ 入れて読んだつもりだったが、それだけでは不十分だった。Jumpだけ、声色を変えて読んでみる。

<p>3. 次時の見通しをもつ。 【全体】</p>	<p>・本時で工夫したことがより聞き手に伝わるように表現できているかを確認するために、次時に再度同じグループの前で発表し評価し合う。</p>
-------------------------------	--

## 6. 授業の実際

### (1) 学習活動1について

学習活動1を行うにあたって、評価のポイントを明確にするために、下の《図1》、《図2》のように模造紙に自分たちの工夫点を、理由や根拠を添えて書き込ませた。(前時までの工夫点がピンク色、本時の学習活動2で書き込んだものが青色) 他の班はそれを参考にしながら発表を見て、それぞれ評価してアドバイスした。また自分たちの発表を集音マイクで用いながらiPadで撮影し、発表後に自分たちの発表を視聴して自己評価させた。



ただ単にどう工夫したかだけでなく、その根拠や理由も一緒に明記させたことで、評価する側にもその意図が伝わり、より具体的にアドバイスできているようだった。生徒は、自己評価や他の班からのアドバイスをもとにしながらか、うまく表現できたことやうまくいかなかった点について話し合っていた。中には、自分たちの手応えと客観的な評価のギャップに戸惑っている様子が見られた。

## (2) 学習活動2について

学習活動1で気づいたことをもとにしながらか、再度班で工夫点を話し合った。その後、話し合った内容やさらに工夫するポイントなどを、それまでとは違った色のペン（青色）で書かせた。その中で、以下のような記述が見られた。

・最初の入り部分で物語の雰囲気に入り込ませるために、ゆっくり落ち着いた感じで読むようにしたが、それだけでは不十分だと思った。なので、次の2文目を、1文目より読むスピードを上げたり、ピッチを変えて読んだりしてみようと思う。

・“It’s really, really cold outside.”のところは、前に出てくる cold outside よりもさらに寒さが伝わるように強調して読みたいので、最初の really よりも次の really を、そして2回目の really よりその次の cold 強く、より強く、高いピッチで読むようにしてみる。

・自分の班の発表の様子を見て、自分たちの工夫が思ったよりも伝わりづらいものになっていた。さらに小学生にこの話に入り込んでもらうために、それぞれの単語や英文を読む①長さ、②鋭さ、③ピッチなどを工夫してもう一度練習したい。

## C. SDGsを通して、私たちが大切にしたいことを英語で伝えよう

～Program7 「What Is The Most Important Thing to You?」～

(武田美奈)

### 1. 単元の目標

他者の意見等を踏まえた自分の考えや感想などをまとめるために、世界の諸問題などの社会的な話題について書かれた文章を読み、読んだことを基に考えたことや感じたこと、その理由などを伝え合うことができる。「話すこと [やり取り] ウ」

### 2. 指導にあたって

#### (1) 生徒観

本学級の生徒たちは、普段の授業の初めに行われる日常的な話題に関する small talk を通して、自分の考えを述べるときには必ず理由も含めて述べる、ということを継続して行ってきたため、I think...because...や so を用いながらか理由を述べる技能が定着している。9月に実施したインタビューテストでは、ほとんどの生徒が、教師の与えられた問いに対して適切な言語材料や表現を用いて解答していた。

しかしながらか、社会的な話題に関して意見を伝え合うことに関しては、まだ課題がある。具体的には、社会的な話題に関して意見を述べる時に大切である相手を納得させるような表現力である。中学校2年時の「Program 3 What can we do for others?」や、「Program 7 If You Wish to See a Change」の学習を通して、世界で起きている諸問題に関する資料を読み取って、それに関する自分の考えや意見を伝え合う活動は

経験しているが、生徒の表現した内容は、「We can help each other.」など、汎用的なものが多く、本文や補助資料などを活用して内容を構築するというよりは、自分の今まで感じてきたことや知り得てきたことから作られたものが多かった。ゆえに、自分が何を問題と捉え、その問題のために何ができるか、という具体的な考えがうまく伝わらず、自分の意見は伝えているものの、相手を納得させるには不十分であった。そこで、中学校2年時後半、また、中学校3年時のディベートやディスカッションの授業では、社会的な話題に関して、主観だけではなく客観的に物事を捉え、根拠をもって意見を述べる機会を設けたり、本文の引用を用いたりしながら相手に自分の意見を、説得力をもって伝える活動を仕組んできた。また、相手にわかりやすく意見を述べるための、文の構成や表現、資料を活用したり引用したりする場合の表現についても学習していく必要がある。

## (2) 教材観

本教材は、コミュニケーションを行なわれる場面を考えながら、社会的な話題について自分の考えを表現したり伝え合ったりすることができる力を育成する上で、効果的な点が2点ある。

1 点目は、教科書の本文に、宇宙船地球号の代表である山本敏晴さんの活動の理念や世界の子も達の考えが書かれていることで、生徒の視点が自ずと世界に向けられ、地球的な視点で物事を考えなければいけないと気づかせる点である。具体的な内容としては、開発途上国の現状やツバルの環境問題などが扱われており、SDGsにも関連する「持続可能な世界を築くためにはどのようにしたら良いのか」、というメッセージが込められている。また、本文のタイトルである「What is the most important thing to you?」の「you」が意味することとは、自分も含めた全ての人々であり、その結果、生徒の意見も自分に直接関係することだけにとどまらず、広い視野をもって表現することが期待される。さらに、本授業で使用する自作教材では、SDGsの「4 質の高い教育をみんなに」に関連した内容を扱い、教科書で考えた内容を広げ、世界の諸問題に関して自分事として考える教材として適切であると考えられる。

2 点目は、本文中に関係代名詞の文が用いられていることが、現状を理解したり、客観的に説明したりする上で、有用であると考えられる。世界の人々が抱えている問題や状況について関係代名詞を用いて表現することで、相手に簡潔にわかりやすく説明することが可能となる。

以上の点から、本教材は実際のコミュニケーションが行われる場面を考えながら、社会的な話題について自分の考えを表現したり伝え合ったりすることができる力を養うことができる教材であると考えられる。

## (3) 指導観

本単元では、タイトルでもある「What is the most important thing to you?」の問いに対して、世界的な視点で捉え、自分の考えを伝え合うことができるように、「you」の部分で「people who live in Japan」、「children who live in Japan」、「children who live in the world」などと具体的な対象に変えながら問いを繰り返していく。また、自分の考えや意見を伝える際に、相手にわかりやすく伝えるために、関係代名詞を用いて現状を客観的に説明することや、文を引用したりすることを指導していく。

単元のまとめとして、再び「What is the most important thing to you?」と生徒に問い、はじめとは異なる自分の考えに気付かせたり、仲間との意見交換を通して多様な価値に触れさせたりする。

本時では、本校研究において目指す「探究的な学び」の姿として、「社会的な話題について資料や友達等の考えや意見も踏まえながら、自分の考えを伝え合う姿」が見られるよう以下のような手立てを講じていく。社会的な話題に関して自分の考えを相手に根拠をもってわかりやすく伝えることができるように、SDGsに関連する世界の現状やデータが含まれた資料を準備し、客観的に表現できるようにさせる。

また、話題に対して多角的に捉えて意見を言うことができるように、ディベートのように賛成、反対の立場から理由を考えさせる。自分とは異なる立場の相手に意見を伝えさせることで、より相手を納得させるように内容を吟味したり、多様な価値に気づいたりすることが考えられる。

今後の学習活動において、自分だけに関わる意見を伝えるのではなく、客観的な視点や社会と結びつく内容も交えながら相手に分かりやすく伝えようとする姿が見られるようになることを期待している。

### 3. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>関係代名詞の特徴やきまり、引用するための表現を理解している。</p> <p>世界の諸問題について考えたことや感じたことなどを、関係代名詞などを用いて伝え合う技能を身に付けている。</p>	<p>他者の意見等を踏まえた自分の考えや感想をまとめるために、社会的な話題に関して読んだことについて、考えたことや感じたことなどを、英文を引用するなどして伝え合っている。</p>	<p>他者の意見等を踏まえた自分の考えや感想をまとめるために、社会的な話題に関して読んだことについて、考えたことや感じたことなどを、英文を引用するなどして伝え合おうとしている。</p>

### 4. 学習計画（6時間計画）

時数	学習活動	指導上の留意点 ☆評価規準（評価方法）
1 3	教科書の本文を読み、読み取れた内容に関する自分の考えや感じたことなどを伝え合う。	社会的な話題に関して自分の考えを相手にわかりやすく伝えることができるように、相手を納得させる表現や英文の構成を考えさせる。
4 5	教科書とは別の英文（SDGsに関連する英文）を読み、引用しながら、考えたことや感じたことなどを伝え合う。	<p>社会的な話題に関して自分の考えを相手に根拠をもってわかりやすく伝えることができるように、事実やデータが含まれた資料を準備し、客観的に表現できるようにさせる。</p> <p>社会的な話題に関して多角的に捉えて意見を言うことができるように、ディベートのように賛成、反対の立場から話題を考えさせる。</p>
6	教科書とは別の英文（SDGsに関連する英文）を読み、引用しながら、考えたことや感じたことなどを伝え合ったり、その内容を書いてまとめたりする。	<p>社会的な話題に関して自分の考えを相手に根拠をもってわかりやすく伝えることができるように、事実やデータが含まれた資料を準備し、客観的に表現できるようにさせる。</p> <p>社会的な話題に関して多角的に捉えて意見を言うことができるように、ディベートのように賛成、反対の立場から話題を考えさせる。</p> <p>☆知識・技能（ワークシートの記述） ☆思考・判断・表現（ワークシートの記述） ☆主体的に学習に取り組む態度（ワークシートの記述）</p>



5. 本時の学習活動（4／6）

（1）目標

他者の意見等を踏まえた自分の考えや感想をまとめるために、世界の子供達への教育問題について書かれた英文を読み、読んだことを基に考えたことや感じたことを、英文を引用したり内容に言及したりしながら伝え合うことができる。

（2）展開

学習活動【学習形態】	・指導上の留意点 ☆学習改善につなげる評価基準（評価方法）、目標を達成した生徒の姿
<b>課題</b> Education is the most important thing to children. What do you think?	
<p>1. スライドで本時の学習課題についての知識を確認する。【全体】</p> <p>2. 資料を読み、自分の考えを伝え合う。【ペア】</p> <p>3. 課題に対して反対の立場と賛成の立場に分かれて意見を伝え合う。【ペア】</p>	<p>・教育が世界全体で大切なものであると考えられていると確認させるため、SDGsの「4 質の高い教育をみんなに」に関連する英文をスライドで提示する。</p> <p>・場面や状況を捉えて自分の意見を表現することができるように、学習課題の children を children who live in developing countries と具体的なものにして考えさせる。</p> <p>Education is the most important thing to children who live in developing countries. What do you think?]</p> <p>・生徒が、多角的な視点から自分の意見を表現することができるように、世界の子供達が教育を受けられない状況がわかる英文やグラフ（学校がなくて通えない、家族のために働かなければならない）を与える。</p> <p>・相手にわかりやすく自分の意見を伝えさせるために、根拠（具体例や引用）を用いて意見を交換させることを促す。</p> <p>・論点をかみ合わせる必要性に気づかせたり、根拠を述べる表現を確認させたりするために、活動の途中で、複数のペアにモデル対話させる。</p>
<p>☆思考・判断・表現（話し合いの様子を観察、プリントの記述）</p> <p>次のような内容の意見を述べたり、プリントに記述したりしている。</p> <p>自分の考えを相手にわかりやすく伝えるために、根拠や引用を用いたり、自分の意見を支持する理由を述べたりしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Education is the most important thing to children.</li> <li>There are many children who can't go to school in the world because they are poor.</li> <li>If they study at school, they can work to improve the situation in the future.</li> <li>・ I disagree with this topic, I think education is important for children, but to work is more important to some children.</li> <li>This story says, children have to work for family. If they don't work, they can't get food.</li> </ul>	
<p>4. 本時を振り返る。【個】</p>	<p>・「Education is the most important thing to children who live in the world.」について、自分の考えをまとめさせる。</p>

### (3) 授業の実際



#### (a) 学習活動1について

教育が大切であるということは、世界共通の目標でもあるということを確認するために、SDGsを用いて生徒に課題提示を行った。日本だけではなく、教育を世界全体で考えていくという点で、生徒にとって有効な課題提示ができたと思われる。


#### (b) 学習活動2について

教育についての意見を伝え合わせる前に、世界の子ども達が教育を受けられない状況がわかる英文や図(学校がなくて通えない、家族のために働かなければならない)を示したことで、「本当に教育は全ての子ども達にとって大切なのだろうか?」と、生徒が今まで当然のように思っていたことを改めて考え直す機会を与えることができた。また、もし、教育を受けないとどのようなことが起きるかということを経験的なシチュエーションで想起させたことは、生徒が意見を具体的に考える手助けとなったと考えられる。

#### 【生徒に配付した学習プリントより抜粋】

<p>2. Why can't many children go to school?</p> <ul style="list-style-type: none"><li>●Problems at Home<ul style="list-style-type: none"><li>no money</li><li>help family</li><li>take care of brothers or sisters</li></ul></li><li>●Problems about Schools<ul style="list-style-type: none"><li>School is so far.</li><li>a few teachers</li><li>not a good school environment</li></ul></li><li>●Problems about Society<ul style="list-style-type: none"><li>war</li><li>Parents think school is not important.</li><li>no schools</li></ul></li></ul>	 
---	---

「JICA 独立行政法人ホームページ」より一部抜粋

<p style="text-align: center;">If we don't have language lessons, what will happen?</p> <div style="text-align: center;"><p style="display: flex; justify-content: space-around;"><span>medicine</span><span>poison</span></p></div>
---

#### (c) 学習活動3について

相手にわかりやすく自分の意見を伝えさせるために、根拠(具体例や引用)を用いて意見を交換させることを促したところ、学習プリントの表現を上手に活用しながら意見を伝える生徒が多かった。また、複数のペアにモデル対話をさせた時に、「自分だったらどのように返答するか」と全体で考えさせたことで、相手を納得させるためには個人的な内容の理由に終始するのではなく、客観的な根拠を用いて意見を述べなければならないと気づき、自分の意見交換時に生かす生徒が多かった。

### 遊びこむ子どもを育む（3）

2017年の夏より、「遊びこむ子どもを育む」を主題とした研究を継続的に行ってきた。ここまでの成果を要約するとともに、今後の展望を示すこととする。

河邊(2017)が示した子どもの体験の意味を捉えるための4つの視点（①主体的態度、②遊び課題の生成、③他者との関わり、④対象との関わり）を援用して遊び事例を分析することで、遊びこむ姿とはどういうものか、遊びこむ姿を育むための保育者の援助は何かを考察してきた。これまでの研究から、以下のことが示唆された。

- ・遊びこむ時、主体的態度は深化する
- ・対象の固有性への気づきが興味関心(主体的態度)を深める
- ・対象の固有性への気づきから遊び課題が生成される
- ・対象の2つの性質（物理的性質と意味・見立て）のどちらと関わるかによって異なる遊び課題が生成される
- ・他者との関わりを契機として遊び課題が生成される
- ・主体的態度を土台として、他者との関わりがあることが遊びの継続性や新たな展開（遊び課題の生成）を支える

すなわち、主体的態度、他者との関わり、対象との関わりの相互作用が遊び課題の生成につながり、遊びこむ姿を成り立たせる。なお、他者との関わりは、直接的な他者とのやりとりに限定するものではなく、以下のような多様な“関わり方”のいずれもが、遊びこむ姿あるいはその成立のプロセスにおいて現れることが事例から示された。

- ・他者を退ける
- ・他者を見る：佇んでじっと見る、何度も近くを通り過ぎながら見る
- ・他者の行為と関わる・他者の状況と関わる・他者が生み出したモノを介して関わる
- ・複数の遊び（他者）の間を転々とする

「これ何だろう?」「〇〇を作りたい!」など、一人で特定の対象に主体的態度でもって関わり、遊び課題を生成している状態の子どもにとって、時として、関心をもって接近してくる他者の姿は目に入らず、他者からの関わりは煩わしいと感じられることがある。しかし、これまで分析してきた複数の事例から、そのような子どもがその時点での遊び課題を一段落させた時、そこから先の遊び課題の生成を刺激するのが（保育者も含めた）他者の存在であることが多々あることが示されている。また、他児が夢中になっている様子を周辺で見ている側の子ども達にとっても、その様子（遊び課題、遊びの状況、行為、作ったモノ）が自身の遊び課題生成の契機となる。一人一人が主体的に対象と関われる「遊びこめる」状況を保障しながら、他者との関わりによる遊び課題の生成の可能性も射程に入れた保育者の援助のあり方を明らかにする必要がある。

山形大学地域教育文化学部  
(部会長) 安藤 耕己

## 1. 本年度研究活動の概要

本部会は、本年度、部会長および部会員2名（地域教育文化学部：鈴木宏昭准教授、附属特別支援学校：武田豊己教諭）によって構成された。以下、本年度の活動報告を行う。

## 2. 研究テーマについて

### (1) 本年度研究テーマ

「学校外での学びを知る—子ども・若者の多様な学びの支援の現状—」

### (2) 本年度研究テーマのねらいと研究方法

本年度も学校外の子ども・若者の「学び」の現状を理解することをねらいとした。研究対象として、山形市内で不登校・ひきこもり支援（保護者支援・学習支援）を行うクローバーの会@山形に着目した。方法は同会の拠点施設への訪問によった。併せてその後、クローバーの会@山形代表の樋口愛子氏および部会長の安藤が出演した、NHK 山形放送局制作「学校に行かなくていいよって言えない」（2021年1月22日放送）の視聴もふまえ、部会員で討議を行った。

## 3. 活動について

本年度は以下のように団体への訪問および討議を実施した。

### (1) 団体への訪問

日 時：2021年1月19日（火）14時30分～17時

会 場：クローバーの会@山形拠点施設（山形市緑町4-8-17）

内 容

当日はクローバーの会@山形スタッフによる学習支援とフリースペース開放が実施されていた。その様子をうかがいつつ、同会代表の樋口愛子氏から同会設立の経緯から現在の活動の展開までの説明をいただいた。以降は、フリースペース利用者らとも意見交換を行った。

このクローバーの会@山形は2015年4月に不登校・ひきこもりの子どもをもつ親の会としてスタートした<sup>1</sup>NPO（任意団体）である。その後、以前、本部会でも訪問し報告を行った若者支援NPO「ぶらっとほーむ」が2018年度に解散した後、同団体が担っていた不登校・ひきこもりの子ども・若者の支援事業を継承し、フリースペースの運営や子ども・若者の学習支援を行っている。加えて子ども食堂も開設して現在に至る。

---

<sup>1</sup> クローバーの会@山形 HP (<https://clover-yamagata.jimdofree.com>) 2021年2月9日最終閲覧。

## (2) 部会員での討議

日 時：2021年2月1日（月）17時～18時

会 場：Zoom で実施

参加者：部会長、鈴木准教授、武田教諭

内 容

1/19（火）のクローバーの会@山形訪問、さらには1/22（金）19時30分から放送されたNHK山形放送局制作「学校に行かなくていいよって言えない」の内容をふまえて討議を行った。

同番組にはクローバーの会@山形の樋口代表と安藤部会長が出演した。番組冒頭では、2016年に「教育機会確保法（義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律）」が制定され、翌年から施行されることにより義務教育の学齢にある児童生徒についても、不登校に際しては登校のみを目標とせず多様な学習形態を保障することが認められていることが示された。しかし、これらのことは未だ人口に膾炙しておらず、追い込まれる保護者と不登校児童生徒の現状が示される。その後、県内外の不登校支援の現状と課題、県内外の特色ある支援の報告がなされた。番組最後にはクローバーの会@山形の取り組みが紹介される。同会是不登校児童生徒の「親の会」の活動をその基盤と位置付けて実践しており、山形市内だけではなく各地で親の会を組織していく。番組後半ではクローバーの会と町教委・学校とが一体となり、町ぐるみで「親の会」作りの支援を始めた大江町の取り組みが紹介された。また、番組最後で部会長は、学校と多様な支援施設・組織・団体等との連携を実体化するに当たり、伴走型の支援ができるコーディネーターの存在が重要であることを指摘した。

実際の討議では、不登校児童生徒の「自立」のゴールや就職等につなげるための学力保障が学校外の支援施設や機関等において果たせるのかなど、学校を経由せずとも「おとな」になれるのか、という点が主に論じられることとなった。

## ② 部会員のコメントより

聴講後、部会員からはレポートが提出された。以下、紹介する。

### 【武田部会員】

「もう少し、こうしてみてもはどうでしょうか。」不登校に悩む保護者に、学校は不用意なアドバイスを言ってしまう。この一言に、不登校の子どもを持つ保護者は、自分が責められていると感じ、つらい思いをすることもあった。

不登校の親の会「クローバーの会@やまがた」の見学には、学校関係者として、行ってみたいという気持ちと、その子を学校が救えなかったという申し訳ないような不思議な気持ちと半々で参加した。

実際に不登校になった子ども達、そしてその保護者達は、「アドバイス」に疲れているのかもしれない。「クローバーの会」は、「専門家に相談し疲れた人の行きつくところ。」利用されている保護者はそう言って笑った。「学校、センター、お医者さん、カウンセラー、スクールカウンセラー・・・、みんな行って見て、たどり着いたのが、ここなの。」それぞれの機関は、どれくらいの「アドバイス」を積み重ねたのだろう。そして、当事者たちはどのような気持ちで聞いたのだろう。

「クローバーの会」は保護者支援だけではなく、子ども達の支援にももちろん当たっている。これまで、その存在に救われた子どももたくさんいただろう。NHKやまがた制作の『「やまコレ」学校に行か

なくていいよって言えない」の中で、安藤耕己先生はこうおっしゃった。「一人一人の状況や特性に応じた多様な学びが広がってほしい。子ども達が好きなことをやるだけではなく、そのときに必要なことに寄り添って、支援してくれる伴奏型の支援が必要です。」もし、残念ながら学校が学びの場になれないのであれば、その代わりに、そのときに必要なことに寄り添ってくれる場に行けばいい。

教育機会確保法では、「学校以外の多様で適切な学習活動」を重要視している。学校関係者としては、なんとも申しわけないような気持ちになる。しかし、これからの時代、学校以外の場所が必要な子ども達、保護者にとって、普通教育の機会は学校以外にもあるということが常識になり、大切な居場所となってくるであろう。そして、適切な環境において、いつか心のエネルギーがたまってきたら、学校はいつでも待っているよ、と伝えたい。そう思った貴重な見学の機会だった。

「何のために勉強をしているのか、ということ意識して学校に通う子どもは少ないのではないか」、「義務教育という法律がある日本では、勉強をしたくて自分からしている、という子どもはどれくらいいるのだろうか」ということを、講義を聞きながら思った。また、自分も含めて教える側についても同じように、「教えること自体に心からやりがいを感じて教えることの大切さ」について、改めて考えさせられた。

#### 【鈴木部会員】

「クローバーの会@やまがた」の施設訪問及び代表樋口愛子さんたちにインタビューを通じて、不登校の児童・生徒及びその保護者に対する支援制度、具体的な取り組みの一端を知ることができた。そのことにより、これからの学校外における理科教育のあり方について改めて考えることができた。「クローバーの会@やまがた」の方々に深く感謝申し上げます。

現在、「クローバーの会@やまがた」では、不登校の児童・生徒及びその保護者に対して様々な支援を行っている。一般的に、理科教育は、学校内の施設・設備を前提に実施している。こうした施設・設備が整わない環境下での理科学習に関する機会をどのように保障していくのか、様々な観点から考えなければならない。それらは、観察や実験を実施するための教材の確保だけでなく、観察や実験の実施時における児童・生徒の安全の確保の手立てを考えておく必要性を実感した。

また、理科離れと呼ばれて久しいが、最近の中学生は理科学習を避けられるきらいがある。そのため、不登校児の児童・生徒の興味・関心に応じて学びがすすめられた場合、不登校児の児童・生徒に一定程度の理科学習の機会を提供し、理科を学ぶことの大切さや面白さを実感させることについて留意することもまた重要となる。

#### ③ まとめ

上掲のように、教育機会確保法が制定・施行されたことにより、現行の学習指導要領解説では不登校児童の対応の根幹は以下のように示される。

不登校児童については、個々の状況に応じた必要な支援を行うことが必要であり、登校という結果のみを目標にするのではなく、児童や保護者の意思を十分に尊重しつつ、児童が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要がある。

(文部科学省『【総則編】小学校学習指導要領(平成29年告示)解説』、p.118)



以上の引用部は小学校学習指導要領解説のものであるが、中学校学習指導要領解説においてもほぼ同じ内容が記載されている。同じく両解説において、不登校は「どの生徒にも起こり得ることとして捉える必要がある」ものとされ、問題行動としての偏見を持たないこと、不登校児童生徒への学校での特別な配慮はもとより、学校外の機関等との連携協力の必要性が謳われている。

しかし、ここでわれわれが確認せねばならないのは、単に学校外での多様な学びの場づくりを進めていけばいいのではなく、そこでの「学び」の質保障が図られなければならないことである。いずれ子どもたち・若者たちには多様なトラックを、それもそれぞれのペースで走りつつも、「おとな」の領域に軟着陸してもらわないと、社会は継続・維持されないのである。

とすれば、学校外の支援施設・機関・団体等に求められるスキルや専門性の再確認もせねばならない。それら個々に様々な特色や強み、そして弱点もあることは当然のことである。となれば、「多様な学び」に実効性を持たせる意味においても、学校と家庭、支援する施設・機関・団体等との連携調整を行うコーディネーター、あるいはそれに類する存在が求められる。

現在、地域学校協働活動の展開により、地域学校協働活動推進員という、法的根拠を持ち地域と学校との間に立って種々の地域団体や地域人材等を結びつけるコーディネーターの活躍が目立ってきている。これらに倣っての専門人材の配置を検討する必要があるだろう。

#### 4. 次年度に向けて

討議の最後では、映画「みんなの学校」(真鍋俊永監督作品、関西テレビ放送制作、2014年公開)が話題に上った。特別支援学級を作らずに全ての子どもたちを受け入れる、大阪市立大空小学校の実践記録映画である。

「多様な学び」は学校では実現できないのか。その問いを深めるに際して、重要な示唆を与えられることが想定される。次年度は本部会を基点とし、附属学校教員、地域教育文化学部・教職大学院教員および学生・院生らを対象とした同作の上映会・討論会の開催を企図している。



## 道徳教育共同研究部会報告

### 子どもの主体的な探究を促すための批判的探究的な教材分析方法

吉田 誠（山形大学地域教育文化学部）

#### 1. はじめに

昨年度の共同研究部会報告では「道徳科における指導と評価の一体化を目指した教材分析方法の研究」と題して、山形大学附属小学校第4学年で実施した「クラスたいこう全員リレー」を用いた授業実践とその記録を基に、そこからさらに発展させた授業構想を行うための教材分析を試みた。その際の課題として、想定される子どもの学びの姿を自我発達段階と関連づけることが挙げられた。そこで、今年度は教材分析の段階で生徒の自我発達段階を想定しながら探究課題と評価の観点を設定し、グループワークの様子やワークシートの記述から生徒の学びの姿を検討することにした。今回は、山形大学附属中学校第2学年で2020年11月に実施した「良心とのたたかい」を用いた授業について、授業での生徒の発言やワークシートの記述に基づいて、自我発達段階を想定した批判的探究的な教材分析方法によって主体的な探究がどの程度促されたか考察する。

#### 2. 「良心とのたたかい」の現実主義的視点からの教材分析と探究課題の設定

教科書教材自体に理想主義的なメッセージの強いものが多い中で探究型学習を行うための教材分析の方法として、教材のメッセージを捉えた上で、以下に示す現実主義的な視点や問いに基づいて教材分析を行い、生徒の実態や課題意識に基づいて探究課題とねらいを設定した。「良心とのたたかい」の編集者のメッセージとしては、「よりよく生きるために良心の声と自己中心的な思いの葛藤を乗り越える心の強さをもつことの大切さを感じて欲しい」といった内容が想定された。そして、生徒の大多数はこのメッセージを知的に理解できているが、現実には難しいと判断した。また、「良心とのたたかい」の原作であるレ・ミゼラブルの作者のメッセージは多様に受けとめられており、編集者のメッセージとは異なるメッセージが含まれていることが明らかであることも確認した。

##### 教材分析における現実主義的な視点の例：

- ・教材に描かれた時間的枠組みの前後の文脈を想像する
- ・教材には登場していないが存在するはずの関係者の思考や心情を想像する
- ・あえて編集者のメッセージとは真逆の考え方を正当化する
- ・子どもたちの実態や発達段階との関係から学習活動やねらいを検討する

##### 教材分析における現実主義的な問いの例：

- ①ジャン・バルジャンが自分の正体を明かさず市長のままでいることで、できることはなかったか？
  - ・明確な証拠なしに盗みを働いたとして牢屋に入れる社会を変えることができるかもしれない。
  - ・モントルイユ市の人々がより幸福に安心して暮らせる市にすることができるかもしれない。
- ②正体を明かした場合と明かさなかった場合それぞれについて、この後どのようなことが起こり得るか？
  - ・正体を明かした場合、自分の良心は満たされ冤罪を着せられた男を救えるが、市民に失望や混乱をもたらすかもしれない。
  - ・正体を明かさない場合、良心の呵責を感じ、冤罪を着せられた男が無期懲役の判決を受けるが、当面、市長としての職務を果たすことができる。
- ③ジャン・バルジャンは重罪犯人だが、悪い人間と言えるか？また、その理由は？

- ・盗みや脱獄は悪いことだが、そうせざるを得ない状況に追い込んだ社会にも問題があるので、悪い人間とは言えない。
- ・わずか8年で市長として市民から尊敬される存在になれたことから人々から信頼されるよい人間であると考えられる。ジャン・バルジャンを重罪犯人にした社会が正しく生きることとよく生きることを分裂させてしまったのではないか？

### 3. 各自我発達段階の特徴と評価の観点

コールバーグの道徳性発達段階論は対等な関係における正しさの判断の発達に限定されているのに対して、クックグロイターの自我発達段階論は人間関係や社会を捉える視点の発達を自己中心性の低減と包容力の向上の観点から捉えており、多様な道徳的問題の捉え方の発達を扱うことができる。そこで、クックグロイターの自我発達段階論の各段階について、以下の表1に示す他者や社会の捉え方の特徴を踏まえた上で、各段階の欲求や道徳性に関する特徴と発達課題およびその克服に必要な体験を以下のように捉えた。

表1 クックグロイターの自我発達段階における他者や社会の捉え方の特徴

自我発達段階	他者や社会の捉え方の特徴
△自己保護的段階（強力な焦点をもつ第一者的視点）	自分の欲求が通るかどうかを捉えることができる（自分の視点のみで捉える）
△/3 規則志向的段階（第二者的視点）	他者が自分をどのように見ているかに気づくことができる（自分の視点か相手の視点のどちらか一方で捉える）
I-3 順応的段階（拡張した第二者的視点）	内と外の二種類の他者を対立的に捉えることができる（自分と相手の両方の視点で捉える）
I-3/4 自意識的段階（第三者的視点）	自己と他者を独自の違いを持った異なる人物として捉えることができる（自分と複数の他者の視点で捉える）
I-4 良心的段階（拡張した第三者的視点）	自己と他者の関係について過去を振り返ったり、未来を展望したりすることができる（自分と複数の他者の視点を文脈的に捉える）
I-4/5 個人主義的段階（第四者的視点）	「客観的」な判断が不可能であることに気づき、自身がその中で成長した価値体系の外に立つ視点を持つことができる（自分の価値体系を対象化して捉える）
I-5 自律的段階（拡張した第四者的視点）	自己を複数の文化的視点あるいは生涯の時間間隔における複数の世代の視点から捉えることができる（自分の価値体系と他の価値体系の両方の視点で捉える）
I-5/6 構築自覚的段階（第五者的以上の視点）	自己や世界に関する事象について、複数の世界観から捉えてそれらを相互に関連づけた視点や文化の違いを超えた人類共通の枠組みや物語の観点から捉えることができる（複数の価値体系を相互に関連づけて捉える）
I-6 一体的段階（鑑賞者の視点）	これらすべての視点を統合的に捉えることができる（すべての価値体系を対象化して捉える）

#### 自我発達段階の各段階における欲求や道徳性に関する特徴と発達課題およびその克服に必要な体験：

##### ①順応的段階

特徴：周囲に受け入れられたい、認められたい欲求が強く、集団のルールに盲目的に従う。

発達課題：実現可能な理想と現実の葛藤、自分の欲求が強い時や周囲が自分に批判的な時に無理に自分を通したり閉じこもったりする→他者に譲る自分の姿が周囲から認められる体験・周囲から批判された時に弁護してもらう体験（健全な自集団への帰属意識の成長）

##### ②自意識的段階

特徴：自分の意見の正しさを主張したい、個性を認められたい欲求が強く、正当化と論争を好む。

発達課題：第三者的視点で自分自身を捉えるべきことがわかっているけどできない内面的葛藤、そういった自分への批判が自分の全人格に対する叱責に捉えられやすい→第三者的視点で自分自身を捉えて判断し行動できていることが認められる体験・他者の行為の意図や背景を捉えて判断し行動できていることが認められる体験（健全なアイデンティティの成長と集団内の居場所の確保）

##### ③良心的段階

特徴：社会的に認められた高い目標を掲げて合理的に時間をかけて達成したい欲求が強く、予測可能性を好む。

発達課題：自分の見通しの甘さや過ちに対する罪悪感や自己批判、他者の内面理解の誤りに対する自責の念にかられやすい→適切な見通しをもって行動できていることが認められる体験・他者の適切な内面理解に基づく判断や行動ができていることを認められる体験（自己評価基準の自覚）

#### ④個人主義的段階

特徴：社会的な評価よりも自分独自の目標を達成したい欲求が強く、意見の異なる他者を尊重し、理解しようとする。  
発達課題：自分の中の多様なアイデンティティ相互の分裂や相反に対する不安、多様な可能性の想定や多様な価値観の尊重による決断力・実行力の不足→自分独自の目標や価値意識が認められる体験・多様性への共感が認められる体験（普遍的な価値意識の自覚）

#### ⑤自律的段階

特徴：自分になりうる最高の存在になるための自己決定、自己実現の欲求、他者の成長を手助けしようとする欲求が強く、自分の中の相反する感情を受け入れて統合することができる。  
発達課題：自分の潜在的可能性を達成できないことや普遍的な信念を守ることができないこと、他者を成長させられないことへの不安→自他の成長のための停滞期や後退期、普遍的な信念実現のための停滞期や後退期を見守る体験（人類的な意識成長の自覚）

### 4. 探究課題とねらい、評価の観点の設定

上記の各自我発達段階における欲求や道徳性に関する特徴から検討した結果、山形大学附属中学校第2学年の生徒の多くは自意識的段階から良心的段階で、一部の生徒が個人主義的段階以上の段階に在るであろうことを事前に想定し、以下のように段階毎の探究課題の例を検討した。

#### 探究課題の例：

- ・よく生きることと正しく生きることのメリット・デメリットは何か？（自意識的段階）
- ・よく生きることと自己正当化することを区別するにはどのように考えればよいか？（良心的段階）
- ・正しく生きることとよく生きingことを分裂させるのは、どんな環境や状況か？正しく生きることとよく生きingことを分裂させずによりよく生きるために私たちにできることは何か？（個人主義的段階・自律的段階）

最終的に、探究課題とねらいを以下のように決定し、順応的段階から個人主義的段階についての評価の観点を設定した。

**探究課題：** 正しさと良さについて葛藤したり決断したりする場面で、どんなことを大切にしていきたいか

**ねらい：** 正しさと良さをめぐる葛藤に向き合いながら自分の生き方を明確にし、人間としてよりよく生きていこうとする心情を育む

#### 評価の観点

①順応的段階：よく生きることと正しく生きることの両立について自分の意見を自分の言葉で明確に示しているか、自分とは異なる視点や意見を受けとめようとしているか。

②自意識的段階：よく生きることと正しく生きることの両立について、自分とは異なる他者の意見の理由や根拠を聴き取っているか、その上で自分の意見を根拠とメリット・デメリットも含めて説明しているか。

③良心的段階：よく生きることと正しく生きることの両立について、自分とは異なる他者の意見についてその理由や根拠の背景にある経験と感情を含めて聴き取っているか、その上で自分の意見について自分の生き方や社会にもたらす影響を長期的視点も含めて考慮しながら説明しているか。

④個人主義的段階：よく生きることと正しく生きることの両立について、多様な意見の根拠と背景的感情を含めて理解した上でそれらの意見が生き方や社会にもたらす影響を長期的視点も含めて考察しているか、そこから広げたり深めたりした自分の意見について生き方や社会にもたらす影響を長期的視点も含めて多様な観点から説明しているか。

#### 4. 実践結果

授業の学習活動と発問を以下の表 2 に示す。

表 2 授業の学習活動と発問

学習活動【学習形態】	○発問 ●中心発問 △指示・説明	教師の手立て
1. 物語の概要を知り，教材を読む。【一斉】	△「レ・ミゼラブル」の概要を知り，教材文を読みましょう。	・授業開始前に補助教材を読ませておく。
2. 主人公がどのような葛藤をしたのか整理・確認する【一斉】	○マドレーヌが最終的に「告白する」と決断したのはなぜだろう？	・隣の人と話し合わせた後，数名を指名して発言させる。
3. 主人公の決断をどう思うか議論する【グループ】	●主人公の決断についてどう思いますか？自分は正しいと思うか正しくないと思うか，良かったと思うか良くなかったと思うか，とその理由について話し合ってください。  △教室前の大きなホワイトボードの対立軸の自分が最終的に思った場所にネームプレートを貼ってください。	・4人グループでホワイトボードに書いた「良かった」「良くなかった」，「正しい」「正しくない」の対立軸上の自分が判断した位置にネームプレートを置かせて，主人公の決断に対する自分の判断の理由を議論させる。 ・ネームプレートを見て話を聞いてみたい生徒数名を挙げさせ，判断の理由を発表させる。
4. 自分の中の「良心」と向き合い，授業を通して感じたことをまとめる【個】	○葛藤したり決断したりする場面で，どんなことを大切にしていきたいですか。ワークシートに書いてください。	・活動3と4から正しさと良さの両立をめぐる葛藤について多面的・多角的に考えることで自分の生き方を明確にすることができるか評価する。

グループでの話し合いでは、自分のネームプレートの位置とは異なる位置にネームプレートを置いている生徒とそれぞれの視点や考え方の違いについて議論したり、他のメンバーの意見を聴きながらホワイトボード上のネームプレートの位置を移動したりする姿が見られた。また、ワークシートの記述内容からは、7割以上の生徒が行動の結果について、より広い視野や視点から考えた上で判断する必要があることに触れていたことが明らかになっている。

このことから、生徒の自我発達段階を想定した上で、発達段階に応じた探究課題を設定する方法の有効性がある程度確認されたと考えられる。なお、生徒の授業中の発言やワークシートの記述を自我発達段階の観点から詳細に分析した結果については、『山形大学 教職・教育実践研究』第16号に掲載予定である。

## 令和2年度 生活科教育共同研究部会

### 1. 部会員（五十音順、敬称略）

附属小学校：後藤啓太、神保諒一                      附属幼稚園：片山敬子、山川哲也

大学：坂本明美（部会長）、佐藤慎也、高野浩男、野口徹

### 2. 研究テーマ：「生活科の授業研究」

### 3. 附属小学校「授業づくり研修会」における「生活科」の授業

#### （1）研修会と大学の授業とのつながり

令和2年11月2日（月）5校時に、山形大学附属小学校の「授業づくり研修会」における生活科の本時の授業が行われ、第2学年3組の担任、後藤啓太教諭が、単元名「はなうめおもちゃけんきゅうじょ～はなうめまつりを開こう～」の授業を公開された。今年度はコロナ禍のため、コメンテーターと共同研究協力者は附属小学校で授業を参観させていただいたが、他の参会者の方は、ビデオ撮影された本時の動画を、インターネットを介して視聴される形となった。

コメンテーターは櫻井順一校長（山形市立第二小学校）と岩月美智子教諭（天童市立成生小学校）、共同研究協力者は那須さおり教諭（山形大学附属幼稚園）と筆者（坂本明美、山形大学地域教育文化学部）であった。〔生活科教育共同研究部会の神保諒一教諭（山形大学附属小学校）は、この「授業づくり研修会」において「タイム」の授業を公開された。同じく部会員の高野浩男准教授（山形大学大学院教育実践研究科）は、神保教諭の「タイム」の授業の共同研究協力者として参加された。〕

本時の授業に先立って、10月21日（水）15時30分から、附属小学校にて「事前検討会」が開催された。上述したコメンテーターと共同研究協力者の先生方とともに、筆者も参加させていただいた。「事前検討会」に申し込みをされた参会者の方も、Zoomで参加された。

筆者は、本時の授業を附属小学校で参観させていただきたかったが、あいにく大学の授業と重なってしまったため、小学校にお伺いさせていただくことができなかった。そこで、別の日程で11月4日（水）、本時の次の時間に相当する授業を参観させていただき、ビデオ撮影もさせていただいた。

ビデオ撮影させていただいた内容を、翌週の11月10日（火）、筆者が山形大学地域教育文化学部で担当させていただいている「初等教科教育法（生活）」の授業において、受講生86名と、授業を聴講されていた長期研修生の方（現職の小学校教諭）とともに、教室のスクリーンで視聴させていただいた。受講生全員から感想を表現してもらいたいと思い、さらに、それぞれの感想を受講生同士でお互いに交流し合ってほしいと考えたため、本学の「Webクラス」を活用し、学生たちに「チャット」機能を使って感想を入力・投稿してもらった。学生たちは教室で各自のスマートフォン等を使い、感想を入力していた。入力された内容は、「Webクラス」を通してその場ですぐに読み合うことができ、交流し合うこと



ができた。「チャット」で交流し合った感想は、学生たちの許可を得た上で、それぞれの学生の氏名などは削除し、感想文だけをプリントアウトして、授業者の後藤教諭にお渡しして読んでいただいた。

一方、附属小学校では、当初、「授業後の話し合い」を小学校で行うことが予定されていたが、諸般の事情により、参加者がアンケートフォームに記入する形に変更になった。しかしながら、授業者の後藤教諭のご提案により、筆者はアンケートフォームに記入させていただき代わりに、12月2日（水）の夕方、後藤教諭がわざわざ山形大学においでいただくことになり、直接お会いして交流させていただいた。授業者ご本人と直接交流させていただける貴重な機会であるため、上述した長期研修生の小学校教諭の方とともに、三人で約2時間余り、お子さんたちの様子、生活科の授業づくり、日々の実践についてなど、交流させていただいた。

## （2）「工夫を生む」ための「働きかけ」

「授業づくり研修会」、本時の次の時間の授業参観、後藤教諭との懇談、後藤教諭とのメールによる交流などを通して筆者が学ばせていただいたことは多岐に渡り、ここに書き切れないため、印象深かったことの中から一つに絞り、記述させていただきたい。それは、後藤教諭の言葉を引用すると、「新たな工夫を生むための教師の働きかけ」についてである。この言葉も含めて、ここで引用させていただく資料の出典は、研修会終了後に後藤教諭が作成された、「参加者の皆様からのアンケートをもとにした校内での話し合い 生活科」というタイトルのA4サイズの一枚の資料<sup>1)</sup>である。同資料の「2 授業者から」という項目の中で、後藤教諭は次のように記述されている。以下、後藤教諭が執筆された文章からの引用である。

「本単元で難しさを感じたことは、新たな工夫を生むための教師の働きかけである。本時では、はなうめまつりを意識させることで新たな工夫が生まれると考えた。」

「はなうめまつりを意識させること」の重要性については、10月21日（水）の「事前検討会」においてZoomで交流を行なった際に、ある参加者の方も、「ポイントは1次から2次が変わるところだと思います」と発言されていたことと共通する。「1次から2次が変わるところ」とは、後藤教諭が作成された「第2学年3組 生活科学習活動プラン」の「4 予想される学びの展開（26時間扱い 本時13時間目）」によると、1次は「動くおもちゃを作って自分たちで楽しむ。（11時間）」であり、2次は「はなうめまつりに向けて、おもちゃを工夫する。（12時間 本時 2/12）」である。この「1次から2次が変わるところ」、即ち、「自分たちで楽しむ」段階から、他者に楽しんでもらうために「工夫する」段階へと移行する場面である。筆者も、この「はなうめまつり」が大きな転換点になると考えていた。というのも、以前、筆者が参観させていただいた他の先生の生活科の授業において、「相手意識を持った製作活動」において、子どもたちが工夫している場面がみられたからである<sup>2)</sup>。自分たちが製作したおもちゃを使って楽しんでもらう「お祭り」や「お店」のような場が設定されれば、そのイベントを指して、子どもたちは自ずと「相手意識」を持つようになり、自然な流れとして、他者のために「工夫」するようになるのではないかと筆者 [=坂本] は単純に捉えていた。特に、その相手が自分の知って

いる人など、具体的にイメージすることができる相手であれば、なおさら、その相手のために「工夫」するようになるだろう、と考えていた。そのため、今回は「なかよしペア」の1年生の相手のお子さんのことを思い浮かべながら、子どもたちはいろいろ工夫をするのではないかと想像していた。

ところが、後藤教諭によると、「一年生を意識している子が一部いたが、全体としては、新たな工夫は生まれなかった」という。一方、後藤教諭が「工夫を生むために、有効な働きかけだと感じたこと」は、「実際に友達から遊んでもらうこと」であった。今回の実践では、一部のお子さんを除き、「はなうめまつり」という特別なイベントがきっかけになるのではなく、「友達から遊んでもらう」という日常的なかかわりを通して、新しい工夫が生まれることが多かった、ということである。後藤教諭は、さらに次のように述べておられる。

「自分が楽しく遊ぶおもちゃが、友達も楽しめるおもちゃとして意識され、具体的なやりとりを通して新たな工夫が生まれることが多かった。」

上述した引用文の中の、「具体的なやりとりを通して」という箇所にも着目したい。自分が作ったおもちゃを他者に使ってもらい、コミュニケーションを図ることによって、相手から反応を得る。受け取った反応をもとに改善点などを考え、試行錯誤し、相手にさらに楽しんでもらえるように、より良い反応を得られるように「工夫」するのではないかと。

「自分が楽しむ」こと、「相手意識」、「工夫」、これらの関係について考えさせられる実践であった。

#### 4. 大学における生活科の授業

筆者は、本学の地域教育文化学部1年次を対象とした、「生活の基礎」（前期）と「初等教科教育法（生活）」（後期）を担当している。令和2年度は、前期と後期のそれぞれの授業において、神保諒一教諭と高橋茜教諭にそれぞれ一回ずつ授業をご担当いただいた。前期はお二人の先生と附属小学校でお会いし、打ち合わせをさせていただいた上で、令和2年7月7日（火）に神保教諭に、7月21日（火）に高橋教諭に、山形大学の坂本研究室においていただき、Zoomによるオンライン授業を行っていただいた。後期は12月22日（火）に神保教諭に教室で対面授業をご担当いただき、令和3年1月12日（火）に高橋教諭に坂本研究室からZoomによるオンライン授業を行なっていただいた。

両教諭とも、附属小学校における生活科の授業の様子はもちろんのこと、他教科の授業の様子や、小学校低学年の日常の学校生活や学級での様子についてもご紹介くださり、たくさんの写真を使って、学生たちにわかりやすくお話しいただいた。前期の神保教諭の授業では、実際に小学校で掲示して使われていた資料をたくさんお持ちいただいた。大学で複数の教室の机の上に掲示物の資料を並べておき、授業の途中で学生たちに教室を移動してもらい、複数の教室に分かれて机の周りを巡回してもらいながら資料を閲覧してもらう時間も設けられた。その掲示物を見ながら、学生たちは思い思いの感想をつぶやいたり、自分自身の小学校時代を思い出しながら、友達同士で楽しそうに話し合ったりしていた姿が印象的であった。



両教諭の豊かな実践についてのお話と、パワーポイント、写真、掲示物の資料のおかげで、実際の小学校における生活科の授業やお子さんたちの様子について、具体的に学ばせていただくことができました。この場をお借りして、両教諭に心より御礼を申し上げます。

## 注

- 1) この資料は、2020年12月8日に後藤教諭から筆者がメールで受信した。
- 2) 例えば、次のような実践である。山形大学『平成20年度 大学と附属学校園の共同研究報告書』（平成21年3月発行）に掲載されている「生活科教育共同研究会」の「Ⅲ. 活動報告」の「1. 附属小学校 ◆第1学年」より、五十嵐康氏の執筆による「附属幼稚園との交流を生かした生活科学習～子どもにとっての「必然性」を大切に～」pp. 53～54。

(文責 坂本明美)

山形大学大学院教育実践研究科教授 三浦光哉  
山形大学附属特別支援学校教諭 熊島未紗季 柴田雄一郎 船山美貴子 山科平恵

## 1 目的

知的障がい特別支援学校における主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業改善の中で、一人一人の資質・能力の育成を目指した教材・教具を考え実践する。

## 2 実践報告

### 実践1（実践者：柴田）

(1) 単元名 国語・算数「おおきい・ちいさい どうぶつなにかな」(算数のねらいを主とした教材)

(2) 対象学年 小学部3～4年（6名）

(3) 目 標

① ものの大きさに気付き、その違いを実感したり、大きさを表す用語について知ったりする。

[知識及び技能]

② 大きさの違いに注目し、大小を判断して言葉や身振りで表現したり、操作したりする。

[思考力、判断力、表現力等]

③ ものの大きさに関心を持ち、大きさに注目したり比べたりする楽しさを感じながら興味を持って活動しようとする。

[学びに向かう人間性、人間性等]

(4) 教材について

- ・家の大きさに合った動物を選ぶという活動を通して、大きさについて考える。
- ・動物の大きさの違いに気付き、大小の比較の学習につなげる。
- ・算数科の実態としては特別支援学校小学部1段階程度の子どもに使用できる教材。教材に興味を持ち、楽しく活動を繰り返しながら、実感を通して大小という概念に親しむ段階。

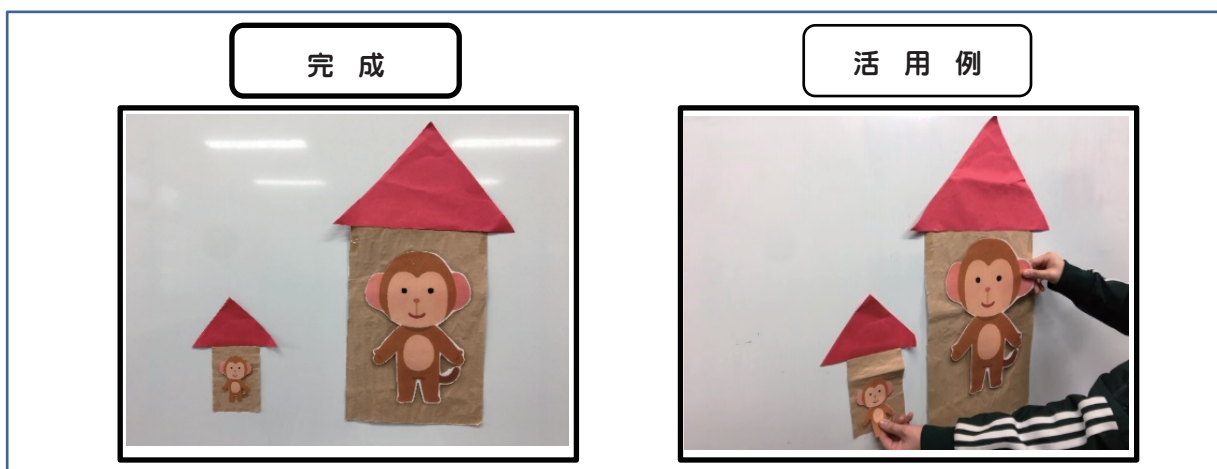


図1 教材

(5) 主体的・対話的で深い学びの視点

- ・教材は極端に差を付けることで、児童が大きさに着目しながら動物を選ぶことができるようにする。(主)
- ・教師の手本や友達の活動をしているところを見たり、友達や教師と一緒に操作した結果を確かめたりすることができる場の設定や活動の流れにすることで、友達の気付きや考えを手掛かりにして自分の考えとの相違に気づけるようにする。(対)
- ・児童の学習の様子に合わせて教材の提示する位置や順番を変えながら活動することで、大きさの違いに着目して考えたり、判断したりできるようにする。(深)

(6) 評価

- ・単元の前半では、教材を見て自分から「わあ、大きい。」「小さい。」と大きさを表す用語や身振りで表現する姿が見られた。
- ・動物を家の中に貼る活動を通して、動物と家の大きさを見比べながら貼る等、大きさに着目して判断しながら活動した。
- ・友達や教師が活動している姿を見ながら、「大きいさるだね。」「小さいさるだね。」等と、動物の名前だけでなく大きさに関心を向けたり、他の学習や日常生活の場面でも自分から「大きいね。」「小さいね。」等と大きさに着目して表現したりする姿が見られるようになった。

(7) 振り返り

前単元では、イラストのピースを家の型にはめるタイプの教材を使用し、ぴったり教材がはまる実感を通して児童が大小に着目することをねらった。今回は2つの異なるイラストを大きさで分類する教材を用いて学習したことで、より児童が大小に着目するようになったと考える。児童の学びの姿や実態を考慮すると、操作的な活動を通して課題ができた手応えを児童が実感できる教材を開発すると共に、前時までの経験や学びを生かしながら活動できる単元計画を今後も考えていくことが必要であると考えます。

**実践2 (実践者：船山)**

(1) 単元名 国語・算数 「たこやき できるもん」(国語・算数のねらいを主とした教材)

(2) 対象学年 小学部1～2年生(6名)

(3) 目 標

- ① 身近な言葉を知り、数の違いに気付く。 [知識及び技能]
- ② 操作的な活動をする中で、身近な言葉や数、形をイメージしたり、伝え合ったりしながら自分の考えをもって表現する。 [思考力、判断力、表現力等]
- ③ 言葉で伝わる良さや数の違いでやり取りする楽しさを感じ、身近な教師や友達に教えたり伝えたりしながら学習しようとする。

[学びに向かう力、人間性等]

(4) 教材について

- ・たこ焼きの焼きまねをするごっこ遊びを通して、様々な言葉を知ったり、身の回りの物の数に気付いたりしながら、3～5程度までの数を数える。
- ・身近な教師や友達に作った物を渡したいなどという思いから、言葉の種類や数の違いに気付き、

新たな表現方法を知る学習につなげる。

- ・国語科、算数科の実態としては特別支援学校小学部1段階程度の子どもに使用できる教材。操作的な活動を通して、教材に興味を持ち、楽しく活動を繰り返しながら、実態に応じて言葉を表現する楽しさや数の違いに親しむ段階。

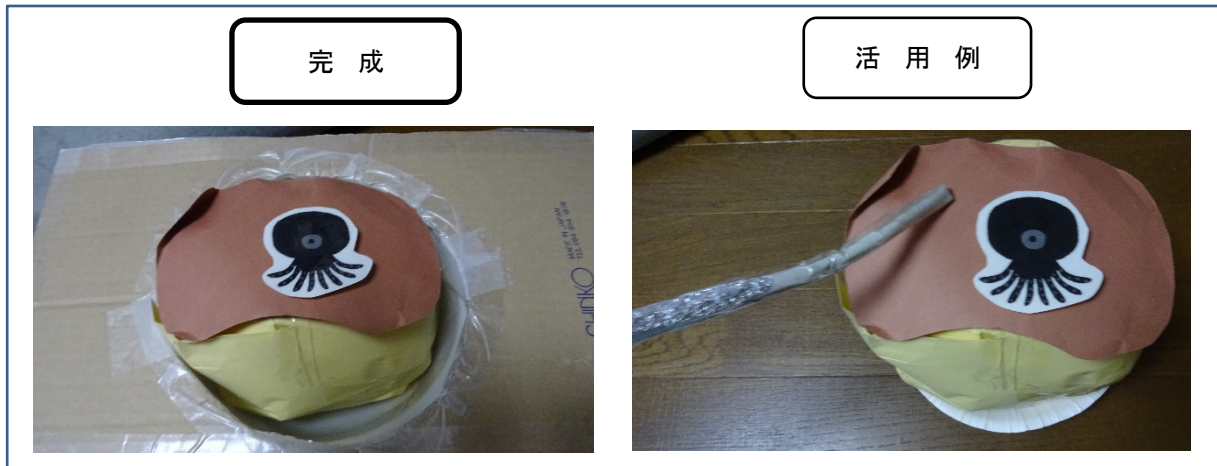


図2 教材

#### (5) 主体的・対話的で深い学びの視点

- ・ 毎回同じような流れで学習活動を設定し、見通しが持てるようにすることで、自分から言葉で伝えようとしたり、行動したりしながら、児童同士でやり取りしたりする。(主)
- ・ 操作する場所を友達から見える場所に配置することで、動きをお互い見合っ、言葉をまねしたり、数の違いに気付いたりしながら、自分のやり方に生かそうとする。(対)
- ・ 導入で、絵本の読み聞かせを入れたり、実生活からイメージしやすい内容を取り入れたことで、身に付けたことや自分の得意なことに気づき、次の活動に生かそうとしたり、生活の中でも使ってみようとしたりする。(深)

#### (6) 評価

- ・ 活動前に、「たこやきようちえん」の絵本の読み聞かせを聞いて、たこ焼きの焼き方を言葉で詳しく伝えたり、数を数えたりしながら、言葉や数の操作の幅を増やすことができた。
- ・ 「たこ焼き」の作り方で、知っていることを教師に伝えながら、「青のり、紅ショウガ、揚げ玉だね。」と必要な材料も伝え、それを知らなかった児童は言葉や数の操作をまねながら、自分の思いを伝えることができた。また、たこ焼きを作るまねをしながら、誰に何個作るか考えたり、何個食べられそうか調べたりしながら、数の学習を進めることができた。
- ・ 操作的な学習を取り入れ、できた喜びを感じて、自分から教師や友達に作った物を「〇個です。」と、渡しながら繰り返し学ぼうとする様子が見られた。言葉を学んで言ったことで表現方法が増えたり、数について幅が深まったりしたことで、他の生活場面でも知ったことを使おうとする児童の姿が見られた。

#### (7) 振り返り

- ・ 児童の夏休みの思い出絵日記から、「夏祭り」での出来事を振り返り、児童が経験したことのある題材を活用したことで、それぞれがたこやき屋さんになりきり、「〇個焼きます。」「青のりはありますか？」など、様々な言葉や数に触れることができた。3までの概念しかなかった児童が、たくさん欲しいときにどのように伝えようと良いか考え、数と数字カードを一致させて伝えようと伝わることなどに気付き、やり取りの面白さを感じて楽しむ姿が見られたのが印象的だった。

### 3 まとめ

今年度の2事例「国語・算数」の実践では、児童の興味関心に基づいた題材を取り入れながら、活動していく中で、教材・教具の改善を行った。操作的な活動を通して、大小の比較をしていく中で、児童の発言から動物の種類を追加したり、名前を動物の下に貼り合わせたりしながら、学びを広げていった。教師の用意したたこやき器では、数が足りないと児童から要望が出て、空の卵パックを使って10のまとまりを考える児童もいた。学ぶ集団の中でも、児童の実態は様々で、導入やきっかけは同じでも、児童の目標に応じて様々な方向に発展できるように、教師はその題材や教材教具で、想像できる様々な可能性を持ち合わせる事が大事だと話し合うことができた。今後もそれぞれの授業実践から、教員間でのアドバイスを大事にして、日々の実践に生かしていきたい。

(文責 柴田雄一郎・船山美貴子)

## 特別支援教育共同研究部会〔大村グループ〕

メンバー

<大学教員> 大村一史

<附属特別支援学校教員>

鈴木希菜 山口孝夫 八鍬洋祐 加藤ちひろ 山科友理恵 岩井大知

### 1 研究テーマ

知的障害児に対する実行機能の制御を介した指導

### 2 研究の方法

行動観察記録による行動分析

授業・学校生活場面を中心に、対象児童生徒の行動を観察・記録し、その認知行動的特性を分析する。対象児童生徒の認知行動特性を実行機能の視点から捉え、今後の教育・指導方法について、観察・記録したデータを見ながらブレイン・ストーミング等を行い探索的に検討していく。

### 3 研究対象者

附属特別支援学校に在籍する知的障害児

### 4 研究経過

(1) 第1回：令和2年6月

研究の進め方の確認

(2) 第2回：令和2年11月

各グループにおける研究目的、対象児童生徒、方法の検討

(3) 第3回：令和3年1月

各グループにおける研究の結果と考察の検討

### 5 研究について

実行機能は、特別支援教育分野で近年注目されている新しい概念であり、知的障害児・者の適応行動の困難さの背景には、実行機能の不全があることが指摘されている。最近では、知的障害児・者の認知行動特性を実行機能の問題から捉えた様々な研究が行われている。

実行機能とは、ある目標志向的な一連の行為を効率良く遂行するために必要な諸機能を表し、実行機能に含まれる諸機能は、目標の明確化、プランニング、認知的柔軟性、構えの転換、言語流暢性、行為のモニタリング、反応抑制、干渉抑制などである。近年の研究では、認知的制御に関連する認知的実行機能(Cool Executive Function: Cool EF)と、情動的制御に関連する情動的执行機能(Hot Executive Function: Hot EF)の2つの側面から研究が進められるようになってきた。

実行機能を適切に評価することで、知的障害児・者の認知的特性の把握につながり、より効果的な

指導・支援が展開できる。実行機能に基づいた指導・支援の実践を行うことは、知的障害児・者の適応的な行動を支え、目的に沿った行動を遂行するために有効であると考えられる。

本グループでは、先行研究を参考に、担当者が対象児童生徒に対して、問題となっている行動を実行機能の視点から捉え、その実行機能を介した指導・支援の実践を試みた。

## 6 研究の成果と課題

### (1) 成果

- ・3グループに分かれ、それぞれ1名の児童生徒を対象に様々な教科・領域等から実行機能に基づいた指導・支援の実践を行ったことで、対象児童生徒にとって有効な指導・支援を分析的に検討することができた。
- ・中学部は、昨年度からの継続指導・支援を行ったことで、昨年度の実践から考察できた生徒の特性や指導・支援の有効性について、本人の変容から確認することができた。

### (2) 課題

- ・グループとして4年目の研究であり、次年度以降も、実行機能研究とその教育応用についての理解を深め、実践を重ねていくことで、さらに有効な指導・支援の在り方を探っていけると考える。
- ・本研究の成果をより広く生かしていくために、児童生徒一人一人によって特性は異なり、有効な指導・支援も個によって違うものの、これまでの実践を通しての成果を支援集のような形でまとめることができないか検討していく。

## 7 参考文献

- 池田吉史・奥住秀之（2011）「知的障害児・者における実行機能の問題に関する近年の研究動向」、『東京学芸大学紀要，総合教育科学系Ⅱ』，第62集，47－55.
- 葉石光一・大庭重治・八島猛（2014）「知的障害と実行制御」、『上越教育大学特別支援教育実践センター紀要』，第20巻，5-8.
- 松田真也（2017）「知的障害児に対する認知的・情動的実行機能の適切な制御を介した指導」、『山形大学大学院教育実践研究科年報』第8号

（文責：大村一史）



## 知的障害のある児童に対する実行機能の適切な制御を介した教育指導

山形大学附属特別支援学校 小学部 山口孝夫・鈴木希菜

### 1. 目的

実行機能（抑制機能、活動の切替、情報の更新）の適切な制御を介した指導を行い、対象児童の学習上・生活上の課題を解決する手立てを探る。

### 2. 方法

#### (1) 対象児童 小学部3年生男児（ダウン症候群）

身辺処理は自立していて、身の回りのことはほぼ一人ですることができる。しかし、トイレでの排泄後、身だしなみが崩れ、下着やTシャツがズボンにしまえていなかったり、コップを使った後に元あったロッカーの所定の位置に戻さずに置いてあったりなど、やり方は分かっているが、教師の言葉掛けや確認が必要な場面もある。

#### (2) 対象授業：日常生活の指導

#### (3) 実施期間

A：ロッカーの整理 2020年12月 1日（火）～ 2020年12月25日（金）  
(全17日)

B：トイレ後の身だしなみ 2020年12月10日（木）～ 2020年12月25日（金）  
(全12日)

#### (4) 指導方法

A：情報の更新の機能に着目し、ロッカー内の物を使い、片付ける際に自分で整理できるように、ロッカーの内側の側面に、整理されているイラストと花丸がかかれたカードを常時掲示しておく。(図1) また、対象児がロッカーを整理できなかった場合には、ロッカーの状態やイラストカードに目が向くような言葉掛けを行い、イラストを見ながら一緒に確認、整理するようにする。

B：情報の更新や抑制の機能に着目し、自分で下着やTシャツの裾をしまえるように、毎日朝の会で確認場面を設けたり、対象児がトイレに行く前に「トイレに行ったら？」と気を付けることを問い掛けて確認したりする。また、トイレから戻ってきたときに、下着やTシャツがしまえていなかった場合は、身だしなみに目が向くような言葉掛けを行い、一緒に確認したりしまったりするようにする。



図1 ロッカーに掲示したイラストカード

### 3. 結果

#### A：ロッカーの整理場面

初めはロッカーに貼ったイラストをよく見てはいるが、コップやエプロンの入った袋を所定のフックにはかけず、ロッカーに投げ入れることが多くみられた。また、ロッカーの状態やイラストカードに目が向くような言葉掛けを受けると「ロッカーが汚いです。」と答えたり、急いで整理し「きれいになりました。」と伝えたりする様子が見られた。

12月21日（月）より、ロッカーに貼った掲示物に加えて、フックを動かさないように固定し、それぞれにコップ、エプロンのイラストカードを貼り付けたことで、自分からコップやエプロンの入った袋を片付ける様子が見られた。（図2）（追加の指導1）

対象児がロッカー内の物を取り出して片付ける機会がある午前1回、午後1回の場面でロッカーのフックにコップが入った袋、エプロンが入った袋をかけたかどうかを記録し、結果を表1に示す。



図2 ロッカー内のフックに貼り付けたイラストカード

表1 ロッカーの整理に関する記録表

日にち		12/1 (火)	12/2 (水)	12/7 (月)	12/8 (火)	12/9 (水)	12/10 (木)	12/11 (金)	12/14 (月)
○:できた	午前	×	×	×	×	×	○	○	○
×	午後	×	×	×	×	—	×	×	×
—:記録なし									

日にち		12/15 (火)	12/16 (水)	12/17 (木)	12/18 (金)	12/21 (月)	12/22 (火)	12/23 (水)	12/24 (木)	12/25 (金)
○:できた	午前	×	○	×	○	—	○	○	○	○
×	午後	×	×	×	×	○	×	○	○	—
—:記録なし										

※太枠内の期間は追加の指導1を行った。

#### B: トイレ後の身だしなみ

毎日の朝の会で場面を設けたり、トイレに行く前に「トイレに行ったら？」と教師が問い掛け「シャツをしまします。」と答える、といったやり取りをしたりすることで、下着やTシャツをしまうことを確認したが、あまり効果が見られなかった。

12月21日(月)より、トイレに行く前のやり取りに加えて、そのやり取りした際の言葉である「トイレにいったらシャツしまう」という文字に、身だしなみが整っている対象児の写真を添えたカードを用い、トイレに行くときに教室から持っていくようにした。(図3)(追加の指導2)カードを用いることで、身だしなみを整えて教室に戻ってくる様子が多くみられるようになった。

対象児がトイレに行く午前1回、午後1回の場面で、トイレ後に下着、Tシャツともにズボンにしまえているかどうかを記録し、結果を表2に示す。



図3 トイレに持ち運べるようにしたカード

表2 トイレ後の身だしなみに関する記録表

日にち		12/10 (木)	12/11 (金)	12/14 (月)	12/15 (火)	12/16 (水)	12/17 (木)	12/18 (金)
○:できた	午前	×	×	×	○	×	×	×
×	午後	○	○	○	×	×	○	×
-:記録なし								

日にち		12/21 (月)	12/22 (火)	12/23 (水)	12/24 (木)	12/25 (金)
○:できた	午前	-	○	○	○	○
×	午後	○	×	○	×	-
-:記録なし						

※太枠内の期間は追加の指導2を行った。

#### 4. 考察

##### (1) 各実践について

##### A:ロッカーの整理

ロッカーの整理場面においては、視覚的な手掛かりを用いて片付けるべき物の位置を明確にすることで、自分から元の位置へ片付けようとするが増えた。情報が整理され、自分のすべきことがより分かりやすくなったのではないかと考える。また、教師とやり取りすることでロッカーが整理されていないことに気付いたり、整理できたことを報告したりする姿があったことから、教師とのやり取りが活動の切り替えになったり、対象児の活動の意欲や安心感につながっていると考える。

午前に比べ、午後は整理ができていないことが多くあったが、ロッカーの整理の後は昼休みのため、「早く遊びに行きたい。」という思いから、ロッカーの整理に気が回らなかったのではないかと考えた。そのため、遊び行く前に確認事項を設けるなど、抑制機能に着目した指導を行っていくことで、より自分で整理できる姿が増えると考え。

##### B:トイレ後の身だしなみ

トイレ後の身だしなみを整える場面では、トイレへ持ち運べるカードを用いたことで、自分から身だしなみを整えるが増えた。対象児は言葉で確認したことを忘れずに記憶しておくことが難しく、持ち運ぶという行動と視覚的なカードを用いることで「トイレに行ったらシャツをしまう。」といった教師とやり取りした記憶が排泄後まで保持されたと考える。また、身だしなみが整えられることが続いたときに自分から上着をめくり、T シャツがしまわれているのを教師に見せてくるようになったことから、教師に気に掛けてもらえていることや、成功体験を積み重ねたことが、対象児にとって自信にもつながったのではないかと考える。

## (2) まとめ

上記のことから、対象児にとって有効な情報の提示の仕方を工夫したことが有効だったと考える。また、教師とのやり取りを好む対象児にとって、身の周りのことを一人でできるようにする中で、教師から称賛されたり、注目されたりすることも有効な手立ての一つであり、今後、教師への報告場面を取り入れることでより、身辺処理の定着につながると考える。

## 知的障害のある男子生徒に対する実行機能の適切な制御を介した教育指導

山形大学附属特別支援学校 中学部 山科友理恵 高等部 岩井大知

### 1. 目的

実行機能（抑制機能、活動の切替、情報の更新）の適切な制御を介した指導を行い、対象生徒の学習上・生活上の課題を解決する手立てを探る。

### 2. 方法

#### (1) 対象生徒 中学部1年生男子生徒（知的障害）

誰かと関わったり話したりすることが好きで、教員に対しては自分から話しかけることができる。しかし、友達と関わる手段としてその場における不適切な行動（聞こえないふりをする、起立しない、わざと失敗するなど）を取ることがある。その行動がこだわり行動として、特定のパターンとして見られることが多い。まわりの友達との関係性を大切にしながら、抑制機能に焦点を当てて指導支援を継続することで、生徒の課題を解決する。

#### (2) 対象授業

A：総合的な学習の時間では、意見を発表したり、はじめての活動に取り組んだりする場面になると不安感を隠すために教師や友達の言葉を遮ったり、指示が聞こえていないふりをしたりすることがある。そのため、抑制機能に焦点を当てた指導を行う。

B：生活単元学習では、7月からわざと起立せず他生徒から注意されることを待つこだわり行動が見られるようになった。また、分からなかったり不安を感じたりすると指示が聞こえていないふりをすることもある。男子生徒のこだわり行動が授業の妨げになったり、男子生徒自身の学習に支障をきたしたりすることがあるため、抑制機能に焦点を当てた指導を行う。

C：保健体育(ランタイム)では、「ペットボトル体操」の腹筋の場面になると、本来腹筋はできるのだが「できない。」と取り組まずに教師や友達の反応を待つ様子が見られる。そのため、活動の切り替えに焦点を当てた指導を行う。

#### (3) 実施期間

A：総合的な学習の時間 2020年11月24日（火）～12月2日（水）、12月7日（月）～9日（水）（10回）「はたらく人を見に行こう」

B：生活単元学習 2020年12月10日（木）～25日（金）（12回）「冬の行事を楽しもう」

C：保健体育(ランタイム)（体育）2020年12月16日（水）～12月24日（木）（7回）

#### (4) 指導方法

ABC共通：こだわり行動をせず、落ち着いて活動できるようにするため、こだわり行動が見られた際には必要以上に言及したり指導したりせず適切な行動が見られるまで待ち、できた際は即座に称賛（承認の言葉がけや合図等も含む）する。

A：こだわり行動として、起立しない、発表場面で指示が聞こえないふりをする、不安を感じたと

きに関係のないことを言ったり大きな声を出したりして教師のことばを遮ることが考えられる。落ち着いて活動したり集中して取り組めたりできるようスモールステップを用意する。また、手順表やワークシートの活用、発問の工夫なども行う。適宜机間巡視を行い、必要に応じて生徒の気持ちを適宜聞き取り、応じた言葉がけをする。

B：こだわり行動として、起立しない、発表場面で指示が聞こえないふりをするのが考えられる。自分の考えや作品を発表する場面が多くなるため、不安感を軽減し、安心感をもって取り組めるよう、スケジュールを毎時提示したり適宜声がけしたりする。

C：こだわり行動として、腹筋をしない、腹筋場面で全体から目を背けることが考えられる。不安な気持ちがあっても、気持ちを切り替えて「やってみよう」と思えるよう、適宜励ましの声がけをするとともに、終わりの明確化をはかるため腹筋の目標値を提示する。また、生徒同士で相談して決めるダンス曲が影響しているかどうか調べる。

### 3. 結果

#### A：総合的な学習の時間

学習内容に興味関心があり、毎時間積極的に取り組むとともに家庭でも自分から話題にすることがあった。担外や学生ボランティアも一緒に指導にあたることもあり緊張した様子もあったが、落ち着いて取り組み続けられた。

発表場面では、事前に発表内容をワークシートに書くことで安心感をもち、すぐに発表場所へ移動できた。また、発表の手本を提示したり、発表順番を後半にしたりしたことで、自分なりのことばで最後まで発表できた。仕事体験では「できない」と不安を口にすることもなく、教師の指示を聞き漏らさないよう顔を見ながら説明を聞く姿も見られた。また、楽しい気持ちから気持ちが落ち着かなくなった友達に反応することなく、最後まで私語もなく取り組めた。(表1)

#### B：生活単元学習

12月14日(月)～18日(金)に「冬の行事を楽しもう」として、クリスマス会を行った。1教時目にははじめのあいさつの起立の場面で立たず、友達からの注意を待つ様子が見られた。クリスマス会で特技発表をすることになり、17日(木)に特技である短距離走のVTRを撮ることになった際は、スタートと言っても走らず、友達に「走って」と言われても聞こえていないふりをした。いざ走るとジョギングのように走り、女子生徒Lと男子生徒Mの反応を確かめていた。また、クリスマス会当日は女子生徒Lとともに大声を出したり離席したりすることがあったが、「クリスマス会で楽しい気持ちになったんだね。」と声がけを受けると、気持ちを落ち着けようと自分から深呼吸をする様子も見られた。

23日(水)の「お正月の遊びをしよう」では、羽子板を体験した。「あげはね」で誰が多くできるか競う際、机に伏して教員の声が聞こえていないようなふりをした。「先生、羽子板はじめてだな。緊張するな。」と声をかけると、「ぼくも、緊張する。」と気持ちを表出。その後、こだわり行動は見られなくなり、あげはねにも取り組めた。また、二学期がんばったことを発表する場面では、自分の番であると分かっているが「え？」と知らないふりをした。この場面でも教員が「緊張するかな？」と生徒の心情をくみ取るような声がけをすると、「うん。」と答えた後に、すぐに発表に臨めた。



25日（金）は授業参観のため保護者が廊下で参観していた。保護者と関わる場面で机に伏せ、教員の声が聞こえないふりをした。教師が「照れちゃうかな。」と聞くと、「うん。」と答え、その後は落ち着きを見せた。（表2）（表3）

C：保健体育(ランタイム)

15日（火）～18日（金）は男性教員が腹筋の補助役、21日（月）からは女性教員が腹筋の補助役をした。女性教員が「腹筋が上手なところ見たいな。」と声かけをすると最高記録5回を達成。以降、最高記録を更新し続ける。友達から「すごいね。」と言われ、嬉しそうにする様子もあった。また、男性教員に「今日ね、〇回腹筋できたんだよ。」と報告する姿も見られるようになった。

ダンスでは、他生徒の選曲の場合知らない曲が多く、「分かんないもん。」と繰り返しながらうなだれて教室内を周回することがあった。しかし、0.75倍速度で流すことで踊ってみようと考え、自分から腕を動かして踊ろうとすることができた。（表4）

表1 A：総合的な学習の時間における生徒のこだわり行動回数

日付	11/24 (火)	11/25 (水)	11/26 (木)	11/27 (金)	11/30 (月)	12/1 (火)	12/2 (水)	12/7 (月)	12/8 (火)	12/9 (水)
回数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表2 B：生活単元学習における生徒のこだわり行動回数

日付	12/14 (月)	12/15 (火)	12/16 (水)	12/17 (木)	12/18 (金)	12/21 (月)	12/22 (火)	12/23 (水)	12/24 (木)	12/25 (金)
回数	0	0	1	3	2	0	1	2	0	1

表3 B：生活単元学習におけるこだわり行動の種類と回数

こだわり行動	回数
起立しない	1
指示が聞こえないふり	4
大声を出す	2
指示と違う行動を取る	3

表4 C：保健体育（ランタイム）における生徒のこだわり行動回数

日付	12/15 (火)	12/16 (水)	12/17 (木)	12/18 (金)	12/21 (月)	12/22 (火)	12/23 (水)	12/24 (木)
回数	1	1	1	1	0	0	0	0
選曲	他生徒	他生徒	他生徒	他生徒	他生徒	男子生徒	教員	教員

#### 4. 考察

##### (1) 各実践について

###### A：総合的な学習の時間

学習内容への興味関心が強く、不安感よりも期待感が大きい様子だった。また、毎時の活動内容の見通しをもてたこと、まわりの友達が落ち着いており、静かな環境のなかで活動できたことが男子生徒の抑制行動につながったと考える。発表場面では、言うべきことがわかっていることの安心感や、まわりの生徒も落ち着いて発表する様子を見たことから、自分も同じように行動すべきだと感じたことが影響していると考え。そして、定期的な机間巡視で、男子生徒の気持ちを教師が受けとったことで、自分の思いを受け取ってもらえる安心感をもてたことが、こだわり行動の抑制に繋がったとも考える。

いつも一緒に学習しない担外や学生ボランティアも指導に当たった場面もあり、どのような反応が返ってくるか分からないこともあってこだわり行動が現れなかった要因の1つとも考えられる。

###### B：生活単元学習

こだわり行動が1番多く見られた。これは、活動的に賑やかになりやすく、まわりの楽しい雰囲気誘発されたからと考える。短距離走を披露する場面では、まわりの雰囲気から、こだわり行動を取ることで友達が笑ってくれるように感じ取ったことが影響しているのではないだろうか。

落ち着きがなくなったり、こだわり行動が出た時には、教師が生徒の気持ちを代弁したり、気持ちを表出させたりする時間を設けたりすることで、自分の気持ちをフィードバックして落ち着くことができることも分かった。

###### C：保健体育(ランタイム)

自分が知っているダンスや曲だと、こだわり行動が見られない。踊れるかどうか不安な気持ちが、こだわり行動として表れると考える。ダンスに関しては、速度を調整することで踊ってみようと気持ちを切り替えることができる。また、腹筋の回数を明確に提示したことで、こだわり行動が抑制された。以降、毎時間腹筋を最低10回は続けるようになった。

##### (2) まとめ

まわりの友達が落ち着いていたり、静かな環境での活動だったりするとこだわり行動が抑制されると分かった。まわりが賑やかだったり、楽しい雰囲気だったりすると、遊びの場面のような気持ちになり、友達からの反応を得ようとしてこだわり行動を表出すると考える。全体の雰囲気が落ち着くことでも、男子生徒のこだわり行動も抑制されると考えられる。

また、気持ちを教員が代弁したり、気持ちを表出できたりした場面では、適切な行動をとることが増えた。前期に、友達に自分の意見を言えず我慢をしたり、嫌なことがあると本人に言わず「先生、〇〇さんが□□しました。怒ってください。」と訴えたりすることがあった。気持ちの表出が苦手なところがあり、それがこだわり行動にもつながっていると考える。気持ちを聞き取ったり、適切な気持ちの表現方法を知ったり、語彙を増えたりすることでこだわり行動が落ち着くと考える。実際、自分の気持ちを表出したことで行動が少しずつ落ち着き、友達との関係性も良くなってきている。

そして、発表など全体から注目されるような場面でこだわり行動が目立つことがあった。しかし、総合的な学習の時間でこだわり行動は見られず、生活単元学習では見られた。言うことややることの

手がかりが手元にあること、手本の提示が事前にあったかどうか、そしてまわりの雰囲気が影響していると考えます。今後、安心して活動に取り組めるように、手本や手がかりを用意します。

保健体育（ランタイム）における腹筋補助が男性教員であることで、こだわり行動が引き起こされるとも分かった。男性教員は生活単元学習でのMTでもあり、男性教員に対して、こだわり行動を起こすことが多いと感じる。日常生活のなかでもよく男性教員に対して話しかけることがあり、信頼関係の証として、どの程度の行動まで許容してくれるか調べるためのこだわり行動でもあるのではと考えます。

こだわり行動が起きる条件が分かったので、今後は特定のものや場面、人に対してのこだわり行動を軽減し、どのような状況でも落ちついて活動できる指導方法が検討課題である。

## 1. 目的

実行機能（抑制機能、活動の切替、情報の更新）の適切な制御を介した指導を行い、対象生徒の学習上・生活上の課題を解決する手立てを探る。

## 2. 方法

### (1) 対象生徒 中学部2年生女子生徒（ウイリアムズ症候群）

人懐こく、友達との関わりを好む一方、気になる事柄（人や心配事）へ意識が向いて自分のすべきことに取り組みなくなることがある。また、短期記憶に脆弱性がある。昨年度はKさんのことが気になって必要以上にかかわり、自分の活動が途切れてしまうことがあった。そこで、主に抑制機能に焦点を当てた指導を行い、やるべきことが明確な状況下では自分のすべきことに集中できることや活動そのものへの興味関心の度合いが高いと注意が逸れにくいことが分かり、自己での抑制力が向上しつつあることを確認した。その成果をもとに授業実践を積み重ねているところで新型コロナウイルス感染症による臨時休業に入ってしまったため、生徒の変容を十分に捉えることができなかった。そこで、今年度も昨年度と同様の教科を取り上げ、抑制機能を中心とした指導支援を継続することで生徒の学習上の課題を解決する。また、今年度は朝の支度および帰りの支度（荷物の管理、着替え、自己目標記入）時に様々なことに注意が向いて次の活動に間に合わないことが顕著であるため、新たに日常生活の指導場面でも抑制機能に焦点を当てた指導を行うことで、生活上の課題解決につなげていく。

### (2) 対象授業

昨年度の対象授業のうち国語／数学については、指導支援の方針は引き継ぐが担当教員配置の都合上、今年度は対象授業とはしない。

AおよびB：昨年度の取り組みの成果と課題をもとに、Kさんへの過度なかわりについて抑制機能に焦点を当てた指導を継続する。その中で、新たに新入生のHさんに注意が向くようになり、全体指示を聞き逃したり自分の活動が滞ったりすることがある。また、Hさんに対する過度なかわりが見られる。

※Kさんは男性で対象生徒と同じくらいの身長。Hさん女性で対象生徒より大きい。

Kさん、Hさんともに発話はなく、教師が個別に支援することが多い。Hさんは衝動的な行動が多く、授業中に立ち歩いたり走り出したりすることも多い。

C：荷物整理ではクラスメイトの様子に意識が向いて中途半端になったり時間がかかったり、着替えでは友達の様子が気になって身だしなみやロッカーの中が雑になったり時間が掛かったりするため、抑制機能及び情報の更新に焦点を当てた指導を行う。

### (3) 実施期間

- A : 音楽 2020年12月8日(火)～12月22日(火)(5回) 「楽器に親しもう」  
B : 体育 2020年12月7日(月)～12月21日(月)(5回) 「バドミントンをしよう」  
C : 日常生活の指導 2020年12月7日(月)～年12月18日(金)(10回)  
朝「荷物整理」、帰「着替え」

### (4) 指導方法

ABC共通：昨年度の取り組みから、称賛が実行機能（主に抑制機能）の向上につながる事が分かったため、適切な行動ができた時には即座に称賛（承認の言葉掛けや合図等も含）するようにする。

A：抑制機能に着目し、自分のすることが分かるように、毎時間の流れを「楽器練習→発表→見合う」というように固定する。合奏では担当パート毎の楽譜を用意して自分の役割を明確にする。また、座席配置を工夫（KさんやHさんが視界に入りづらい位置）したり、パート毎に練習する教室を分けたりする。

B：抑制機能に着目し、ペア活動を取り入れることで自分のすることに意識を保って活動できるようにする。また、体操時は自分の立ち位置を固定することで体操に集中できるようにする。ランニング等の自由度の高い場面では、教師が本人に言葉掛けをしたり一緒に走ったりすることでKさんやHさんへ意識が向かずに活動できるようにする。

C：抑制機能および（情報の更新）に着目し、自分で記憶を保持したり現在の活動に無関係である情報を抑制したりして本来の活動に持続して取り組めるように、デジタル表示のタイマーを使用して取り組むようにする。朝の支度は5分、帰りの着替えは7分とし、それぞれタイマーを見える位置に置いて活動することで、自分の現在している活動に意識を保って活動できるようにする。また、達成したときにはジグソーパズルの1ピースをご褒美としてもらえるようにすることで、パズルを完成させたいという気持ちを持つべきことに意識を向けて取り組めるようにする。

## 3. 結果

### A：音楽

Kさんとのかかわりについては過度なかかわりがなくなり、接近した場面でも適切にかかわることができた（表1）。一方で、Hさんと同じグループでの活動場面でHさんの衝動的な行動に対しての過度なかかわりが多く見られた（表2）。活動を一定にすることや全体指導での席の配置による抑制機能の成果は認められるものの、役割を明確にするための楽譜による効果は認められなかった。

### B：保健体育

自分がすべき活動に気持ちを向けて取り組むことができた。KさんやHさんとペアになっての活動時であっても適切にかかわりながら活動することができた。準備運動などの全体での活動時に、KさんやHさんへ意識が逸れたり過度にかかわったりする場面もあった（表3、表4）が、一度の注意で切り替えたり自分で堪えて活動を続けたりした。

C：日常生活の指導

それまで時間が掛かって全体の活動に間に合わなかったことがほとんどなくなり、時間を守って活動することができた。着替え場面においては時間を意識しすぎるあまりに身だしなみまで意識が向かずに教室に戻ってきてしまうこともあったが、概ね正しく着替えることができた。

表1 Kさんとのかかわりの様子

日付	Kさんとの 接近場面 (回)	適切な かかわり (回)	過度な かかわり (回)	生徒の様子
<b>「楽器に親しもう」…歌唱、鑑賞は全員。鍵盤ハーモニカは別グループ。</b>				
12/8 (火)	1	1	0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歌唱中⇒Kさんが1.5メートルほどの距離に近付いたが、寄って行ったり声を掛けたりすることはなかった。</li> <li>・歌唱中⇒声を出してはいるが、スクリーンを見る、手元の歌詞を見る、隣の友達の歌詞をのぞき込もうとするなど注意散漫な様子がある。</li> </ul>
12/10 (木)	Kさんが修学旅行のため不在			
12/15 (火)	1	1	0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鑑賞のプリント記入時⇒Kさんの支援をしている教員に手伝いを求めに来たが、Kさんに対して何のアクションもなく教師を連れて自分の席に戻る。</li> </ul>
12/17 (木)	1	1	0	歌唱⇒Kさんが前方スクリーンに行っても声を掛けることなく歌っている。
12/22 (火)	1	1	0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象生徒の近くにあった楽器を入れるかごにKさんが楽器を戻しに行ったが、反応せず。</li> </ul>

表2 Hさんとのかかわりの様子

日付	Hさんとの 接近場面 (回)	適切な かかわり (回)	過度な かかわり (回)	生徒の様子
<b>「楽器に親しもう」…歌唱、鑑賞は全員。鍵盤ハーモニカは同グループ。</b>				
12/8 (火)	2	2	0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歌唱前⇒離席したHさんに「Hさん座ろう。」と着席したまま言葉を掛ける。前に来ようとしたHさんに気付き、Hさんの方を向いて1歩外側に動いた。Hさんが席に戻ったため、再び歌う。</li> <li>・鍵盤ハーモニカ中⇒Hさんの離席時、自分は動かずに教師に「先生、Hさんが。」と伝える。</li> </ul>
12/10 (木)	3	2	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業開始前⇒Hさんの腕を持って話し掛ける。</li> <li>・歌唱⇒Hさんが動くとき目で追う。(8秒)</li> <li>・鍵盤ハーモニカ⇒Hさんが教室後方に行くと、「Hさん、〇〇してダメだよ。」と言うが、本人は自分の席からは動かず練習を続ける。</li> </ul>
12/14 (火)	約20分間	0	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鍵盤ハーモニカ⇒Hさんが動く度に反応し、攻撃的な口調になったり、腕をつかんだりする。</li> </ul>
12/17 (木)	約20分間	0	6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歌唱中⇒自分の前をHさんが走って行ってからHさんをにらむように見ている。</li> <li>・鍵盤ハーモニカ⇒Hさんの声、動きにその都度反応し、睨む、Hさんの椅子を押す、攻撃的な口調で注意する。</li> </ul>
12/22 (火)	2	2	0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歌唱中⇒席の前を横切ったHさんを目で追う。6秒後Hさんが着席すると再び歌詞カードを見る。</li> </ul>

表3 Kさんとのかかわりの様子

日付	注意回数	生徒の様子
12/7 (月)	0回	・過度なかわり場面はなし。
11 (金)	0回	・過度なかわり場面なし。
14 (月)	0回	・対戦の観戦中に「Kさん頑張れ。」と適切なかわり。
18 (金)	0回	・Kさんとペアでラリー練習をするも、過度なかわりを行うこともなく「やろう。」「がんばれ。」など適切な言葉掛けをしてかわる。
21 (月)	0回	・ラジオ体操中にKさんの方を何度も見るが、すぐに教師を見て（「自分のことをするといいんだよね。」と確認するように）頷いて体操を続ける。

表4 Hさんとのかわり

日付	注意回数	生徒の様子
12/7 (月)	1回	・ペア学習中は風船バドミントンに集中。 ・対戦を観戦中にHさんの隣に座ってHさんの顔をのぞき込む。 (一度注意を受けると「〇〇さん頑張れ。」と応援をする。)
11 (金)	0回	・Hさんとペアでラリー練習中、Hさんが走って行ってしまうと、優しく連れてきて再びラリーを行う。 ・対戦観戦中にHさんの隣に座るが、過度なかわりはない。
14 (月)	0回	・Hさんとペアでラリー練習。Hさんが走ると追いかけるが、過度なかわりではなく、適切に声を掛けて手をつないで戻ってくる。そしてすぐにまた練習。 ・対戦の観戦中は、Hさんを気にすることなく他の人を応援。
18 (金)	1回	・全体でのランニング中に蛇行・減速してHさんに近寄っていく。一度注意を受けると自分のペースで走ったり、速く走っている友達についていくなどしてランニングに集中。
21 (月)	0回	・Hさんが激しく動き回るので意識は向き、視線でHさんを追いつつも自分のしている活動に取り組む。

表5 朝の支度と帰りの着替えの記録

日付	朝の支度	帰りの着替え	日付	朝の支度	帰りの着替え
12/7 (月)	○	○	14 (月)	○	○
8 (火)	○	× +30秒	15 (火)	○ 3分33秒	○
9 (水)	○	○	16 (水)	○ 3分26秒	○
10 (木)	○	○	17 (木)	○ 3分27秒	○
11 (金)	○	○	18 (金)	○ 4分33秒	○ 4分27秒

朝の支度：5分設定

帰りの着替え：7分設定 12/7(月)、8(火)7分

9(水)～ 移動時間を考慮し7分20秒に変更



#### 4. 考察

##### (1) 各実践について

###### A：音楽

学習の流れを一定にすることで、学習への見通しを持つことができ、安心して（注意が逸れずに）学習に取り組める一因になったと考えられる。また、他の人と違う（気になる）行動をする生徒を視界に入らないようにすることで意識を授業（本来のすべきこと）に維持することにつながったと考えられる。一方で、自分のすることを明確にするために用意した歌詞カードや楽譜については、本人が一人で使えるもの（対象生徒は平仮名の読み書きを学習している段階であり、音階名をふった楽譜と鍵盤の位置の一致に時間が掛かる）でなかったことで、自信を持って取り組むことができずに逆に不安感から注意が逸れやすくなったこともHさんへ意識が逸れる一因になったと考えられる。また、そのような不安感のもとでは、物による支援ではなく人による支援を求めることが、より注意散漫状態やHさんへの攻撃的なかわりにつながったと考えられる。

###### B：保健体育

ペアでのラリー練習など、自分の動きを継続しなければいけない活動であったことで、KさんやHさんとのペアでの活動時であっても、KさんやHさんの行動ではなくラリー練習に意識を維持することができたのだと考える。また、バドミントンではあるが生徒の実態に応じてシャトルだけでなく風船も用意して選択できるようにした。対象生徒にとってはシャトルだと難しくすぎて注意が逸れる原因になったと思われるが、風船を使ったことで一人で確実に打ち合うことができ、「自分でできて楽しい」という気持ちが本来の活動への記憶の保持と他者の行動に関与したい気持ちの抑制につながったものと考えられる。また、準備体操時の場所を固定することで、「この場所にいるときは体操」のように場所とすることを結びつけて記憶の保持（情報の更新）につながったものと考えられる。さらに、ランニングや片付けなどの自由度の高い場面においてもKさんやHさんとのかわりで過度なかわりがほとんど見られなかったことについては、過度にかかわってしまいそうな場面の前に教師に視線を向けるなどの動きが見られることから、自分がすべきことをしなくてはいけないことや他者が嫌がるようなかわりはしてはいけないことが身に付いてきており、昨年度から指導支援を継続してきたことで抑制機能が向上しているものと考えられる。

###### C：日常生活の指導

タイマーという目に見えてしかも表示が動くことで、常に自分がしていることに意識を持ち続けることが出来た。さらに、時間を守るとご褒美（パズルの1ピース）がもらえてパズルが完成していくことで期待感や達成感を持って活動できたことが今回の成果につながっているものと考えられる。今後は、物としてのご褒美がなくても自分から意識してすべきことに集中して活動できるようにしていく必要がある。その一歩として、チェック表にして月に一回サインをして達成感を味わえるようにするなどしていく。

##### (2) まとめ

Kさんに対する過度なかわりはなくなった。これは、新型コロナウイルス感染症対策をしながら授業を行っていることが要因と考えられる。昨年度までより広い教室で授業を行うようになったこと（横幅昨年比2倍以上）、個々の座席間隔を広げた（前後1メートル以上）ことで、視界に入っ

でも直接声を掛けたり近寄ったりできなくなったことが挙げられる。また、「密はダメ。」ということをも本人が日常生活から自覚していることで、ソーシャルディスタンスを保つことが増えたことも要因であると考えられる。その分、より近くにいるHさんへ直接はかかわらないが常に視線をむけるようになった。結果的に、気になる対象生徒が変わったこと、ソーシャルディスタンスの観点から直接対象生徒に触れることはなくなったが、Kさん、Hさんが何か行動を起こしたときに目で追ってしまうという根本的な課題に対しては大きな変化は見られなかった。

A、B、Cを通して、対象生徒の過度なかわりは集団で逸脱行動をする生徒に起因することが確認され、逸脱行動が視界に入らないようにすることで活動への意識を保持できることが分かった。そのため、まずは座席配置などの物理的環境を整えることの重要性が確認できた。また、仮に他生徒に逸脱行動が見られた場合でも、学習内容によっては活動への意識を保持できることも分かった。本人が活動に乗り込めるような課題設定を行うことが重要で、本人の興味関心はもちろんだが課題の困難度やゲーム的な課題提示の有効性が認められた。Aの楽譜は対象生徒にとって読み取ることが難しく（困難度高い）、Bのバドミントンではシャトルではなく風船を使用したことで容易（困難度低い）になったことが過度なかわりの頻度の違いにつながったものと考えられる。一方で、学校生活の様子から、容易すぎる課題でも注意が逸れやすくなると考えられる。Cでは「〇分以内」という課題提示をしたことでゲーム的な感覚になり、クリアするという目標（やるべきこと）が明確になって自分のすべきことに集中できたものと考えられる。

これらのことから、座席配置等の環境の整理や適切な負荷の課題設定などの認知的実行機能、動機付けなどの情動的実行機能を組み合わせて指導支援をすることの有効性が確認された。

# 養護共同研究部会

## 部会員

附属幼稚園：奥山 広美  
附属小学校：鈴木 恵子  
附属中学校：千葉久美子  
附属特別支援学校：阿部菜々子  
大学：新井 猛浩 ◎畔柳まゆみ

### 1 研究テーマ

養護教諭養成における救急処置技術の向上をめざして

### 2 本年度の取組

全国国立大学附属連盟養護教諭部会研究集録紙上発表原稿として、これまでの取組をまとめる。

### 3 実践及び考察

次頁に示す

# 養護教諭養成における効果的な養護実習指導の在り方

## —養護実習の救急処置に焦点をあてて—

山形大学附属幼稚園	奥山 広美
山形大学附属小学校	鈴木 恵子
山形大学附属中学校	千葉 久美子
山形大学附属特別支援学校	阿部 菜々子

### I はじめに

山形大学は、明治11年の山形師範学校の開校に始まり、昭和24年（1949年）に新制国立大学として設置された。現在は人文社会科学部、地域教育文化学部、理学部、医学部、工学部、農学部の6学部と、7つの大学院研究科を備えた総合大学である。平成31年には、創立70周年を迎え、歴史と伝統を受け継いでいる。昭和50年に、1年課程の養護教諭養成機関として、養護教諭特別別科が発足した。学校保健を担う専門家を養成するために、看護師免許取得者を対象に、看護師養成課程で学んだ専門性を活かしつつ、養護教諭として地域社会における教育力の向上に貢献できる人材育成に取り組んでいる。毎年8月下旬から9月中旬にかけて3週間の養護実習があり、健康教育や保健管理の展開について実際に学ぶ機会となっている。実習は、山形市内の小・中学校に依頼している。養護教諭養成課程のある大学の附属学校園養護教諭として、理論から実践への橋渡しの役割を担っているが、最も重要な課題として、救急処置に焦点をあてて指導に取り組んだ。

### II テーマ設定の理由

#### 1 養護実習と附属学校園養護教諭のかかわり

附属学校園の養護教諭は、養護実習における、事前指導（8月上旬）と事後指導（9月下旬）を担当している。詳細は実践の頁で述べる。

#### 2 山形大学と附属学校園養護教諭の共同研究

山形大学と附属学校園は、共同研究を推進している。附属学校園の養護教諭は、「養護共同研究部」に所属し、養護教諭特別別科担当の大学教員とともに共同研究を行っている。近年は、養護実習についての研究を継続しており、令和元年度より「救急処置技術の向上」を研究テーマとして取り組んでいる。

#### 3 学生の養護実習に対する意識

学生には、実習前と実習後にアンケート調査を実施している。アンケート調査から見える、養護実習に対する学生の認識は次の通りである。

養護実習で学びたいこと（R2実施 実習前のアンケートより抜粋）

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・保健室経営</li><li>・効果的な保健指導の仕方</li><li>・学校の中での養護教諭の役割</li><li>・他職員との連携の取り方</li><li>・健康課題の把握の仕方</li><li>・養護診断と救急処置の仕方</li><li>・健康相談活動の仕方</li><li>・悩みや不安を抱える子どもへの対応</li><li>・不登校(傾向)への対応</li></ul> |
|---|

養護実習で心配なこと、不安なこと（R2実施 実習前のアンケートより抜粋）

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・救急処置がうまくできるか不安(多数)</li><li>・子どもとうまくかかわれるか不安(多数)</li><li>・実習前に準備したり、勉強したりしておいた方が良いことの内容(多数)</li><li>・実習記録の書き方</li><li>・学校の他職員とのかかわり方</li><li>・全体的に実習内容が不明確</li></ul> |
|--|

養護実習前に学んでおくべきだったこと(R1実施 実習後のアンケートより抜粋)

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・養護診断、来室時の対応、救急処置(多数)</li><li>・保健指導 指導案の書き方や展開、指導内容についての知識(多数)</li><li>・発達段階</li><li>・発達障害児童、支援が必要な児童へのかかわり</li><li>・校内連携</li><li>・環境衛生検査</li><li>・健康診断</li><li>・保健学習の内容</li><li>・スポーツ振興センター</li></ul> |
|--|

養護実習で学びたいことのひとつに救急処置をあげる学生が多いが、反面実習前は救急処置への不安を抱えている学生が多い。養護実習を終えてからも、養護診断や来室時の対応、救急処置については、実習前に学んでおくべきだったと振り返っている学生が非常に多く、救急処置に対する学生のニーズが高いことが伺えた。

養護実習において、附属学校園の養護教諭がかかわれる環境であること、大学と連携した研究でも養護実習をテーマにしていること、学生のニーズを統合して検討した結果、本研究テーマを設定するに至った。

### Ⅲ 研究の目的

学校現場に生きる救急処置技術の向上を目指し、大学で学ぶ理論と現場での実践を結びつけるための効果的な養護実習指導の在り方を探る。

### Ⅳ 研究の方法

#### 1 プロセスレコードの分析と課題把握

- (1) 学生は養護実習中に対応した事例から、1つの事例を取り上げ(外科、内科のどちらでも可)、時系列にそって児童生徒の反応と養護教諭(学生、養護教諭)の対応を記録する(プロセスレコード)。
- (2) 学生は対応を振り返って、気づいたことや反省を記入し、自分の対応の課題を明らかにする。
- (3) 養護実習事後指導で、プロセスレコードをもとに、救急処置場面での対応や児童・生徒理解について意見交換し、附属学校園の養護教諭は指導・助言を行う。
- (4) 養護教諭特別科担当の大学教員と附属学校園の養護教諭で、プロセスレコードを分析し、課題を把握するとともに、課題解決に向けた取り組みを検討する。

#### 2 養護実習後のアンケート「実習を終えて」による、救急処置の考察と課題把握

- (1) 学生からの養護実習後アンケートを集計する。
- (2) 養護教諭特別科担当の大学教員と附属学校園の養護教諭でアンケートを考察し、課題を把握するとともに、課題解決に向けた取り組みを検討する。

#### 3 養護実習事前指導の指導内容を整理し、救急処置で扱う指導内容を再検討する。

## V 実践

### 1 プロセスレコードの分析結果

学生が提出したプロセスレコードを分析してみると、次のような課題が見えた。

- ・問診が形式的で不十分なため、必要となる養護検診につながらない。
- ・児童生徒の言葉で表現されたものを、学生の自己解釈で返している場合が多い。
- ・問診が反映された養護診断に至っていない。
- ・フィジカルアセスメントの力量が不足している。
- ・一般的な保健指導で終わっており、問診により児童生徒から引き出された言葉や内容を根拠とした指導が足りない。

山形大学名誉教授であり、養護教諭特別科で教鞭をとられた杉浦衛邦先生は、その著書の中で『養護診断に習熟するもっともよい方法は、救急処置を求めて保健室に来た児童・生徒に対する自分の対応状況、特に発言内容をテープにとって、これを再生しながら検討を加えてみることである』<sup>1)</sup>と述べている。学生に、実習中に体験した救急処置場面をプロセスレコードに起こす課題を出す意図の一つは、それを記録し、自分の対応を振り返ることで得る学びが大きいと考えているからである。以下に、学生が提出したプロセスレコードの事例を紹介する。

表 1 学生が提出したプロセスレコードの事例 1 (個人が特定できないよう一部改訂)

場面の概要 小学2年生、男子。3校時目に「気持ちが悪い」と言って来室した。			
時間	児童生徒の訴えや行動・反応	養護教諭の対応	気づいたことや反省・感想
11:30	①気持ちが悪いです。 ③はい。 ⑥(首をかしげる) ⑧うん。 ⑩ここ。(臍部周辺) ⑫中間休みから。 ⑭昨日出た。 ⑮昨日の夜。すっきり出た。 ⑯へー。	②熱を測ってみるね。 ④36.5℃だね。熱はないね。 ⑤気持ち悪いってどんな感じ? ⑦ムカムカする? ⑨どこら辺?触ってみて。 ⑪いつからかな? ⑬今日、うんち出た? ⑭昨日のいつ出たの?すっきり出た? ⑮次は、ドキドキを見るよ。手首のここを触ると、動いているのが分かるんだよ。 ⑰90回だね。ドキドキも大丈夫だよ。	・吐きそうであれば、ベースンや袋の準備が必要なので、嘔気の確認が必要だと助言を受けた。 ・気持ち悪さの状態を確かめた点はよかったと助言を受けた。 ・排便があっても少量であると便秘の可能性があるので、すっきり出たかを確認した方が良いと教えてもらっていたので、確認できてよかった。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">(中略)この後、睡眠や朝ごはんについて問診したり、好きなテレビについて談笑したりした。</div>		

11:55	⑱ うん。	⑲ そろそろ教室に戻れるかな？	・熱や脈も正常で、顔色もよく、談笑する様子も見られたため、教室復帰できると判断して声をかけた。
-------	-------	-----------------	---

表2 学生が提出したプロセスレコードの事例2（個人が特定できないよう一部改訂）

場面の概要 中学校2年生、女子。バスケットボールの授業で突き指をしたと言って来室した。			
時間	児童生徒の訴えや行動・反応	養護教諭の対応	気づいたことや反省・感想
14:50	① 突き指をしました。 ③ ここ(左薬指) ⑤ 痛いです。 ⑦ バスケットでパスうけて。 ⑨ こうやってパス受けて、そしたら反対側にぐにやって。 ⑪ 触ると痛い。 ⑬ うん、痛い。	② どこを突き指したの？ ④ 痛いかな？ ⑥ どうして突き指したの？ ⑧ どうやって受けたの？ ⑩ ぐにやってなったんだ。痛かったね。どの位痛い？ ⑫ ここ触ると痛い？ (腫脹は軽度。発赤あり。) ⑭ これは痛い？(介達痛検査)	・どんな痛みかを問診する必要があった。 ・痛いと答えているのだから、緊急性の判断のためにも痛みの程度の間診を優先すべきだった。
14:10	⑮ それは大丈夫。痛くない。これ位しか曲げられない(第一関節まで) ⑰ はい。	⑯ それ以上曲げると痛いんだね。 ⑲ 養護検診(顔色異常なし、圧痛あり。介達痛なし。変形、骨折線なし)	・骨折の場合ショック症状が出ることがあるので、顔色、冷汗、気持ち悪さの有無についても問診すべきだった。
15:10	⑳ はい。	㉑ 冷やして様子をみよう。	

## 2 養護実習後のアンケートの集計と考察結果

学生のアンケートを救急処置の段階ごとに集計し、救急処置に関する項目を考察した。

表3 養護実習後の救急処置に関するアンケートの記載内容と考察

段階	養護実習後のアンケートへの記載内容	考察
養護検診	・問診からの必要な情報収集が難しかった。(子どもが答えてくれない。うまく表現できない。正確な情報が聞き出せない。) ・来室者が多かった時の、優先順位の判断が難しかった。	・養護検診が難しかったと振り返る学生が多い。的確な養護診断につながるための問診や検診技術を身につけられるような指導が必要である。
養護診断	・不定愁訴で何度も来室する子どもへの対応の判断が難しかった。	・養護診断は、経験を積んだ養護教諭であっても迷うことが



	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教室に復帰させるか、保健室で休養させるか、早退させるか、受診すべきかどうかの判断が難しかった。</li> <li>・視診では異常ないが、子どもが痛みを訴える時の判断が難しい。</li> </ul>	<p>ある。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・的確な診断をするためには、養護検診が重要になるので、養護検診をしっかりとできるように指導する必要がある。</li> </ul>
<b>養護処置</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・消毒液を使用するかどうかの判断や衛生材料の選び方に迷った。</li> <li>・基本的な救急処置の仕方を事前に学んでおくべきだった。</li> <li>・眼の負傷、歯牙欠損、骨折の場合の処置方法、突き指の固定の仕方、三角巾の使い方を学んでおくべきだった。</li> <li>・事前に学んでいても、その場になると不安であった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・救急処置の基本を指導する必要がある。</li> <li>・救急処置のために用意してある物品や処置の方法は、各校で違うこともある。まずは、実習校の様子を見て、実習校でのやり方を学ぶことを学生に伝える。</li> </ul>
<b>養護指導</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・けんか等、相手がいる時の対応に困った。</li> <li>・重症ではないが、子どもが休養したいと訴えた場合の対応に困った。</li> <li>・処置した根拠について、子どもに説明できるようにしておくべきだった。</li> <li>・子どもが自分でできることは事前に行うよう伝えること（例えば、擦過傷の水洗い）も、養護教諭の役割であると学んだ。</li> <li>・勉強や部活が精神的な負担となって身体症状が現れた場合の対応もできるようになりたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・この部分での教育的指導は、養護教諭だからこそそのものであり、養護教諭の存在意義を高める。</li> <li>・実習校でどんな養護指導が行われているのかを実習で見てくるとも学びにつながる。</li> <li>・事前指導で養護指導についても触れていく。</li> </ul>
<b>後処理</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級担任、教科担任への連絡や報告が滞った。</li> <li>・気になる子どもについて、日頃の担任との情報交換が必要であると感じた。</li> <li>・スポーツ振興センターや社会保障について学んでおくべきだった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内での連携の必要性を学べたことはよかった。</li> </ul>

### 3 事前・事後指導の内容

#### (1) 事前指導

表4に示したのが、事前指導の内容である。ひとつの講義を、1人の養護教諭が担当しており、指導内容の詳細は担当養護教諭に任されている。この中で救急処置は、講義3で扱うことになっている。

表4 養護実習 事前指導の内容

	講義1	講義2	講義3
	<b>学校と学校保健</b>	<b>保健室経営</b>	<b>養護教諭の職務</b>
<b>事前指導</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 養護実習日程</li> <li>2 養護実習の目的及び目標</li> <li>3 学校教育に対する理解 実習日誌の記入</li> <li>4 実習課題について</li> <li>5 その他の留意事項</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 保健室経営について</li> <li>2 健康教育について</li> <li>3 保健指導の実際</li> <li>4 保健指導案の記入の仕方と保健指導例</li> <li>5 その他</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 救急処置について</li> <li>2 健康相談活動の実際</li> <li>3 ロールプレイ</li> <li>4 プロセスレコードの記入の仕方</li> <li>5 その他</li> </ol>


令和元年度に行った事前指導では、事例を示し、グループで養護教諭役、児童生徒役、観察者になり救急処置場面のロールプレイを行った。令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、オンラインでの事前指導となったため、グループに分かれてのロールプレイが難しくなった。前年度の学生のアンケートから、救急処置の基本を学びたいという声があり、救急処置の基本的な知識を指導することが有効であると考え、指導内容を変更した。令和2年度の事前指導で使用したスライドの中から、一部を抜粋して紹介する。

・救急処置を学ぶのに、参考になる書籍の紹介

**救急処置について 問診**

- ▶ 発症時期(いつ・いつから)
- ▶ 部位(どこが)
- ▶ 性状(どんなふう)
- ▶ 原因(どうして)


この4つの項目はいつも忘れず問診出来るようにしておこう。



**救急処置について**

▶ 養護教諭のための診断学<外科編><内科編>  
山形大学名誉教授・医学博士 杉浦守邦著  
東山書房

プロセスレコードを元に対応を分析している事例が多く、現場で役に立ちそうなものが多い。  
山形大学養護教諭特別科で杉浦先生のご指導を受けた世代(50代後半)の先生方はとても救急処置の対応がしっかりされています。



・救急処置技術の紹介

**救急処置について 検診・観察**

- ▶ 熱だけでなく、脈も必ず測定しよう。
- ▶ 腹痛は基本は触診を。
- ▶ 打撲や骨折疑いはまず自分で動かせる所を確認してみよう。
- ▶ あごの経過が分かるようになると何かと便利。
- ▶ 記録をするくせをつけよう。
- ▶ 時間を置いて確認する。中間休み、昼休み、帰る前。
- ▶ 場合によっては校医の先生に電話等で相談する。

**救急処置について**

▶ 村山地区私立高校の養護部会作成

養護教諭が不在でも適切に対応出来るようにシンプルに分かりやすく作成。データも送付しているので卒業後も活用下さい。

これだけは知っておきたい

**救急時の対応**

☆すり傷・切り傷☆

① 出血時は止血する	傷から出血している時は、傷に清潔なガーゼやハンカチを当てて、直接傷を圧迫(指にあてたガーゼの上から押し)、止血する。(5分程度は圧迫を続ける)
② 傷口を洗う	傷が汚れているときは、水道水などきれいな水でよく洗い流す。洗浄後は清潔なガーゼを当てる。必要に応じて消毒する。

※傷口を心臓より高くて圧迫すると、止血効果が高い。

受診する場合は外科・皮膚科・形成外科へ

特に「出血が止まらない」、「痛みがだんだん強くなって」、「傷が大きい」深いときは受診する。

**救急処置について**

☆鼻出血☆

① 止血する	椅子に座らせ、下を向け、小鼻を10分～15分間つまませる。(血液が凝固してゼリー状になって出なくなるが、それは全く心配ないのでティッシュで拭き取る)。 注 喉に流れた血液は飲み込まず吐かせず。
② 安静にする	止血後も、2～3時間は運動や入浴を控え、安静にする。また、鼻を強くかまないように注意する。



※ 再出血したときも①の対応を行う。鼻は強くかみすぎないように注意。

受診する場合は耳鼻科へ

上記の応急手当てを行っても止血しない時、また止血しても間もなく出血する場合や小鼻の圧迫によっても血液がのどの方に落下する時は、医療機関を受診する。

母指圧法

テーブルや机などに肘をつけて止血すると楽

**救急処置について 緊急時適切に対応するために**

▶ 疾病を持っている児童生徒がいる場合は対応マニュアルの作成

てんかん  
1型糖尿病  
食物アレルギー  
自己導尿 など

▶ 定期的な研修  
心肺蘇生法 AED エピペン

主治医に指示書や診断書をもったり、必要に応じて主治医訪問したり、保護者と面談したりして作成する。  
近隣の養護教諭や特別支援学校の養護教諭に相談を

(2)事後指導

事後指導の内容は、表5に示した通りで、講義2と講義3は学生を4つのグループに分け、それぞれのグループに附属学校園の養護教諭が入る。講義2では学生各自がプロセスレコードを持ち寄り、救急処置の振り返りを行っている。附属学校園の養護教諭は、プロセスレコードを含め、養護実習後の指導と助言を行っている。

表 5 養護実習 事後指導の内容

	講義 1	講義 2	講義 3
事後指導	<b>全体会</b> 1 課題提出 2 日程説明、諸連絡 3 資料整理(ファイリング)と資料閲覧	<b>保健室来室者の理解と対応について</b> 1 プロセスレコードを活用しての振り返り 2 救急処置の反省	<b>養護実習経験の整理と反省</b> 1 養護実習全体を通して学んだこと 2 実習校の養護教諭から学んだこと 3 指導、助言

#### 4 今後の方向性の確認

実践を通して見えた課題を解決するため、次のことに取り組んでいくことを確認した。

- ・実習校の養護教諭に、救急処置に対する学生のニーズと課題を伝え、実習の中で救急処置への指導を強化してもらうことを伝える。
- ・プロセスレコードへの指示があいまいだったため、学生が記録したプロセスレコードを実習校の養護教諭が目を通していないケースもあった。そのため、プロセスレコードを実習校の養護教諭に見てもらおうよう学生に指示する。また、実習校の養護教諭にもプロセスレコードへの助言と指導を依頼する。
- ・大学における授業では、的確な養護診断のための問診技術を身につける演習を取り入れ、実際の保健室来室対応場面を想定した問診の実演を行っていく。

## VI 成果と課題

### 1 成果

- ・実習校に救急処置についての指導に力を入れてもらうよう依頼したことで、指導者側の意識が変わり、学生の救急処置に取り組む姿勢にも変化がみられた。特に問診をしっかりと行い、そこから養護診断に結びつけようとする学生の姿が見られた。
- ・救急処置を学ぶ上で、プロセスレコードの活用が効果的だった。学生が自分自身の対応を具体的に振り返る機会を持つことができ、さらに他の学生の事例を共有することで、様々なケースの救急処置について学ぶことができた。プロセスレコードの活用を習得しておくことで、現場に出てからも自分の対応の振り返りを行うことができると考える。
- ・養護実習指導を担当するにあたり、それぞれの指導内容が共通理解され、自分が担当する時間の指導内容が明確になり、指導時間を有効に活用できるようになった。

### 2 課題

- ・問診技術は経験を重ねることで得られる部分も大きい。実習は学生が複数名配置されているので、お互いの問診を聞きながら、実習の中で随時振り返り検討することができれば、さらなるスキルアップにつながる。
- ・事後指導で学生が持ち寄ったプロセスレコードの事例は、救急処置だけではなく養護指導を必要とする事例（けんかなど相手いる場合、不定愁訴での頻回来室、家庭環境が関わっているものなど）もあった。実習先では様々なニーズを抱えた児童・生徒が来室し、養護指導においても大切なことが異なる。現場で対応してみなければ学ぶことはできないことが多いが、養護指

導の基本的な内容とともに、対応の着眼点など対応の仕方を整理し指導していく必要がある。

- ・小規模校での実習で事例が少なかったり、指導養護教諭の経験年数の差が大きくなったりしている現状を考えると、実習中の救急処置の技術習得の学校間の差ができるだけ出ないようにするための工夫が必要である。
- ・現職の養護教諭が養護実習指導に関わっているメリットを生かし、学校ならではの「連携」という視点にも触れていけるとよい。
- ・実習校養護教諭と共通理解を図って養護実習をすすめていけるよう、連携を深める手立てを構築していく。
- ・附属学校園の養護教諭が受け持つ時間、指導できる内容は限られている。現場で働く養護教諭としてどのような指導を行うことが効果的かを今後も検討していきたい。

## VII おわりに

大学の授業での学びを、学校という現場でより深く理解すること、自らの養護教諭としての能力や適性を量りつつ今後の課題を把握し、自己の求める養護教諭像に近づくことを養護実習の目的と捉えている。養護教諭の職務は様々あるが、救急処置は経験を重ねた養護教諭であってもなお不安は大きく、経験を重ねることで力量の高まりを期待できる分野でもある。今回述べた救急処置に焦点をあてた養護実習指導の実践は、まだまだ始まったばかりであり、今後も指導とその効果を分析しながら実践を重ねていく必要がある。養護教諭を目指す学生の養成に携わることが、私たち自身の養護教諭としての資質を高める機会となっている。養護実習で、実習の目的が達成され、ひいては学生の「養護教諭になりたい」という志望が高まるよう、今後も学生のニーズに沿った指導を行っていきたいと思っている。

## 参考・引用文献

- 1) 杉浦守邦 改訂 養護教諭のための診断学<外科編> 東山書房 2010
- 2) 杉浦守邦 改訂 養護教諭のための診断学<内科編> 東山書房 2012
- 3) 三村由香里、岡田加奈子 保健室で役立つステップアップフィジカルアセスメント 東山書房 2013
- 4) 村山地区私立高校養護教諭部会 救急時の対応

(文責 畔柳まゆみ)

### Ⅲ. 大学・附属学校園 共同研究部会申し合わせ

## 共同研究推進部会申し合わせ

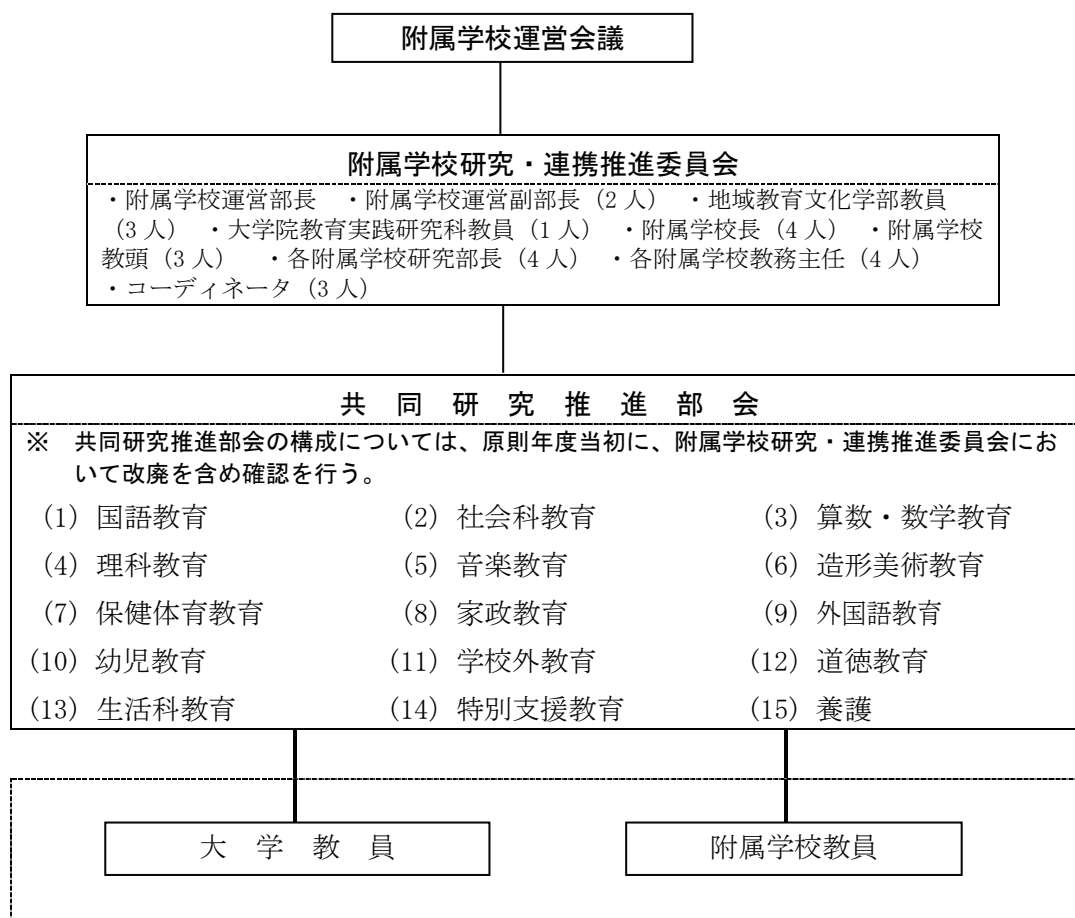
### 1. 目的

附属学校の重要な使命の一つとして、教育理論及びその実践に関する研究並びにそれらの実証と研究成果の地域への還元がある。これまで、附属学校は、大学と連携して附属学校研究推進委員会を設置し、その下に大学・附属学校共同研究部会を組織し、共同研究を推進してきた。

附属学校の存在意義が問われている状況の中で、平成 21 年度に附属学校研究推進委員会規則の改正を行い、大学との共同研究の更なる実質的な推進を図ってきた。

さらに、平成 28 年度には、共同研究活動及び連携活動の改善に向け、附属学校研究推進委員会及び附属学校連携委員会の 2 つの委員会を統合し、附属学校研究・連携推進委員会を設置した。

### 2. 大学・附属学校共同研究組織



### 3. 共同研究推進部会

- (1) 共同研究推進部会は、大学教員及び附属学校教員で構成する。
- (2) 共同研究推進部会への所属の確認作業は、原則年度初めに附属学校研究・連携推進委員会を通して行う。所属確認は附属学校の教員または大学の同部会員の推薦と本人の同意に基づいて行う。

なお、地域教育文化学部及び教育実践研究科の教員はいずれかの共同研究推進部会に積極的に所属するものとする。附属学校の教員は原則いずれかの共同研究推進部会に所属するものとする。

- (3) 地域教育文化学部以外の教員についても、共同研究推進部会員の推薦に基づいて共同研究推

進部会に所属することができる。

- (4) 各共同研究推進部会は2人以上で構成し、各研究推進部会に大学教員の中から選出した部長1人を置く。
- (5) 共同研究推進部会の設置及び改廃等に関する事項は、附属学校研究・連携推進委員会において決定する。
- (6) 各共同研究推進部会は、年度当初に研究テーマを決定の上共同研究を行い、年度末に附属学校研究・連携推進委員会に研究結果報告を行うものとする。各共同研究推進部会の研究テーマは、各附属学校の公開研究会のテーマと関連した研究テーマや、他の主体的研究テーマとする。

#### 4. 公開研究会

共同研究推進部会に所属する大学教員は、各附属学校の公開研究会において、指導助言者ではなく、共同研究者として積極的な役割を果たすものとする。



## IV. 山形大学附属学校 研究・連携推進委員会規則

# ○山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程

(平成 28 年 4 月 1 日制定)

(設置)

第 1 条 山形大学附属学校運営規程第 8 条の規定に基づく附属学校運営会議の専門委員会として、山形大学附属学校研究・連携推進委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(目的)

第 2 条 委員会は、附属学校における研究を推進し、かつ、附属学校間の連携を推進することを目的とする。

(審議事項)

第 3 条 委員会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 大学と各附属学校とが連携した教育研究及び実証の推進に関する事項
- (2) 公開研究会及び大学と各附属学校との共同研究に関する事項
- (3) 附属学校間の連携の基本的方針に関する事項
- (4) 附属学校合同研修会に関する事項
- (5) 幼小連絡会及び小中連絡会に関する事項
- (6) その他前条に規定する目的を達成するために必要な事項

(組織)

第 4 条 委員会は、次に掲げる委員で組織する。

- (1) 附属学校運営部長
- (2) 附属学校運営副部長(研究担当)
- (3) 附属学校運営副部長(教育実習担当)
- (4) 主担当教員として地域教育文化学部配置された教員の中から選出された者 3 人
- (5) 主担当教員として大学院教育実践研究科に配置された教員の中から選出された者 1 人
- (6) 附属学校の校長(幼稚園にあっては園長。以下「附属学校長」という。)
- (7) 附属学校の教頭
- (8) 各附属学校研究部長
- (9) その他委員会が必要と認める者

- 2 前項の第4号、第5号及び第9号に掲げる委員の任期は、2年とする。ただし、委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

- 第5条 委員会に委員長を置き、前条第1項第1号に掲げる委員をもって充てる。
- 2 委員長は会務を掌理し、委員会を代表する。
  - 3 委員長に事故があるときには、前条第1項第2号に掲げる委員がその職務を代理する。

(会議)

- 第6条 委員会は、委員長が招集する。
- 2 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、会議を開き、議決することができない。
  - 3 委員会の議事は、会議に出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。
  - 4 前項の場合において、委員長は、委員として議決に加わることができない。
  - 5 委員長は、審議結果を山形大学附属学校運営会議に報告しなければならない。

(部会)

- 第7条 委員会の下に、次の3つの部会を置く。各部会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

(1) 共同研究推進部会

大学と附属学校の共同研究について計画し、実施する。

(2) 幼・小・中連携部会

附属幼稚園、附属小学校及び附属中学校の連携について計画し、実施する。

(3) 特別支援連携部会

附属特別支援学校とその他附属学校の連携について計画し、実施する。

(事務局)

- 第8条 委員会に事務局を置く。事務局は各附属学校の教頭が持ち回りで担当し、委員会運営に必要な庶務を行う。

(その他)

- 第9条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

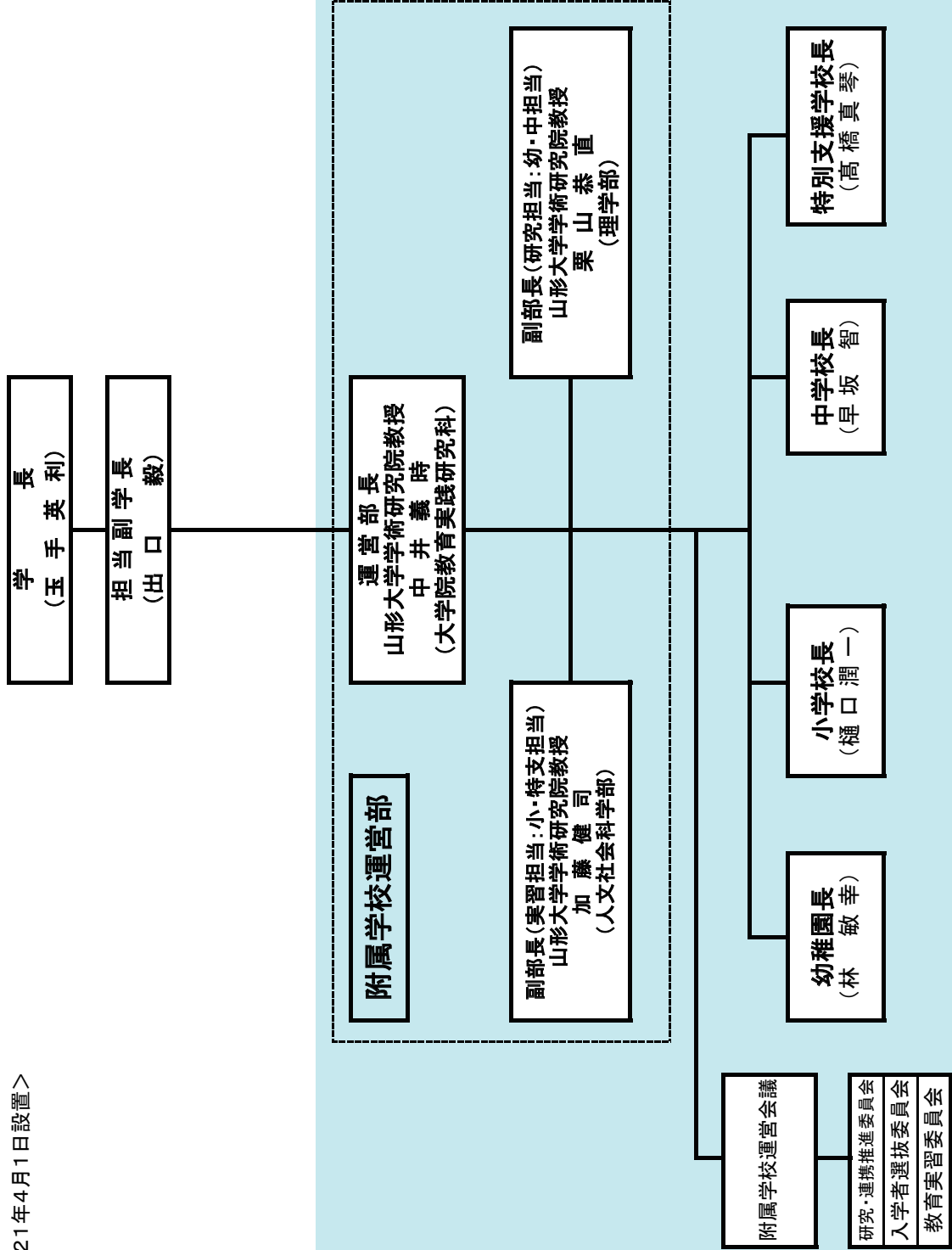
附 則

- 1 この規程は、平成 28 年 4 月 1 日から施行する。
- 2 次の規則は、廃止する。
  - (1) 山形大学附属学校研究推進委員会規則(平成 17 年 3 月 7 日制定)
  - (2) 山形大学附属学校連携委員会規則(平成 21 年 6 月 1 日制定)

## V. 附属学校運営組織図

附属学校運営組織図

<平成21年4月1日設置>



令和2年度

大学と附属学校園の共同研究報告書

発行日：令和3年2月28日

発行者：山形大学

編集者：山形大学附属学校研究・連携推進委員会

〒990-0023 山形市松波2-7-2